ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

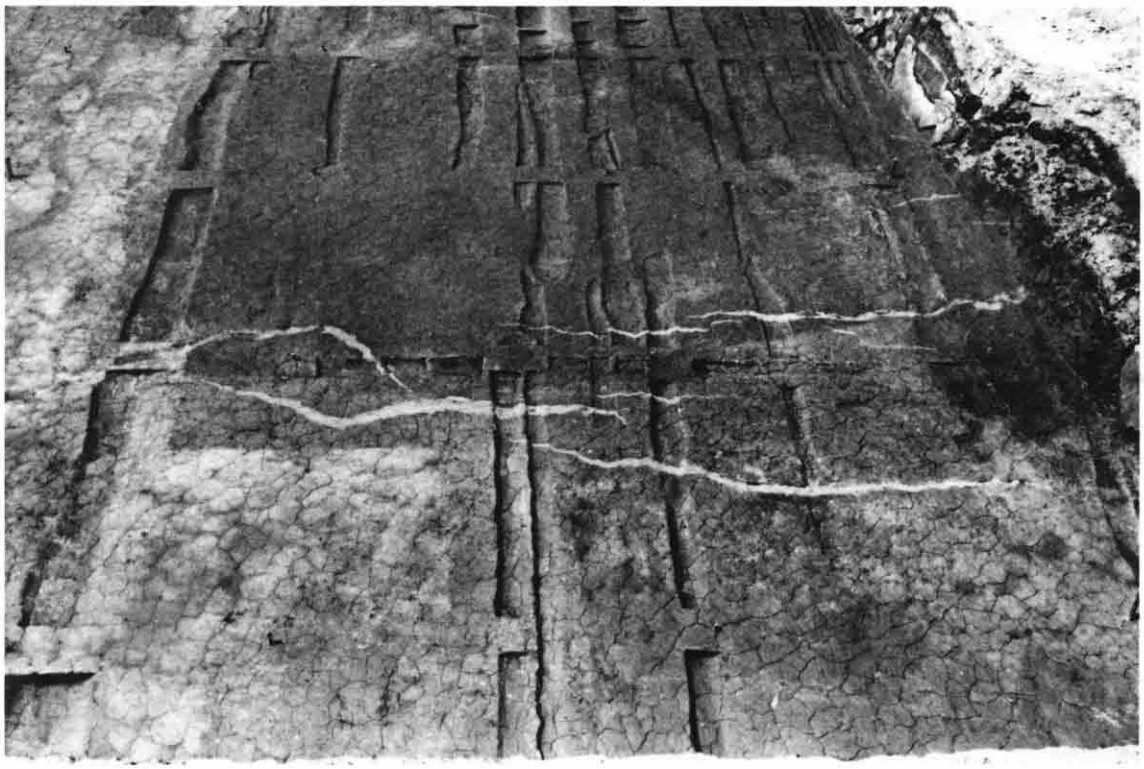
第 26 号

盤上遊戯史から見た方格規矩紋について(2) ……小泉　信吾…… 1
八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について
……岩松　保・寒川　旭…… 9
平安京右京一条三坊九町(第7次)の調査……石井　清司……18
木津町八後遺跡・恭仁京跡(作り道)の発掘調査……岩松　保……27
—昭和62年度発掘調査略報—……33
6．アバ田古墳群　10．園部城跡
7．遠所古墳群(1号墳)　11．丹波亀山城跡
8．橋爪遺跡第4次　12．興戸遺跡
9．上中遺跡第5次
資料紹介　亀岡市時塚遺跡採集の石製品類……田代　弘……46
府下遺跡紹介　38．史跡西寺跡……50
長岡京跡調査だより……53
センターの動向……61
府下報告書等刊行状況一覧……63
受贈図書一覧……68

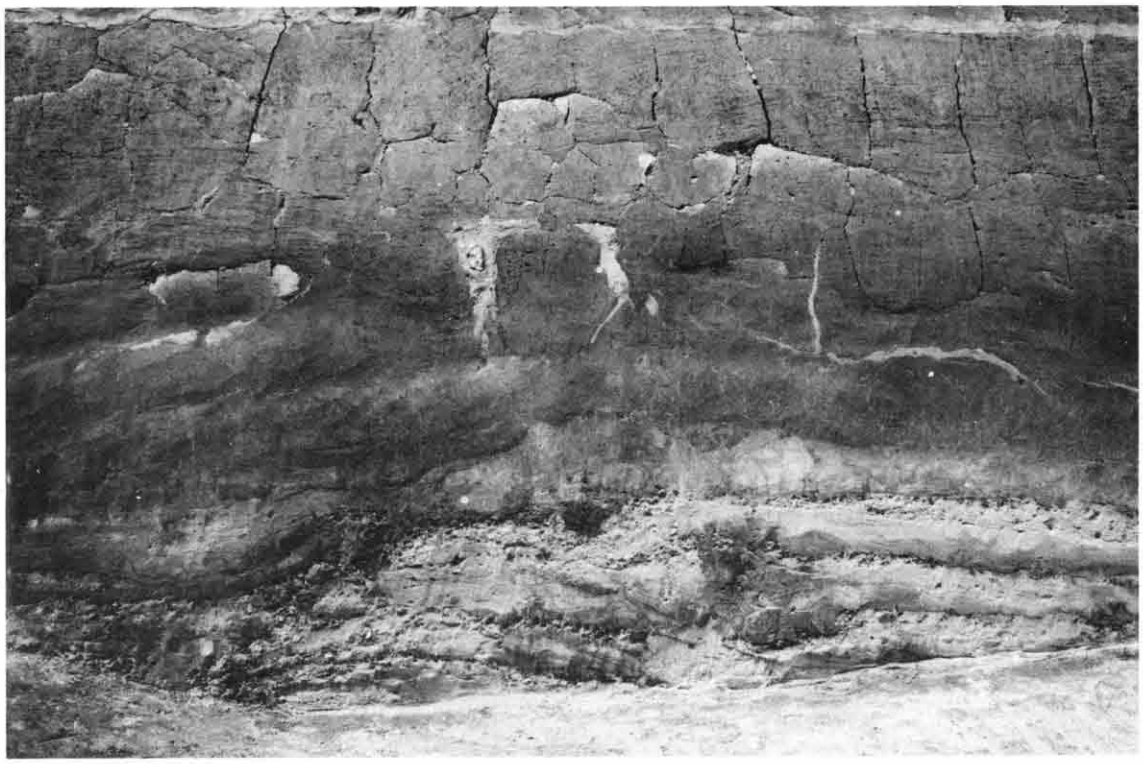
1987年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

図版第１　八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について

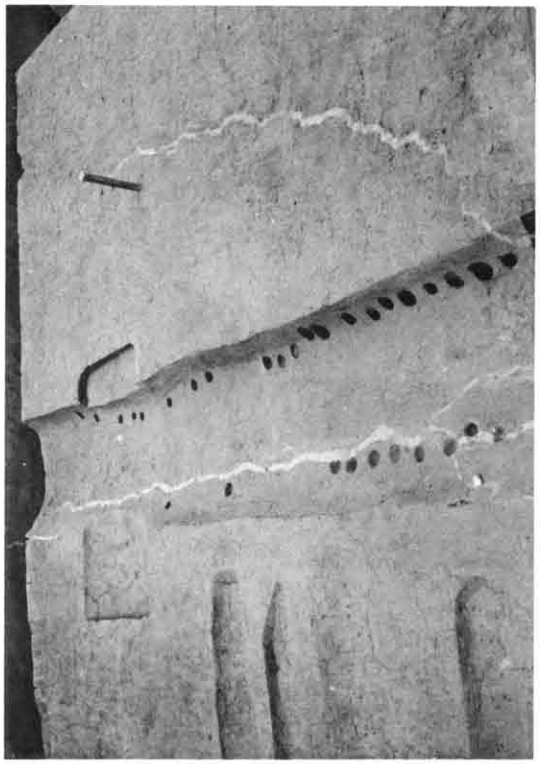


(1)　ＯＤ地区（南より）

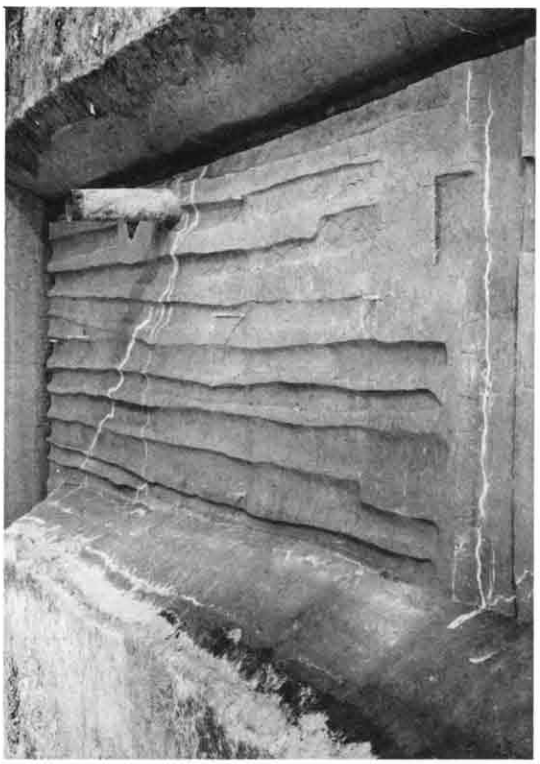


(2)　ＥＴ２－１トレンチ西壁土層（東より）

図版第２　八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について

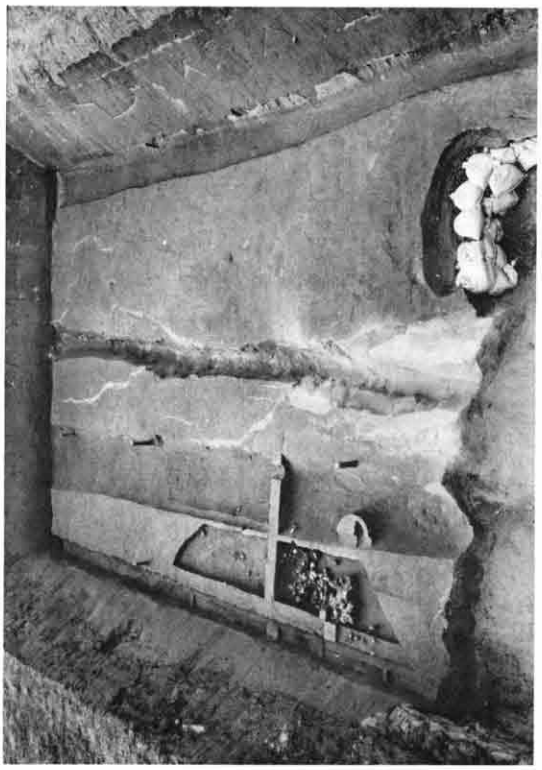


(1)　ＥＴ２－２トレンチ西半中央部（北より）



(2)　ＥＴ２－２地区東半部（西より）

(3)　ＥＴ２－２トレンチ北壁土層（南より）



(4)　ＥＴ２－２地区西部（東より）

盤上遊戯史から見た方格規矩紋について(2)

小 泉 信 吾

1. 「刻婁博局去不羊」銘の鏡について

前回，方格規矩紋を有する鏡について，その呼び名は「博局紋鏡」とする方がふさわしいとする傳挙有氏の論文(注1)に対して，遊戯史の立場から見て，やはり従来から呼ばれていた「方格規矩紋鏡」のほうが，六博の起源から考えても自然であるとした。しかし，傳挙有氏の説を裏付けると思われる資料が，西田守夫(注2)「方格規矩鏡の図紋の系譜―刻婁博局去不羊の銘文をもつ鏡について―」が提示されたので若干ふれてみたい。

鏡自体の所在は不明で，東京国立博物館蔵の拓本(第1図)によるもので，新代(A.D.9年～25年)頃のものとされている。銘文の全体は次のとおりである。

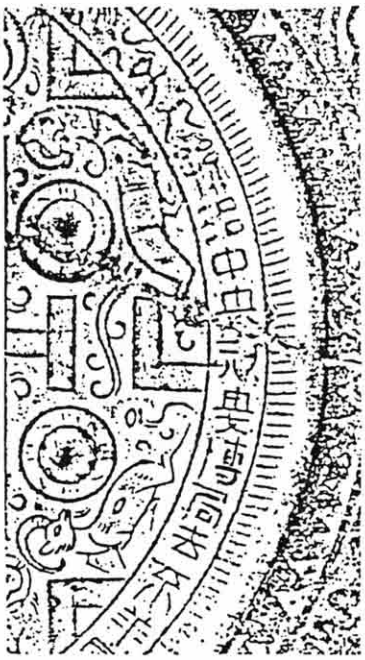
新有善銅出丹陽　和以銀錫清且明　左龍右虎掌四方　朱爵武順陰陽

八子九孫治中央　刻婁博局去不羊　家常大富宜君王　千秋萬歳樂未央

西田氏は，「新有善銅出丹陽」の初句が，京都国立博物館蔵「旧守屋コレクション(注3)」の方格規矩四神鏡の「新」の銘がある鏡6面と比較し，その語句と字体から考えて新代の鏡と推定している。また，図像ないし図紋にも顕著に見られることを指摘している(注4)。詳細な説明については，西田論文に譲るとして「刻婁博局去不羊」の銘文について考えてみたい。

たしかに銘文どおり素直に解釈するならば，「刻婁博局」は博局すなわち六博盤の規矩紋を鏡に刻んだということになり，博局紋鏡の方がふさわしい名称といえよう。しかし，それはやや短絡的な結論であって，新時代の鏡に博局から写したとする例だけでは説得力を欠くといえる。鏡に規矩紋が最初に表わされたものに，方格規矩蟠螭紋鏡等があり，時代的にみて戦国後期(前漢前半を含む)の所産である。また，蟠螭紋鏡のほかに，規矩紋を有する鏡としては，方格規矩草葉文鏡等(注5)があり，前漢中期頃のものである。方格規矩鏡はTLV紋の間に施された細線式図文によって四神鏡・瑞獣鏡・鳥文鏡等に分類されている。そしてその早い例としては，前漢末に出現し，その盛行は新から後漢時代に至り，最後は三国時代まで及んでいる。六博は方格規矩鏡が盛行しだした前漢末から後漢時代にかけて，やはり流行したものである。現在最古と考えられる出土例は，中山国王嚳(注6)(さく)と考えられる陪葬墓より出土した石製の六博盤で，戦国時代のものでB.C.310年代のころと推定されている。また年代のはっきりしたところでは湖北省・云梦睡虎地秦墓，M11号墓出土の

ものは，伴出竹簡の研究から秦始皇三十年(B.C.217年)頃とされている。「刻婁博局…」と鏡に鋳造される約2～300年前にすでに六博は行われていたのである。六博の起源が天円地方の思想を表現したものであることは筆者が述べるまでもなく先人の業績(注7)にゆだねるとして，新時代の鏡作りが，はたして天円地方の思想を解していたかは疑問である。また，論議したところで意味のないことである。やはり当時流行していた六博を，紋様として鋳出したと単純に解する方が自然と思われる。ゆえに新時代に「刻婁博局去不羊」の銘文がある鏡が存在したとしても，それは新時代の一現象であって，それがただちに方格規矩紋鏡を博局紋と呼ぶ方が相応しいとする考え方には納得しかねる。また西田氏も前掲論文で『しかし博局の図形が，溯って「宇宙図」に基づくなら，この名称もなお便宜的であることになる。』と結んでいるように，博局の図形は「宇宙図」に基づいて解釈した方がよいと思われる。また，樋口隆康氏(注8)は「方格規矩紋の意味するところがどうであれ，その文様の由来は，日時計か六博盤のいずれかであろう」とし「方格規矩文が六博の遊び方に関連して必要な図形であるならば，鏡の図案は六博から借用したといえるであろう。しかし，六博の遊び方が明らかにされない以上，それはいい過ぎかもしれない」と叙述しているように「博局紋鏡」として語るには不十分といえよう。そこで六博の遊び方や出土例について，もう一度整理して考える必要があるので管見の及ぶ範囲で記すことにしたい。



第1図　「刻婁博局去不羊」銘の鏡拓本
『MUSEUM』427号，西田論文より転写

2. 六博等の出土例

六博等の出土例については表1に示したとおりで，あまり多くの例を有しておらず，今後の出土例に期待したい。また，出土していても調査者及び学者間であまり関心がないので重要視されていない面も多少あろう。我国同様，中国においても遊戯史の研究は緒についたばかりであると思われる。さてそれはともかく，わずか数例の出土資料にすぎないが，若干の分類及び形態がさぐれるので，語ってみたい。前述したように，現在最古と考えられる例は，中山国王譽(さく)の陪葬墓出土の石製六博盤である。時期的にはB.C.310年代が推定されている。中山国は『史記』(注9)・「趙世家」によれば，B.C.414年に中山武公が建国し，

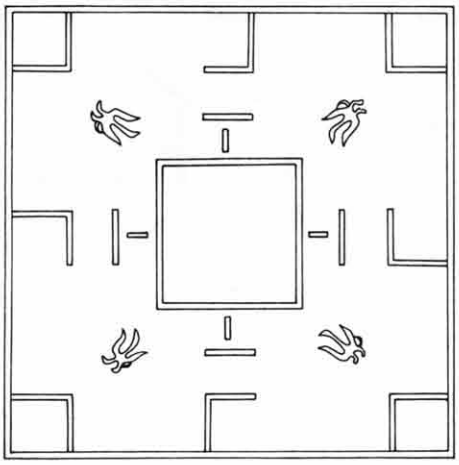
表 1

番号	遺跡名	出土品及び形態	時代及び備考
1	河北省・中山国王陪葬墓	六博盤，石製，長方形縦44.9cm・横40.1cm・重さ1.8kg	中山国王譽の陪葬墓と考えられB.C.310年頃と推定されている。
	〃 中山国王劉勝墓	甕銅製1個，直径2.2cm，球形18面体，一～十六の漢数字と驕と酒来の字が刻まれている。	武帝元鼎五年(B.C.112年)頃と考えられる。
2	湖北省・云梦睡虎地秦墓	M11号墓・六博盤，長方形縦29cm・横32cm・厚さ2cm。博，6本竹製黒漆塗り，断面弧形，長23.5cm。棋子12個骨製長方形6個，長1.4cm・幅1cm・厚さ2.4cm。正方形6個，長1.4cm・幅1cm・厚さ2.4cm。M13号墓・六博盤，長方形縦35cm・横38.5cm・厚さ3.3cm。博，6本竹製片を銅，中間には金属粉を埋めている。長19.5cm。棋子6個，紅漆1個，長方形縦3cm・横1.4cm・厚さ2cm。黒漆5個，長方形縦2.5cm・横1.2cm・厚さ1.7cm。	伴出竹簡の研究から，秦始皇三十年(B.C.217年)頃と考えられる。 13号墓も11号墓同様B.C.217年頃と考えられる。
3	湖南省・馬王堆三号墓	六博盤，正方形に近い。縦43.7cm・横45.5cm・厚2cm。L形の4本足付盤，円点が飛鳥の図案になっている。棋子大12個，象牙製白6個・黒6個，長方形縦4.2cm・横2.2cm・厚さ2.3cm。棋子小20個，灰色象牙製，長方形縦2.9cm・横1.7cm・厚さ1cm。箸42本，長箸12本，長22.7cm・直径0.4cm，短箸30本，長16.4cm・直径0.3cm。木甕(骰)1個，直径4.5cm，球形18面体，一～十六の漢数字と，驕・𩣡の字が刻まれている。	被葬者が長沙丞相軑侯，利豨の兄弟で30代の男性とされ，文帝十二年(B.C.168年)頃と考えられている。
4	湖北省・江陵鳳凰山西漢8号墓	六博盤，正方形に近い，縦21.1cm・横21.8cm・厚1.9cm。棋子12個，骨製黒6個，灰白色6個，長方形縦2.1cm・横1.4cm・厚さ1.1cm。博6本，竹製黒漆，長23.7cm・幅0.9cm。	10号墓出土木牌の紀年銘から考えて，文帝十六年(B.C.164年)～景帝後元三年(B.C.141年)頃
	〃 10号墓	木骰(酒令器)1個，直径5cm，球形18面体，一～十六の漢数字と驕・𩣡の字が刻まれている。	文帝十六年(B.C.164年)頃
5	湖北省・大坟头1号西漢墓	六博盤，正方形に近い，縦36cm・横38cm・厚さ2cm。盤の上面は白木地で，規矩紋は赤漆で塗られ側面四辺は植物図案の文様が施されている。	前漢早期頃，他副葬品から考えて，鳳凰山8号・9号墓とほぼ同年代，秦始皇三十年(B.C.217年)～漢文帝十三年(B.C.167年)の間

番号	遺　跡　名	出土品及び形態	時代及び備考
6	山東省・臨沂銀雀山1号漢墓（2号墓草葉文鏡の最古の例）	六博盤，木製正方形辺長30cm・高5cm，方形の足付盤。盤の上面に規矩文が彫られ，彫られたあとに白色顔料が施されている。	1号墓出土の三銖銭等から考えて，建元元年(B.C.140年)～元狩五年(B.C.118年)頃。
7	江蘇省・江都鳳凰河西漢墓	六博盤，正方形，辺長39cm・高さ6.5cm，足付盤。木製黒漆塗りで，規矩紋は朱漆で書かれている。	前漢時代，形態として，大坟头1号西漢墓に近いと考えられる。
8	江蘇省・徐州子房山西漢墓	六博盤，木質で黒漆塗りであったが，殆ど朽ちていた。棋子，骨製11個出土，算筹骨製41本，長15cm・直径0.4cm。	出土半両銭から考えて，呂后～文帝・景帝時期(B.C.182年～B.C.140年の間)。
9	広東省・広州象崗山南越王墓	六博盤，漆の盤であったが朽ちており，貼金の花紋と青玉が残っている。棋子，水晶と象牙で作られていた。	第二南越王大约死千元朔(B.C.128年～123年)～元狩年間(B.C.122年～117年)頃。
10	広西省・西林県西漢墓	六博盤，銅製，正方形に近い。縦29cm・横30cm・高さ9cm，足付盤。	前漢の早期と考えられている。
11	広西省・貴県羅泊1号墓	六博盤，約1/3が残存，残存で縦20cm，横は完存状態で38cm・厚さ0.6cm。刻まれた規矩紋は紅漆で内面が充塡されていた。	前漢中期以降で，云梦睡虎地秦墓及び馬王堆三号墓の時代に近いと考えられている。
12	北京・大葆台1号西漢墓	棋子，6個，象牙製の長方形の立方体。獣紋が刻まれており，上面に鳥紋と考えられるものが見られる。	1号墓出土漆器に「廿四年五月丙辰丞」と刻まれており，そのことから考えて武帝太始三年(B.C.94年)頃と推定される。
13	宜昌前坪105号西漢墓	棋子1個，銅製，長方形縦2.6cm・横1.2cm・厚0.6cm。	
14	河南省・灵宝張湾漢墓3号墳	六博俑，緑釉で，博，棋子，魚，盤が表現されており盤をはさんで2人が対座している。	五銖銭等から考えて前漢末から後漢早期。
15	河南省・陝県劉家渠漢墓23号墓	陶製Ⅰ型楼閣，第2層で4人で六博をしている。	前漢晩期から後漢前期とされている。
16	甘粛省・武威磨咀子48号西漢墓	彩絵六博俑，六博盤をはさんで2人の男性が対座しているもので，高さ28～29cm，六博盤の規矩紋は白色で書かれ四隅の∨部分から対角線が中心に引かれているのが特色。	Ⅰ・Ⅱ型の五銖銭から考えて前漢の昭帝以後(B.C.87年～74年)の前漢末年頃。
17	山東省・嘉祥県出土画像石（東京国立博物館蔵）	漢代画像石で六博図が刻まれている。武威磨咀子六博俑に見られる盤と同様の形態。	
18	徐州・銅山県台上村画像石	六博盤と酒器，耳杯をはさんで男性2人が対坐している。六博盤に記された規矩紋は方格の中にもう一つ方形があるのが特色。	前漢末から後漢の初めとされている。
19	四川省・四川郫県東漢磚墓	西王母と六博図が描かれている。また西王母の左には，九尾狐，三足鳥，蟾蜍等があるのが特色。	後漢時代と考えられている。
20	河南省・新野画像磚	六博磚，残缺，高36cm・残存幅61cm・厚さ6cm，6本の博と六博盤をはさんで仙人が対坐している。	後漢末と考えられている。

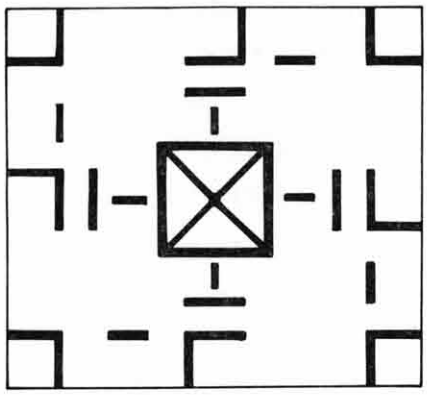
B.C.296年に趙国に滅ぼされるまで，戦国時代の雄としてその勢力を誇っていた。この陪葬墓が中山国王譽のものでないとしても，その下限はB.C.296年を越えることはないので，明らかに戦国時代には六博が存在していたことになる。第2図1に示したように，この型が最も古いタイプの六博であると筆者は考えている。もしその推論が許されるならば，筆者なりに若干の分類を行い今後の視点として学兄諸氏の批評を仰ぎたい。

まず一番目は中心となる方形が対角線で仕切られていることであり，次は他の六博に見られる4個の円点がなく，いわゆるTLVの部分の他に横棒が各4か所に配置されていることである。そしてTの字の￣と｜との部分は離れており，また中心の方形の部分とも同様に離れている点である。その点を考慮して第2図2の形態を見ると，中心の方形は対角線で仕切られておらず，また各4か所に配されていた横棒がなくなり，4個の円点が配されていることである。この例は，表-2に記した湖北省の云梦睡虎地秦墓[注10]，M11号墓・M13号墓に見られるタイプである。時代的には伴出竹簡の研究から秦始皇三十年(B.C.217年)頃で，中山国王陪葬墓よりは約100年程度時代を経たことになる。またこのタイプのものが幾分発展し，円点が飛鳥紋になったものとしては，馬王堆三号墓出土[注11]のものがある。年代としては文帝十二年(B.C.168年)頃とされ，云梦睡虎地秦墓のものより50年程後になるが，基本的には変化していないと思われる。しかしこの頃になると，博を使用して棋子を進めた大博[注12]とは別に，㪅(骰)を使用する小博に変化しているのではないかと考えられる。また同時期のものとしては，湖北省[注13]・江陵鳳凰山西漢8号墓出土のものがあげられ，馬王堆三号墓と同様，㪅(骰)が出土している。時期的には，文帝十六年(B.C.164年)～景帝の後元三年(B.C.141年)頃とされているので，ほぼ近い所であろう。またこの頃から第2図3に見られるように，T字部分が完全に密着し，またそのT字部も中心の方形に密着するのである。このタイプの型が方格規矩紋としては，一番美しく整ったものといえる。その典型として，湖北省[注14]・大坟头1号西漢墓があげられる。時期的には，やや幅があり秦始皇三十年(B.C.217年)～文帝十三年(B.C.167年)の間にあてはめられているが型式として考えるならば，第2図2のタイプよりは新しくなると思われる。

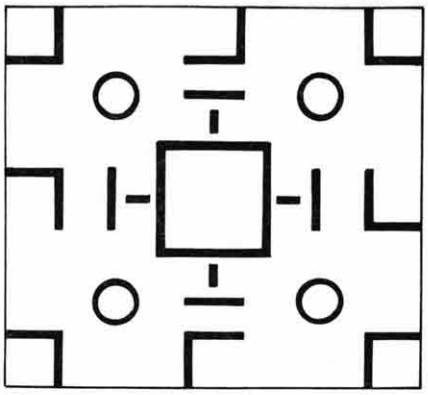


第2図-a

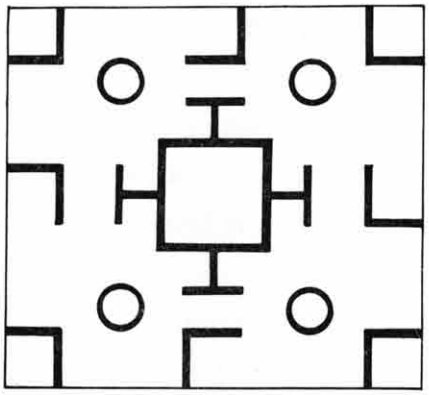
つぎに第2図4のタイプについてであるが，従来のL字紋が『の向きになっている



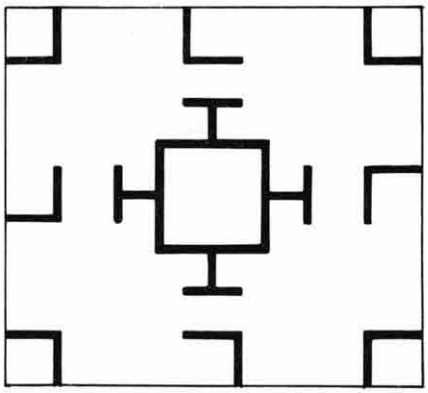
1．中山王陪葬墓の規矩紋



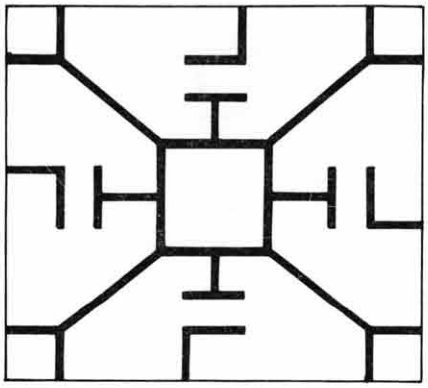
2．云梦睡虎地墓M11墓の規矩紋



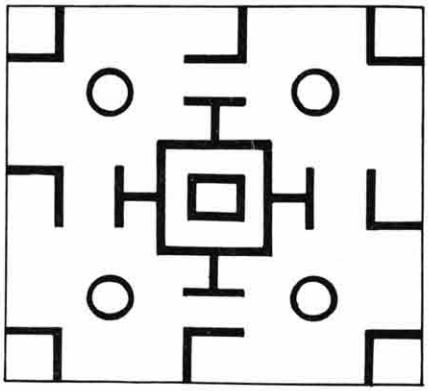
3．大坟头1号西漢墓の規矩紋



4．広西西林县西漢墓の規矩紋



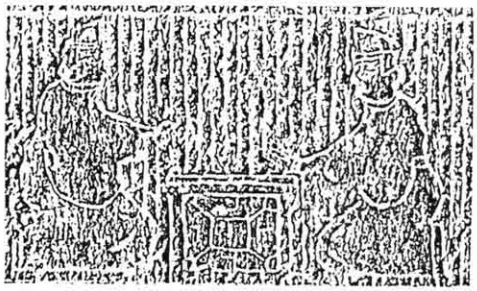
5．武威磨咀子48号墓六博俑の規矩紋



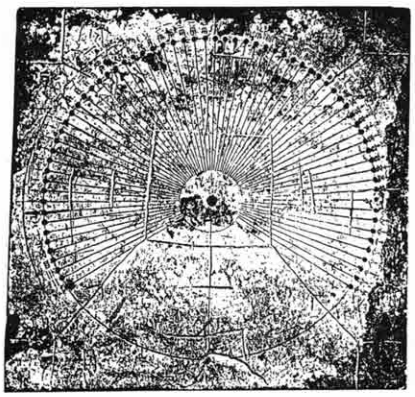
6．山東省嘉祥県出土画像石の規矩紋

第2図-b　六 博 紋 変 遷 模 式 図

のに対して逆向きの⅂になっているのが注目され，また円点が省略されている点も興味深い。ただこのタイプの例としては，今のところ，広西省[注15]・西林県普馱銅鼓墓出土の1例しかないので何ともいえないが，この六博盤が銅製であることに注目したい。およそ盤上遊戯においては，所かわれば品かわるのたとえに言われるように，ゲームのルールは土地土地で各々のものが確立されている。そして，若干のルールの差異は当然の帰結といえるが，基本的には，変化しないものである。おそらく銅で六博盤を鋳出するさいに，原図に忠実に作成されたため，製作された過程で左右が逆転したのではないかと推察される。第2図5のタイプについては，実際の盤は出土していないが，忠実にそのようすを模した俑によってその存在が知られており，この形態から，規矩紋が日時計から模したとする説が生まれたのではないかと考えられる。第2図5のタイプのものとしては，甘粛省[注16]・武威磨咀子48号墓出土の彩絵六博俑があり，年代としては，昭帝以後[注17](B.C.87年～74年)の前漢末年頃と考えられている。また山東省・嘉祥県出土画像石(東京国立博物館蔵)に描かれている六博盤は第2図5のタイプのものである。さらに第2図6のタイプに見られるように方形の中心部分にもう一つ方形が組み入れられたものが，徐州[注18]・銅山県台上村画像石に描かれており，時代的には前漢末から後漢の初めとされている。俑あるいは画像石から見ての形態であり，実際の六博盤ではないので明確には言い切れないが，前漢末から後漢にかけて六博は多様化したのではないかと考えられる。そのことは当然，六博が盛んに流行したためにバリエーションが増えたといえるのかも知れない。このことは鏡の文様にも当然反映し，方格規矩鏡が前漢末に出現し後漢時代全期を通じて盛んに鋳造された事実と呼応していると言えるかもしれない。しかし，基本に戻って六博について考えたならば，安易に方格規矩紋鏡を博局紋と呼ぶべきではないと考えられる。前回を通じ今回もまた六博について叙述する結果となり，説明不足及び筆者の勉強不足



漢代画像石六博図(山東省嘉祥県出土・東京国立博物館蔵)



漢代石製日時計(内蒙古和浩市托克托出土)

第3図　拓　　影

から，的を得た結果には至らなかったが，六博及び遊戯史の分野はまだまだこれから資料の増加にともない新たな事実が裏付けられ，より明らかなものになるであろう。そしてそれまでの試行錯誤の一過程として見ていただけるなら稿を起したものとしての本懐となろう。

（こいずみ・しんご＝将棋博物館学芸員）

注１　傅挙有「论秦汉期的博具，博戏兼及博局纹镜」『考古学報』1981.1
注２　西田守夫「方格規矩鏡の図紋の系譜一刻婁博局去不羊の銘文をもつ鏡について一」『MUSEUM』427号　1987年10月
注３　鈴木博司『守屋孝蔵蒐集　方格規矩四神鏡図録』京都国立博物館　1969年
注４　西田氏は，四神の青龍とともに太い頸の白虎が振り返っている点や，羽人が芝草を手に持って青龍に差し出すように描かれていない点等をあげて，新代の鏡の特徴と矛盾しないことから銘文どおり新代の鏡の拓本であるとしている。
注５　方格規矩紋を有する草葉文鏡としては，成都羊子山出土のものや，五島美術館蔵鏡に見られる。またオルドス出土の雷文鏡にも規矩紋を有するものがある。
注６　前回，中山国王陪葬墓出土の石製六博盤について中心の方形部分に描かれた紋様について梟の絵としたのは誤りで，より鮮明な写真によると，獣面紋であったことを正しておきたい。筆者の思い込みによる錯覚であったことを明記したい。
注７　六博に見られる方格規矩紋について，天円地方の思想に基づくものとした解釈をとっているのは，駒井和愛「中国古鏡の研究」1953年や，アメリカのカンマン，さらに林巳奈夫「漢鏡の図柄二，三について」『東方学報』京都第44冊，1973年に記されている。
注８　樋口隆康『古鏡』p.138～p.140
注９　『史記』「趙世家」
注10　『文物』1973年９期「湖北云梦西汉墓发掘简报」
『文物』1976年６期「湖北云梦睡虎地十一号秦墓发掘简报」
注11　『文物』1974年７期「长沙马王堆二，三号汉墓发掘简报」
熊传新「谈马王堆３号西汉墓出土陆博」『文物』1979年４期
注12　大博については，『顔氏家訓』巻七雑芸によれば「古爲大博則六博，小博則二甃」とあり，箸状の半截竹管(博)を使用する大博とサイコロ状の球面体(甃)を使用する小博とに大別されている。
注13　『文物』1974年６期「湖北江陵凤凰山８号西汉墓发掘简報」
注14　湖北省博物馆「云梦大坟头一号汉墓」『文物资料丛刊』４
注15　『文物』1978年９期「广西西林县普驮銅鼓墓葬」
注16　甘肃省博物馆「武威磨咀子三座汉墓发掘简报」『文物』1972年12期
注17　出土五銖銭の型式から推定されている。
注18　徐州博物馆「论徐州汉画像石」『文物』1980年２期

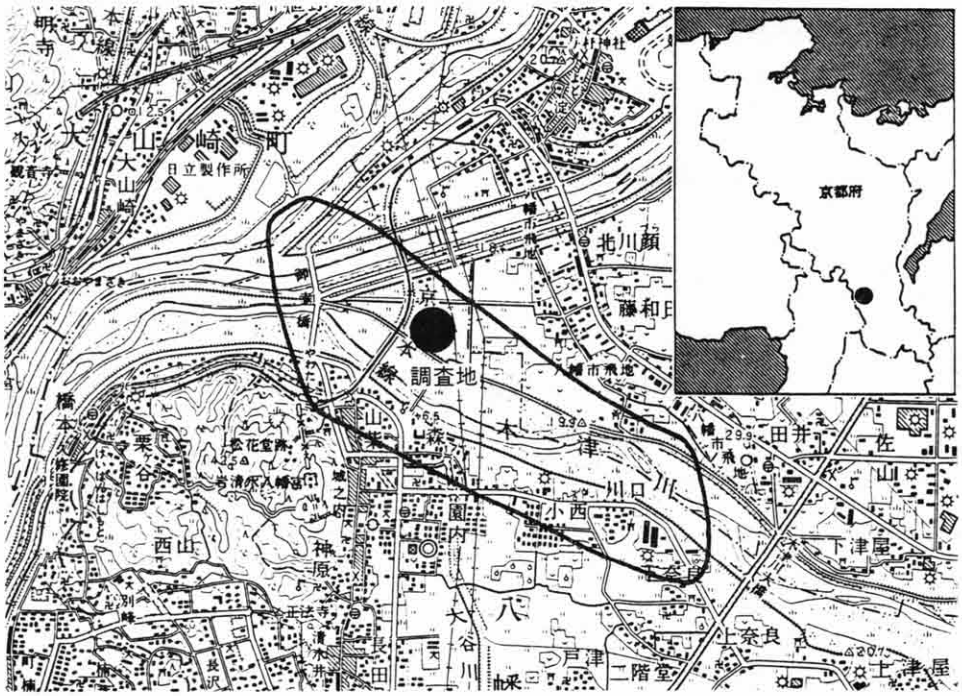
なお，前号（第25号）で馬王堆３号墓や鳳凰山10号漢墓出土甃に刻まれた文字を「虩」としたが，「驌」であることが判明したので，訂正しておく。

八幡市木津川河床遺跡検出の大地震に伴う噴砂について

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　岩　松　　保
通産省工業技術院地質調査所大阪出張所　寒　川　　旭

1. はじめに

木津川河床遺跡は，京都盆地南部の，桂川・宇治川・木津川の三河川が合流する地点から，木津川の上流一帯に所在する(第1図)。この遺跡は京都南部で最大規模の低湿地遺跡で，従来，弥生時代から近世に至る複合遺跡であることが知られていたが，その実態については不明であった。しかし，昭和57年度から同遺跡内での下水道処理施設(『京都府洛南浄化センター』)の建設に伴い，木津川河床遺跡の発掘調査が各年度毎に行われ，その様相は徐々に明らかになってきている(注1)。今までの調査では，弥生時代・古墳時代後期の集落跡，



第1図　調査地位置図

付表　木津川河床遺跡発掘調査一覧表

調査次数	調査年度	調査地名	概　　要	噴　砂
Ⅰ	昭和57年度	A～F	各調査地より土器片が出土。特にC・D・Fトレンチで弥生時代後期の土器片を多数確認。	E　○ 他　？
Ⅱ	昭和58年度	KH	古墳時代後期の竪穴式住居跡10基，掘立柱建物跡，土坑を検出。他に古墳時代初頭の土器溜め，中世素掘り溝など。	○
Ⅲ	昭和59年度	C	古墳時代前期を上限とする柱穴群，中世素掘り溝。	○
		A・B	南北走する中世素掘り溝。	○
Ⅳ	昭和60年度	OD	古墳時代後期の竪穴式住居跡３基，同前期の土坑，中世素掘り溝。	○
		JH	古墳時代後期の竪穴式住居跡１基，土坑，中世素掘り溝など。	×
		1P	弥生時代後期の土坑・溝，中・近世の素掘り溝。	×
Ⅴ	昭和61年度	JN	南北走する中世素掘り溝。	○
		2P	南北・東西走する中世素掘り溝。	○
		ET2-1	東西走する中世素掘り溝。	○
		ET2-2	弥生時代後期の竪穴式住居跡，中世掘立柱建物跡，中世素掘り溝。	○

中・近世の素掘り溝，弥生時代以降の各時代にわたる遺物が確認されている(付表)。

この一連の発掘調査において，考古学でいう「遺構」とは別に，地震跡が確認されている。小稿ではこの地震跡について考古学及び地質学的に明らかとなった知見を報告したい。

2.　発掘調査における地震跡と噴砂

考古学的な発掘調査において確認できる地震の跡は，大きく二大別できよう。地震動の直接的な痕跡とそれに伴う間接的な現象である。後者は，火災や家屋の倒壊などの災害である。平安宮推定民部省跡では貞元元(976)年の地震で倒壊したと推定される築垣が確認されている(注2)。一方，直接的な痕跡として断層変位，亀裂，噴砂などがある。京都府舞鶴市桑飼下遺跡では，縄文時代の炉跡が断層によって食い違っている(注3)。兵庫県川西市の加茂遺跡では，弥生時代以降の亀裂が検出されている(注4)。噴砂は，滋賀県高島郡の北仰西海道(きとげにしかいどう)遺跡で縄文時代晩期中頃のもの(注5)が，同県大津市螢谷遺跡で平安時代末期以降のものが確認されている(注6)。京都府下にあっては，当木津川河床遺跡，木津町木津遺跡(注7)，舞鶴市志高遺跡(注8)で噴砂が検出されている。

噴砂は大地震の際に地下において水で飽和した砂層が「液状化」し，砂を含んだ水が上位の地層を引き裂いて地表に噴き出す現象である。液状化現象は次のように考えられてい

る。[注9] 地下に堆積している砂層内の砂粒は，上位の堆積物により押さえつけられていて互いに結び付いている。この砂層内に地下水が蓄えられ飽和した状態のときに地震動を受けると，砂粒が互いに結び付いているため，力が加わっても水は砂粒の間を通って急には動けない。そのため水圧が上るが，砂粒の結合力より水圧が大きくなると，水は砂粒をバラバラに離して全体が流動的になる。そして，高圧状態になった水が地表に逃げる際に砂を一緒に噴き上げる(＝噴砂)。この現象は，大地震の際に，震動の激しい(概ね震度Ⅵ以上)沖積地に発生しやすい。[注10]

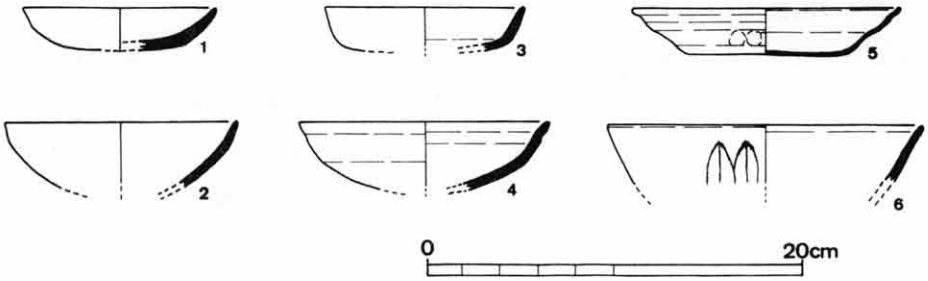
3. 京都府南部の活断層

近畿地域の中～北部は近畿三角帯と呼ばれ，我が国でも活断層が密に発達し，歴史時代の地震も多く発生している地域である。木津川河床遺跡の所在する京都府南部地域周辺においても，多くの活断層が分布している[注11](第2図)。大阪平野の北縁には有馬－高槻構造線活断層系が発達し，右横ずれ成分の卓越する活動を行っている。京都盆地両縁にも活断層が分布している。このうち，東縁の断層は約60kmにわたって北方にのび花折断層(右横ずれ成分が卓越)と呼ばれている。大阪平野東縁には生駒活断層系，琵琶湖西岸には琵琶湖西岸活断層系が発達し，ともに垂直成分の卓越する活動を行っている。この中で，生駒活断層系は永正7(1510)年の摂津・河内地震，琵琶湖西岸活断層系は寛文2(1662)年の近江地震を引き起こした可能性が強いと考えられている[注12]。また，有馬―高槻構造線活断層系や京都盆地西縁の活断層も歴史時代に活動したことが考えられる。

第2図　京都府南部周辺活断層分布図

4. 木津川河床遺跡の噴砂

木津川河床遺跡で確認された噴砂は黄色砂の詰った「割れ目」である(図版参照)。長さは最長のもので20m以上にわ

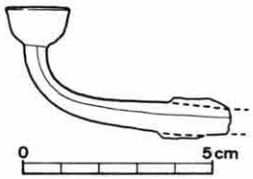


第3図　出土遺物実測図

1・2：JN地区，　3・4：2P地区，　5・6：OD地区，　1～5：土師器，　6：中国製陶磁器

たってのびる。この遺跡では，表土下約3mにわたり粘土・粘質土が堆積しており，その下層には黄色砂・砂礫層が厚く堆積している。「割れ目」は，基部が幅30cm内外で黄色砂・砂礫層とつながっており，上方へ約150cmにわたって，粘土・粘質土を引き裂いて直線的にのびている。上部にいくにしたがって幅が狭くなり，最上部では，幅数cmとなる。内部を満たす砂の粒径は上部にいくに従い小さくなるが，「割れ目」の下部で連続している黄色砂・砂礫層の砂と同一である。また，上部には「割れ目」内の砂を供給しうる砂層はない。以上のことから，この「割れ目」内の砂は明らかに下位の黄色砂・砂礫層の砂が割れ目に沿って上昇したもの――噴砂と判定できる。これらは淡青灰色砂質粘土層を引き裂いているが，それより上位に達するものはない。

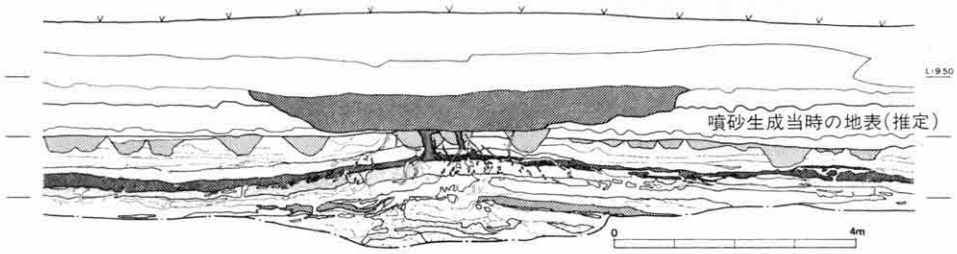
この噴砂は遺構・包含層と切り合い関係を有しており，その生成時期が推定できる。噴砂が引き裂いている素掘り溝・包含層から出土した土器を第3図に掲げる。これらは，概ね13世紀後半～14世紀以前のもので，この時代以降に噴砂が生じたといえる。一方，数条の噴砂が，幅6m・深さ0.9mの溝にその上部を削平されているところがある。この溝は断面による確認であるため，まとまった遺物は出土していないが，この溝の最下層より煙管の雁首が一点出土した(第4図)。これは火皿と首部の補強帯が消失していることや，首部が下方に湾曲することから，18世紀前半のものと編年される。(注13) これが，この溝の掘削時期を示すものとすると，およそ，18世紀前半を上限とする。以上のことから，噴砂の生成時期は，14～18世紀前半の間と考えられる。



第4図　煙管雁首実測図

5.　噴砂の様相とその検討

木津川河床遺跡で確認した噴砂については，他の遺跡では確認されていない興味深い現象がいくつか明らかとなった。以下，これらについてみていきたい。

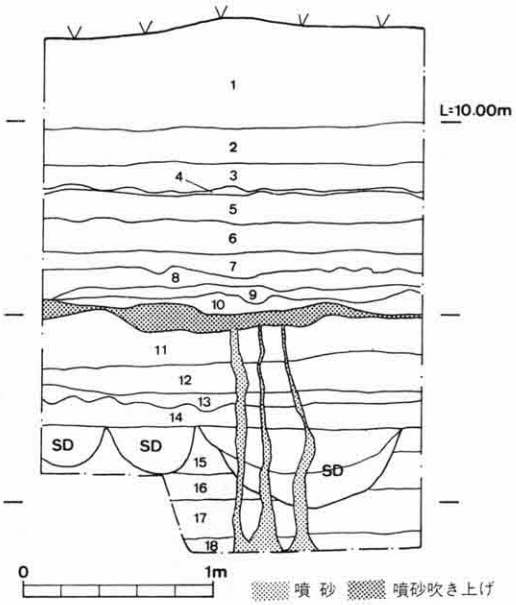


第5図　ET2-1トレンチ西壁土層図

(1)　**噴砂の遺構面への影響**　第5図はET-2地区1トレンチの東壁土層の一部である噴砂の噴出口が中央にあり，その上部は，近世の溝によって削平を受けている（図版1-2)。この土層図が示すように，噴砂をもたらした砂層・砂礫層は噴出部に向けて緩やかに曲隆していて，そのほぼ頂部に噴出口がある。この緩やかな曲隆は，噴砂生成当時の地表――後述の(2)に相当する面より下でみられる。この遺跡は沖積地に立地しているため，その土層は水平堆積が基本である。このような土層の曲隆現象は噴砂発生の時に生じたものと判断できる。実際，この土層に対応する遺構を検出した面は，噴砂部が高くその両側がともに下る緩傾斜面であった。

他の調査地での例では，ほぼ一定の深さに掘られた素掘り溝群がそれらを横切る噴砂の周辺で，その溝底が一様に浅く(高く)検出された。これなども，噴出の際に地層が曲隆したためと考えられる。

また，噴砂によって遺構が右横ずれしている例がある。59-B地区で検出した土坑は，約25cmのずれをもって検出された。これなどは，噴砂の際に生じた亀裂により，本来の遺構が水平方向に食い違ったものと推定される。



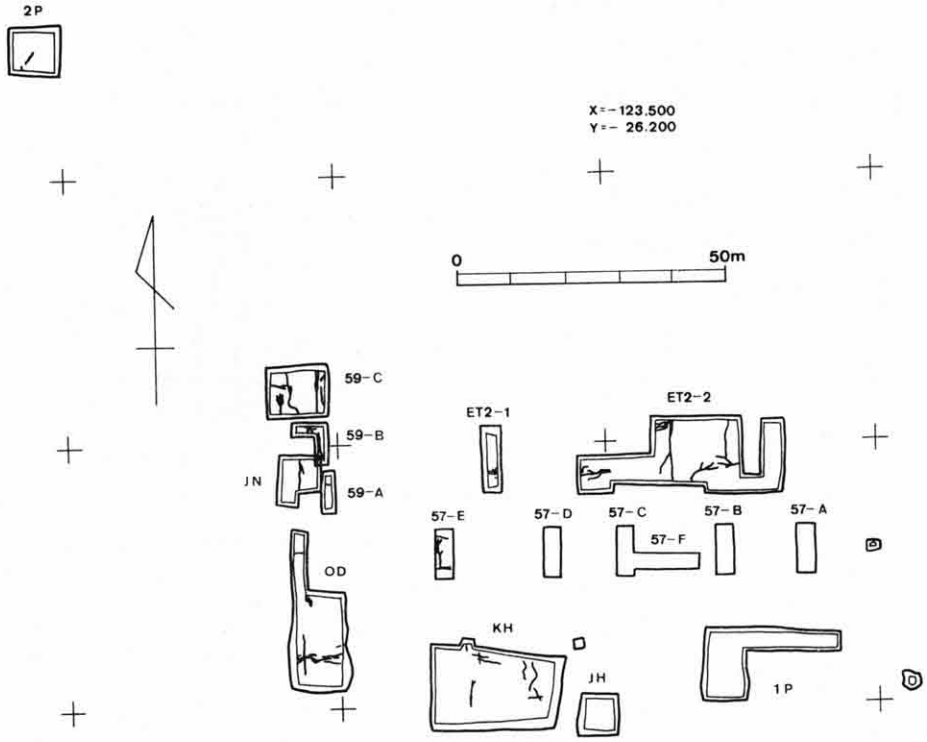
第6図　噴砂の旧地表面への噴出(ET2-2地区)

1：盛土Ⅰ　2：盛土Ⅱ　3：茶褐色粒混淡灰砂質土　4：灰白色砂　5：明茶褐色砂土　6：茶褐色斑混茶褐色粘質砂　7：褐色粒混灰色砂質土　8：黄色砂多混淡青灰色砂土　9：黄色砂多混淡青灰色砂質土　10：黄色砂少混淡青灰色砂土　11：淡青灰色砂質粘土　12：黄色混淡青灰色粘土　13：白砂混淡青灰色砂土　14：青灰色粘土　15：暗茶褐色粘土　16：(淡)青灰色粘土　17：青灰色粘土(密)　18：青灰色砂

(2)　**噴砂の旧地表面への噴出跡**　地震が発生した当時の地表に，噴砂が噴出・堆積しているのが観察できる地点がある。これは，ET-2地区２トレンチの東北部にあたる。

第６図はこの地区の土層であるが，噴砂をもたらせた砂層・砂礫層の上面よりほぼ垂直に140cmの高さにわたって粘土・粘質土が引き裂かれている。そして，その上端で粘土混じりの砂が，横方向に幅約2.5m に広がっている。この層中の砂はやや汚れた黄色砂であるが，亀裂内の砂と同じものと判断される。また，11の層の上面が凸凹しているのも，自然堆積による結果ではなく，この面が噴砂の噴出した当時の地表――水田面であったためと推定される。そうすると，横方向の砂の広がりは噴砂が当時の地表面に吹き出し堆積した砂の痕跡と捉えられよう(図版2-3)。

２Ｐ地区では，人，牛の足跡が噴出した砂で覆われている例が確認できた。幅1.6mの溝の堆積土が２層に分かれ，そのうちの二面で人・牛の足跡群を検出した。下面で検出した足跡の一部が噴砂によって引き裂かれており，その周辺の足跡には噴砂の噴出砂が埋土として入り込んでいた。一方，上面で検出した足跡には，噴出の砂は埋土として入りこんでおらず，噴砂の亀裂もなかった。噴出砂がある広がりを持って認められること，その面より上層には噴砂が達していないことから，足跡を検出した面の中で，下層のものが地震



第７図　調査トレンチ配置図(噴砂分布)

発生当時の地表であったと考えられる。

(3) 噴砂の分布と方向 噴砂の亀裂の方向は直線的に東西・南北に走るものと，不定方向にやや蛇行しながら直線的にのびるものとに大別できる(図版1-1，2-2)。この遺跡では東西・南北方向に走る「畝状」を呈する素掘り溝を多数検出しており，前者はこの遺構の肩部に沿っているものである(図版2-1，2-4)。これは，遺構の埋土が地質的な弱線となって，噴砂が生じやすかったものと考えられる。

今までに16か所の調査地で発掘調査が行われており，ほとんどの調査地で噴砂を確認しているが，東南部の1P地区，JN地区では認められなかった(第7図・付表)。これは，現地表下約3mに分布する黄色砂がこの辺りにはなく，代わりに厚く粘土層が堆積しているためである。つまり，液状化しやすい堆積物が存在してない地域で，噴砂が分布していないことを示している。この土層の堆積の違いは，木津川旧流路の分布と関係があろう。

(4) 歴史地震との対応 先述のように，考古資料による地震発生の年代は概ね，14～18世紀前半の間に求められる。この期間内で，八幡周辺に液状化をもたらしたと思われる地震としては，1596年(慶長元年)の伏見地震と1662年(寛文2年)の近江地震がある。(注14)

伏見地震は，「山崎，事外相損，家悉崩了(中略)八幡在所，是又悉家崩了」(『言経卿記』7月13日条）と当遺跡周辺で著しい被害があったことが記されている。さらに，「夜に入子の刻大地震，土裂け水湧出す，京都，伏見，大厦巨宅及び民家倒れ破れ(後略)」(増補『家忠日記』7月12日条)と京都及びその南部で液状化が生じたことが記録されている。近江地震については，「午の刻大地震す，京都伏見在々所々，大過敷事也，八幡の内も大地をゆりわり，くろき土水をはき出す，井戸柸もゆりうめたり」(『糟粕手簡』5月1日条)とあり，この地震の際にも当遺跡周辺で液状化が生じたことがわかる。

第5図に見えるように，噴砂には「重複関係」が認められ，異なった地震によってそれぞれが生じた可能性も考えられる。しかし，現時点ではそれぞれの噴砂の時期について識別する決め手はない。ここでは，さきに掲げた地震の両方または一方によって，この遺跡の噴砂が生じた可能性が高いことを指摘するに留める。

6. ま と め

木津川河床遺跡で確認された地震跡＝噴砂について，その観察・検討により多くの事柄が明らかとなった。これは，考古学的な発掘調査中に検出した地震跡を地震学・考古学的に検討した成果である。このことから，考古学・地震学の各々の学問分野がその周辺学問として位置づけられ，共同研究を行うことの重要性を示唆している。

考古学の立場でみると，地震跡は遺構・遺物の同時性・先後関係を論じる手掛かりとな

ろう。この遺跡の地震跡は，その生成時期は近世前半の地震と対応しえたが，今後，他の遺跡で良好な遺物資料と地震史料とを対応できる地震跡が得られた場合には，絶対年代を与えうる基準資料として位置づけられる。また，史料を欠く地震のものであっても，地震跡と遺構との関係を吟味することにより，同遺跡内はいうに及ばず周辺遺跡の遺構・遺物とも先後関係・同時期性を論ずることが可能であり，遺構・遺物の時期認定を検討する材料となりうる。

地震学の立場でみると，地震跡の検出により，史料を欠く地震をも認識しうる。そして，周辺遺跡での地震跡とその発生年代・地質条件の吟味により，地震をもたらせた活断層を特定することが可能である。また，同一の活断層による時期の異なる地震跡を確認した場合，その活断層の活動周期を推定し，将来の活動を予測する有力な材料となり，地震予知研究に大いに寄与することになろう。

全国で膨大な遺跡の発掘調査が毎年行われているが，気付かずに地震跡をみのがしている場合が多いと思われる。今後，考古学と地震学との交流を深めることにより，それぞれの研究が更に発展していくものと考える。

謝　　辞

木津川河床遺跡の現地調査の際には，京都大学名誉教授中沢圭二先生には現地にまで赴かれ，有益な御教示を頂きました。西岡成郎氏，福富　仁氏，中井英策氏には，現地作業中に有益な議論をして頂きました。また，当調査研究センターの職員の方々には貴重な御意見を頂戴しました。特に，松井忠春・黒坪一樹両氏には原稿に目を通して頂き，事実関係・構成・文章表現にいたるまで有益な御助言を賜りました。ここに記して感謝の意に替えます。

注1　今までの調査報告は各年度毎に行われている。
長谷川達「木津川河床遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第8冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1983
黒坪一樹・長谷川達「木津川河床遺跡昭和58年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第11冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1984
黒坪一樹・松井忠春「木津川河床遺跡昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985
岩松　保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和60年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第19冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1986
岩松　保・松井忠春「木津川河床遺跡昭和61年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第23冊　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1987

注2　戸田秀典・松井忠春「平安宮推定民部省跡の発掘調査」(『平安博物館研究紀要』6　(財)

古代學協會） 1976
注３　渡辺　誠他『京都府舞鶴市桑飼下遺跡発掘調査報告書』 舞鶴市教育委員会　1975
注４　梅田康弘・村上寛史・飯尾能久・長　秋雄・安藤雅孝・大長昭雄「弥生時代の遺跡に残された地震跡」(『地震』37) 1984
注５　葛原秀雄「北仰西海道遺跡の調査」(『今津町文化財調査報告書一町内遺跡発掘調査概要報告書』第７集） 1987.3
寒川　旭・佃　栄吉・葛原秀雄「滋賀県高島郡今津町の北仰西海道遺跡においてみとめられた地震跡」(『地質ニュース』地質調査所編　通巻390号） 1987.2
注６　濱　　修・寒川　旭「滋賀県大津市の螢谷遺跡において認められた地震跡」(『地質ニュース』地質調査所編　通巻390号） 1987.2
注７　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　小山雅人の教示による。
注８　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　肥後弘幸の教示による。
注９　町田　洋・小島圭二『自然の驚異＜日本の自然８＞』岩波書店　1986　および『地震の事典』三省堂　1983を参照。
注10　『地震の事典』三省堂　1983
注11　寒川　旭・杉山雄一・衣笠善博「活構造図『京都』」1:500,000　活構造図11　地質調査所 1983
活断層研究会編『日本の活断層一分布図と資料』 東大出版会　1980
注12　寒川　旭「誉田山古墳の断層変位と地震」(『地震』39) 1986など
注13　古泉　弘「江戸の町の出土遺物一その展望」(『季刊考古学』第13号） 1986
注14　宇佐美龍夫『資料　日本被害地震総覧』東大出版会　1975
宇佐美龍夫『新編　日本被害地震総覧』東大出版会　1987
文部省震災予防評議会編『大日本地震史料』第１巻　1941
東京大学地震研究所編『新収　日本地震史料』第１巻　1981
東京大学地震研究所編『新収　日本地震史料』第２巻　1982

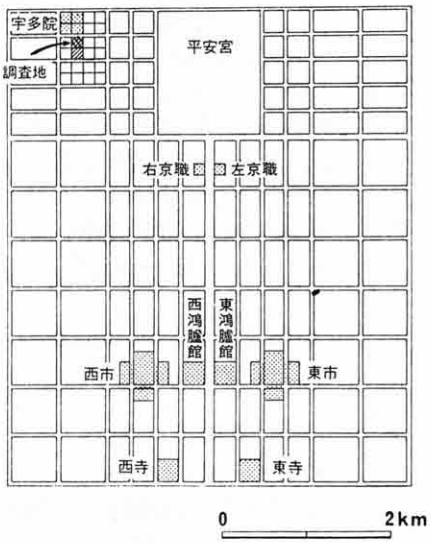
平安京右京一条三坊九町(第7次)の調査

石　井　清　司

1. はじめに

京都市北区大将軍坂田町にある京都府立山城高校は，延暦13(794)年に山城国へ遷都された平安京の，条坊区画では平安京右京一条三坊九・十町に相当する。

この山城高校では，昭和54年の校舎改築工事に先立つ発掘調査(注1)(第1次調査)において，古墳時代後期の竪穴式住居跡群と平安～鎌倉時代の掘立柱建物跡を検出した。これらの建物のうち，平安時代の建物は中心建物(SB09)とその左右対称の位置に西脇殿(SB07・SB10)と東脇殿(SB12・SB17)があり，建物配置などが注目された。



第1図　平安京条坊図
(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』より転図)

続く昭和55年度の調査(注2)(第3～第5次調査)では，中心建物の後方に梁行規模を一間分縮小した建物(SB119)があり，中心建物(SB09)を「コ」の形に囲むように建物が配されていること，また建物群を囲むように築地とその両側の側溝が確認され，推定規模約120m(一町)四方の敷地を占有する貴族の邸宅跡と考えられるようになった。また，昭和55年度の調査では九町の南側の十町域の調査もおこなわれ，平安時代の苑池(SG177)も確認した。

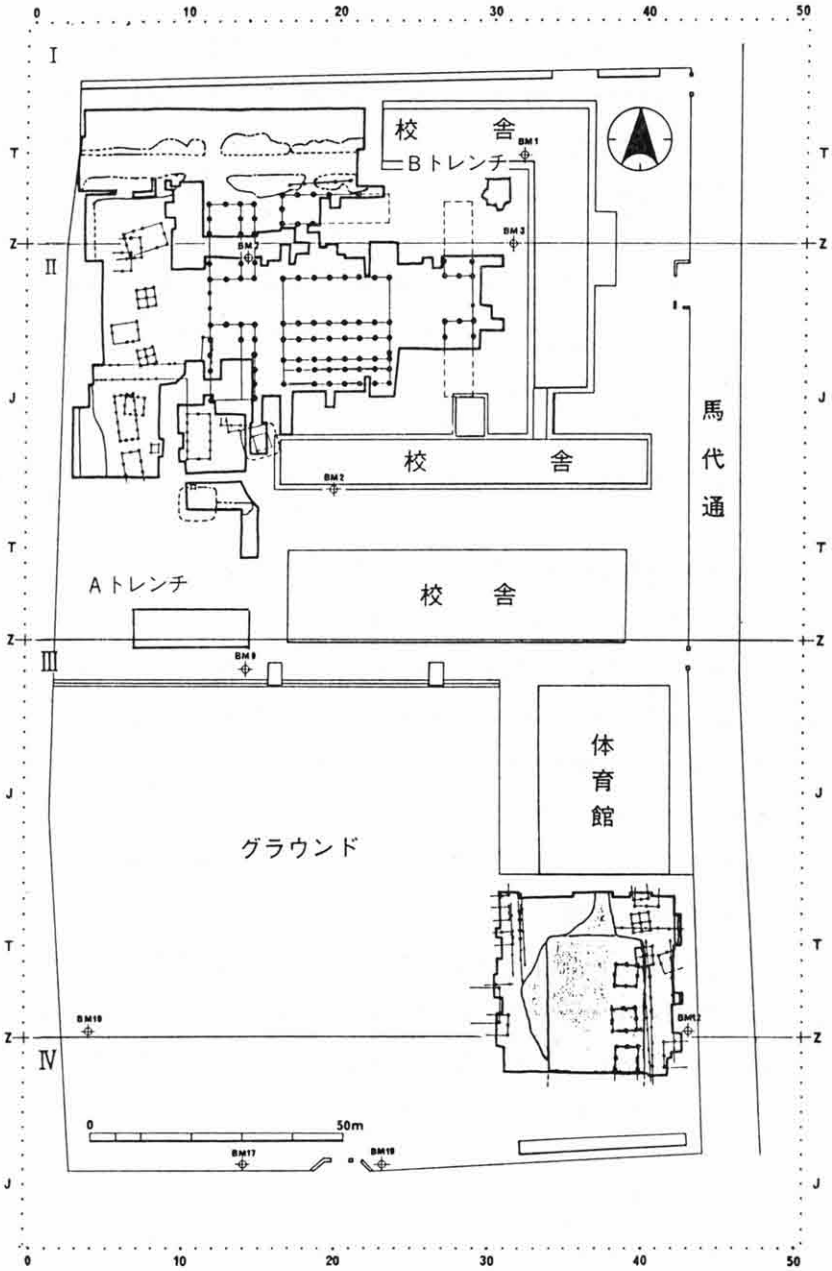
このように山城高校の調査では，平安時代前期の建物群を中心に古墳時代～鎌倉時代の遺構を確認し，山城高校敷地全域に遺跡の存在が予想されるが，京都府教育委員会では，昭和62年クラブボックス等の老朽化に伴い，体育振興施設および便所棟の増改築が計画された。この体育振興施設の予定地は昭和54年度に解体されたプールに接しており，平安時代を中心とした遺構は旧プールによって破壊されていると予想したが，調査が進むにつれ，注目される遺跡が検出された。以下，これまでの調査成果と今回の調査成果について簡単に説明をおこなう。

なお，調査は，京都府教育委員会の依頼を受けて，調査第2課第3係長　小山雅人，同調査

員　石井清司が担当した。調査期間は昭和62年７月21日～同年10月29日の三か月を要した。

2.　これまでの調査成果

平安京右京一条三坊九・十町に位置する山城高校敷地内の発掘調査は，昭和54年度を最



第２図　調査地地区割図(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-2)』より転図，一部加筆)

初として現在までに7回にわたって行われた。

ここでは，これまでにおこなった6次にわたる発掘調査の成果を簡単に列記し，今回の第7次調査との関連を指摘していきたい。

昭和54年度にはじまった山城高校の敷地内の発掘調査は，昭和59年までに6次にわたって行われました。その結果，山城高校敷地内の遺跡は，第Ⅰ期；古墳時代後期（6世紀末～7世紀初め）を中心とした平安京造営以前の時期（花園遺跡の一部として位置づけられている），第Ⅱ期；平安京の条坊制が施行された時期，第Ⅲ期；第Ⅱ期の大規模な建物が解体し，ある空間期間を置いてふたたび建物が造られた時期，の3期にわたって遺構・遺物を検出した。以下，第Ⅲ期の遺構を中心に，この時期区分によって年次ごとに説明をおこなう。

第1次調査；第1次調査は，九町の北半中央の調査であり，第Ⅱ期主要建物群の存在が明らかになった調査である。この調査では，SB08・SB09の正殿とSB07・SB10の西脇殿，SB13・SB12の東脇殿を検出した。正殿であるSB08・SB09は，SB08を切ってSB09があり，SB08の造営途上の仮設的な主殿であり，そのSB08に，廂・孫廂により規模を拡張し，さらに瓦葺建物に整備したSB09へ変化したものと考えられている。なお第1次調査で検出した第Ⅱ期の中心建物群は，現在盛土をおこない，テニスコート・駐車場として保存されている。

第2次調査；第2次調査は，第Ⅱ期の中心建物群の西方の南北に長いトレンチであり，校舎改築に伴う調査である。この調査では第Ⅱ期の関連遺構として井戸（SE60）のほか，中心建物と付属屋を画する柵列（SA107・SA108），西・北の築地に伴う内溝（SD45・SD57）を検出した。またこの調査では第Ⅱ期の建物群のほか，第Ⅰ期に属する掘立柱建物跡（SB33・SB34・SB54），第Ⅲ期に属する掘立柱建物跡（SB58・SB59など）も検出した。

第3次調査；第3次調査は，第1・第2次調査の北西部にあたり東西に長いトレンチである。この調査では，正殿の北側に柱列をそろえた後殿（SB119）と第1次調査で検出した西脇殿（SB10）の規模を確認するとともに，九町の北限遺構である2条の溝状遺構（SD45・SD120）とその溝状遺構の間に平坦面を検出した。この溝状遺構および平坦面については北より土御門大路の側溝（SD120）・築地（SA150）・宅地内の溝（SD45）と考えられる。

第4次調査；第4次調査は西脇殿（SB07）の南約300m²を対象とした調査である。この調査では，SB07の西柱列の延長線に柱筋を揃えた南北棟の掘立柱建物跡（SB155）を検出した。この建物は柱間が狭く，近接して井戸があることから厨房に関係した建物と考えられている。またこの第4次調査では調査地の南端に宅地の内溝（SD57）に取り付くと推定される区画溝（SD157）を検出した。第Ⅱ期以外の遺構としては古墳時代の竪穴式住居跡，平安時代以降の井戸・土坑などを検出した。

第5次調査；第5次調査は山城高校敷地内の南端にあり，平安京の条坊復元では十町域に相当する部分の調査である。この調査では9世紀前半に大規模な池(SG177)が掘られ，その後，池が埋められたあと，10世紀末～11世紀初頭に小規模な掘立柱建物が濫立する。

第6次調査；第6次調査(注3)は昭和59年度に行われたもので，昭和54･55年度(第1～第5次)の調査が校舎の増改築工事に伴う広範囲な調査であるのに対し，この調査は下水道整備工事に伴う調査であり，狭い範囲の調査であった。この第6次調査では，九町域の北側トレンチ(第6トレンチ)で宅地内の内溝であるSD45の延長遺構と考えられるSD0605・SD0606を検出した。またSB09などの中心建物群の南を画する溝(SD153)の延長線上に設置したトレンチ(第1～第3トレンチ)では溝(SD153)の延長は検出できず，奈良時代の掘立柱建物跡などを検出した。

3. 第7次調査の概要

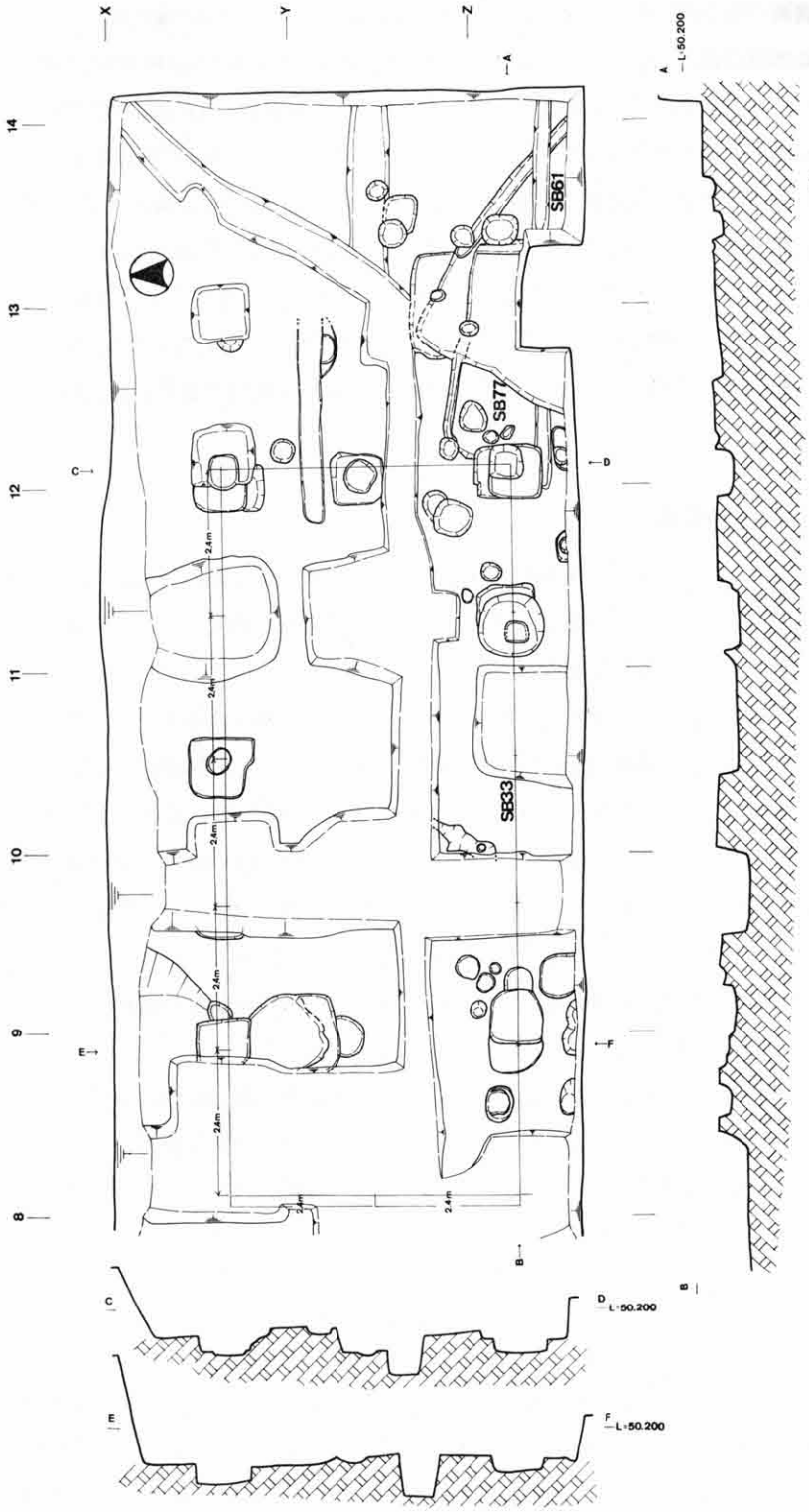
第7次調査は，前述のように体育振興施設(Aトレンチ)および便所棟(Bトレンチ)の建物予定地の調査であり，調査対象面積約260m²について，昭和62年7月21日より同年9月29日までの約2か月間を要して調査をおこなった。

この体育振興施設予定地（Aトレンチ）は，これまでに行われた第1～第6次調査の調査結果から推定すると，第Ⅱ期(平安時代前期)の遺構である中心建物群の南を画する溝(SD153)の南にあたり，推定南門とSD153の中央部の西半分の位置にあたる。また，便所棟予定地(Bトレンチ)は，第6次調査で検出した宅地の内溝(SD0606)の南に接した部分である。以下Aトレンチ・Bトレンチで検出した遺構および遺物について簡単に説明をおこなう。なお，遺構番号については第6次調査の記入方法を踏襲し，四ケタの数字で表わす。すなわち0701の07は第7次調査を示し，01は検出した遺構の順番を表わす。

a；Aトレンチの遺構

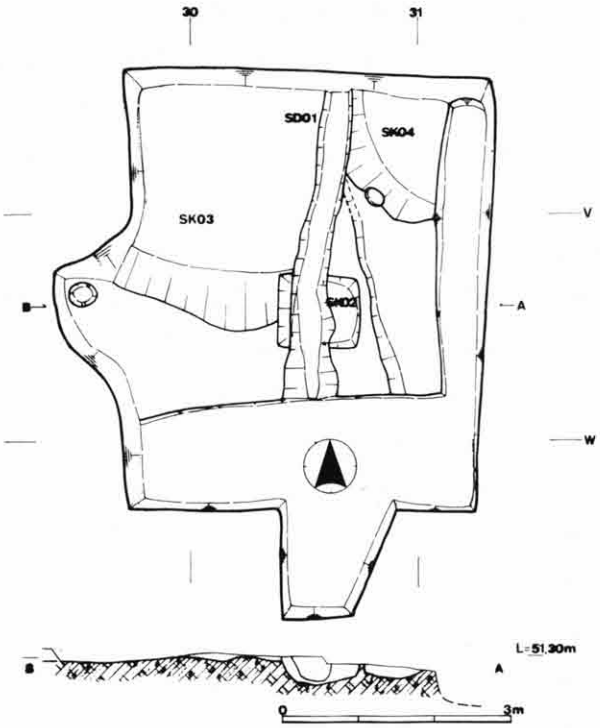
Aトレンチは前述のように，推定南門と中心建物を区画する溝(SD153)の間にあたるトレンチである。このAトレンチは昭和54年度に解体された旧プールの設置されていた部分に近接し，また第6次調査においてAトレンチの北側に設置したトレンチでも攪乱部分があったため，今回の調査でも遺構の検出はむずかしいと考えていたトレンチであるが，予想に反し，明瞭な遺構を検出した。検出した遺構は土坑・溝状遺構のほか性格の明らかなものとして竪穴式住居跡(SB0761・SB0777)・掘立柱建物跡(SB0733)などがある。

竪穴式住居跡(SB0761・SB0777)は，Aトレンチの東南隅で検出したもので，2基の竪穴式住居跡が重複してある。SB0761は北辺と西辺の一部を検出したのみで，南側については排水溝および電柱が南に隣接していて拡張が不可能のため，竪穴式住居の規模は不明である(北辺では検出全長4.4mを測る)。SB0761の遺存状態は悪く，検出面より床面まで



第3図　平安京跡右京一条三坊九町　Aトレンチ遺構図（紙面の関係上，第7次調査を示す。上二ケタ07は省略）

は深さ約10cmを測る。床面には周壁溝が北辺の一部に認められるのみで，西辺については確認できなかった。また柱穴も調査範囲が狭く不明である。SB0761内からは細片の土師器・須恵器が出土したが，時期を明確にしめす遺物は出土しなかった。SB0777はSB0761に切られた竪穴式住居跡である。SB0777はSB0761と同様，全体は調査していないが，北側で一辺を確認したところでは一辺約3.6mを測る隅丸方形の住居跡である。床面の遺存状況は悪く，検出面より床面までは約15cmを測る。床面の周壁溝は北辺および東辺で確認したが，西辺は確認できなかった。出土遺物はSB0761と同様，土師器・須恵器の細片のみで，図化できる資料は少ない。なお，SB0761・SB0777のいずれに帰属する資料かは明らかでないが，両遺構が重なる部分の埋土内より携帯用砥石が出土した。



第4図　平安京跡右京一条三坊九町　Bトレンチ遺構図
(紙面の関係上，第7次調査を示す。上二ケタ07は省略)

掘立柱建物跡(SB0733)はAトレンチの中央で検出したもので，南北2間×東西5間の建物と思われるが，西端の梁行部分が旧プールの建物基礎により攪乱を受け不明である。SB0733の掘形は一辺約0.8～1.2mの方形であり，柱穴の直径は，確認した部分で約50cmを測る。各柱間は約2.4m(8尺)の等間隔である。出土遺物としては柱穴および掘形内から少量の土師器・須恵器・瓦片が出土した。このSB0733は出土遺物・建物方位より第Ⅱ期の中心建物に関連した遺構と考えられる。

b；Bトレンチの遺構

Bトレンチは中心建物群を構成する東北脇殿(SB12)の西北部にあたり，第6次調査の第6トレンチの南に隣接した部分に設けたもので，当初8m×8mのトレンチを設定したが，東・南については攪乱が著しく，最終的に遺構面が残っていたのは東西約4.8m×南北約5.7mの小規模な範囲であった。

Bトレンチは遺構検出面が浅く，機械によりコンクリートを除去した段階で遺構を検出した。Bトレンチで検出した遺構は土坑(SK0702・SK0703・SK0704)・溝状遺構(SD0701)がある。

SK0702は，SD0701・SD0703を切る方形の土坑であり，当初建物の掘形を想定したが，柱穴がみつからず，底部も不整形であること，攪乱を受けていないトレンチの東側にSK0702に関連した遺構がないことより建物に関連した掘形とは考えられなかった。

SK0703・SK0704の土坑は，第6次調査で検出したSD0606と同一の遺構であり，宅地内の内溝(SD45)の延長部のSD0606の南肩を確認したことになる。

SD0701は，SK0702・SK0703・SK0704を切る南北方向の溝状遺構である。SD0701は，上面幅約30～40cm・深さ約20cmを測り，断面は⊔形を呈する。SD0701からは平安時代前期の土師器・須恵器が出土した。

Bトレンチでは遺構の切り合いがあるにもかかわらず，各遺構は第Ⅱ期である平安前期に帰属する遺構と考えられる。

c；出土遺物

第7次調査で出土した遺物は現在整理作業中であり，詳細については『京都府遺跡調査概報』に掲載する予定である。そのため，ここでは出土遺物について簡単に説明するにとどめる。第7次調査では，Aトレンチの掘立柱建物の柱穴および掘形内から土器類・瓦類が出土した。各掘形内出土土器は，平安時代前期の特徴をもつ須恵器杯・蓋，土師器甕などである。また，Aトレンチの遺構検出作業に際し，順次黒褐色粘土層を除去する時点で6世紀末～7世紀前半の須恵器杯身などが出土した。Bトレンチは，狭い範囲の調査であったため出土遺物が少なかったが，各遺構とも平安時代前期と考えられる土師器・須恵器などが出土した。

4. ま と め

平安京右京一条三坊九町における第7次調査は調査面積が狭く，また現代の攪乱が著しい部分の調査ではあったが，当初の予想に反し多大な成果をおさめた。

Aトレンチでは，第Ⅱ期に属する東西方向の掘立柱建物跡(SB0733)を検出し，第1次調査で検出した中心建物との関連が考えられる。このSB0733は約2.4m(8尺)の等間隔に柱列が並び，掘形も1m前後と大きく，10尺等間の中心建物群には及ばないまでも，厨房区にあると考えられる桁行6尺等間×梁行7尺等間の建物(SB155)より規模が大きい。このSB0733の位置は，第1～第4次調査で検出した第Ⅱ期の建物配置でみると，九町の南半分で推定南門と推定内門の中間よりやや南西にあり，SB155の東側柱筋・SB07の西

側柱筋の延長線上がSB0733の東端の柱列より1間西の掘形の柱筋に揃い，その規格制が考えられる。

Aトレンチでは第Ⅱ期の遺構とともに，第Ⅰ期に属する竪穴式住居跡を2基検出した。第Ⅰ期の遺構については，第1次調査以降竪穴式住居跡を検出しており，第Ⅰ期の集落の南への広がりが認められた。

Bトレンチでは，第6次調査で検出したSD0606と同一遺構であるSK0703を検出し，第1・第3次調査で検出したSD45と合わせ，宅地内の内溝の延長線を明らかにした。

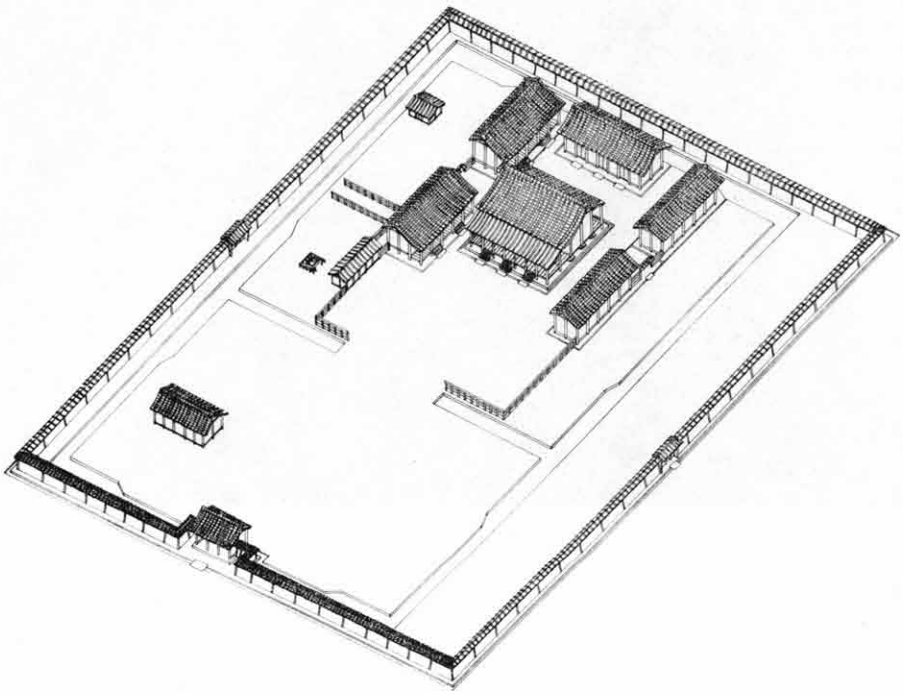
このように，今回の調査では調査面積が狭く，一部現代の攪乱が及んでいるにもかかわらず，各時期の遺構，特に第Ⅱ期に属するSB0733を検出したことは，九町の南半分の南門と内門の間に整然とした建物群が予想でき，今後の調査に期待がもたれる。

(いしい・せいじ＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

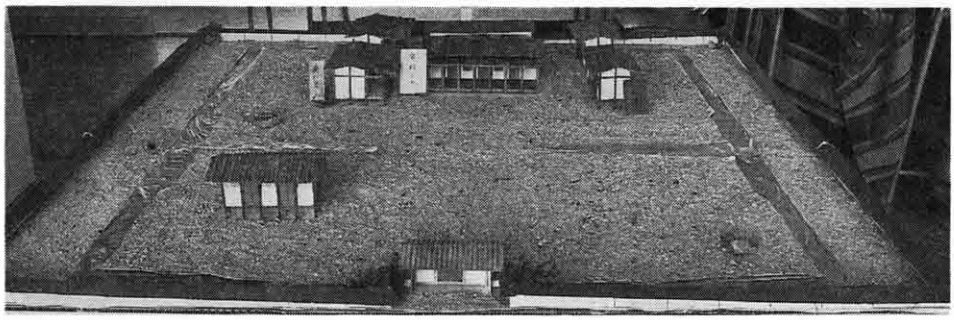
注1　平良泰久・石井清司・常盤井智行「平安京跡(右京一条三坊九町)　昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会)　1980

注2　平良泰久・伊野近富・常盤井智行・杉本　宏・谷口智樹・村川俊明「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会)　1981

注3　山口　博「平安京跡右京一条三坊九町　昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター)　1985



第5図　九町Ⅱ期建物復原図(『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』より一部加筆・修正)



この写真は山城高校歴史部の方々が，昭和62年９月の文化祭に展示されたものです。
この写真には今回検出しましたSB0733の建物も含まれています。

調　査　地　全　景

木津町八後遺跡・恭仁京跡(作り道)の発掘調査

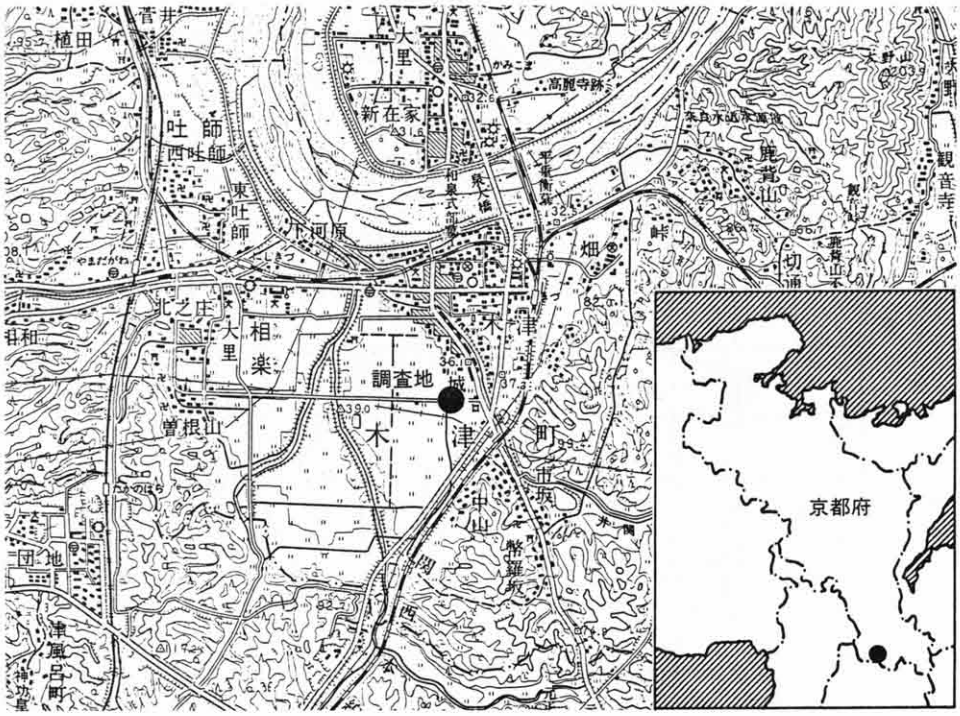
岩松　保

1. はじめに

今回の恭仁京跡・八後遺跡の発掘調査は，一般国道163号線バイパスの建設に伴う事前調査で，建設省近畿地方建設局の依頼を受けて，開発対象地約2,200m²のうち640m²の調査を昭和62年7月15日から同年11月9日まで行った。調査地は木津町平野部の中央部東側にあたる(第1図)。

八後遺跡は，奈良時代の土器片の散布地として知られているが，その実態についてはよくわかっていない。一方，「作り道」は，740年から743年までの都であった恭仁京の右京域の南北中心線・計画道路として歴史地理学の方面から復原されているが，今まで発掘調査によって確認されていない。

調査では，道路状遺構2条とそれに伴う側溝・轍状遺構，運河状流路，自然流路，中世



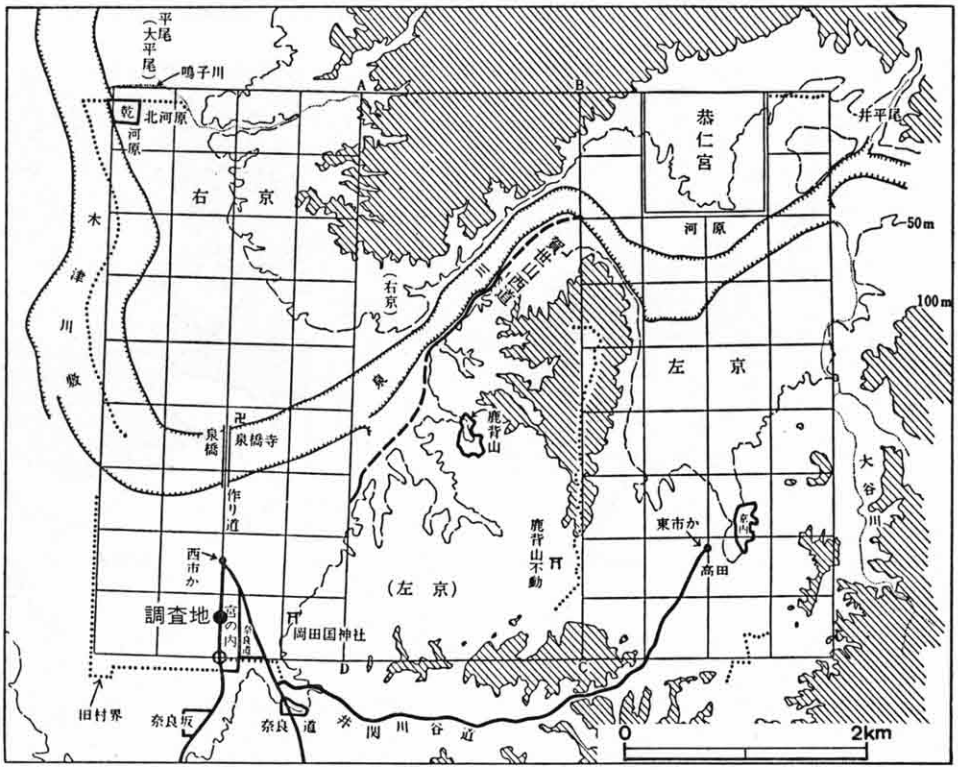
第1図　調査地位置図(1/50,000)

素掘り溝等を検出した。特に，側溝・轍状遺構を伴う２条の路面遺構は，推定「作り道」の近傍で確認されたこともあり，不明確な部分の多い恭仁京を考える上で貴重な遺構と判断される。そこで，まず恭仁京の研究を以下振りかえり，その後調査の概要について述べたい。

2. 恭仁京とその研究

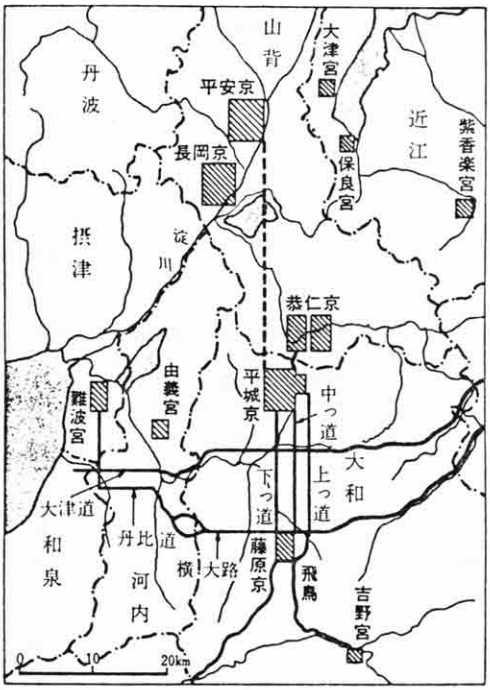
史料(『続日本紀』)によると，聖武天皇は，天平12(740)年に遷都の詔を発し，恭仁京の造営に着手している。13年の条に「遷平城二市於恭仁京」，「班給京都百姓宅地。従賀世山西道以東為左京。以西為右京。」とあり，右京・左京を併せもつ都城が計画されたことがわかる。さらに，９月には「為供造宮。差發大養徳。河内。摂津。山背四国役夫五千五百人。」，14年１月には「賜家入大宮百姓廿人爵一級。入都内者。无問男女並賚物。」とあり，恭仁京・宮の造営は精力的に行われたことが推察される。しかし，遷都から３年後の15年12月には恭仁京の造作は停止され，翌年の１月には難波宮に天皇は遷り，２月には難波宮を都とする旨が発表された。

恭仁京は都として短命なこともあり，その規模・整備状況に関しては全くわかっていな



第２図　恭仁京域復原図(上田正昭編『日本古代文化の探究 都城』社会思想社 1976 より加筆・転載)

い。歴史地理学の立場から2～3の復原案が提示されている。足利氏の復原案によると，鹿背山を挟んで恭仁宮のある加茂町に左京域を山城町，木津町に右京域を設定している(第2図)。「作り道」は，山城町に現存する「東作り道」・「西作り道」の小アザ名より与えた名称で，平城京四坊大路の北の延長線上に位置する南北道路であり，右京域の中軸を設定した計画道路と復原している。この道は中ツ道の南北延長線上とも一致している(第3図)。「作り道」は，丹田川の東に沿った南北に連なる細長い水田面をそれに充てている。また，井関川谷道を右京・左京にそれぞれ設けられた東西両市を結ぶ道と想定した。



第3図　古代宮都位置図
(坪井清足編『古代を考える　宮都発掘』吉川弘文館1987より転載)

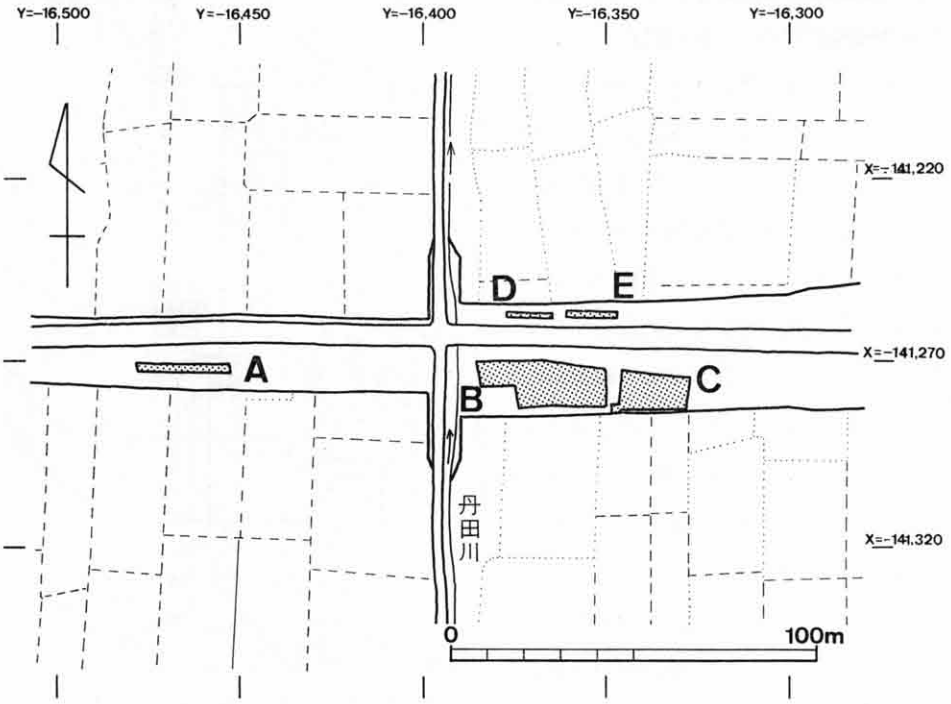
他の復原案においても，この「作り道」を恭仁京の主要南北道路跡に推定することに変わりなく，恭仁京を研究する上で「作り道」は重要な位置を占めている。

3. 調査概要

調査は，5本のトレンチを設定し，A～Eのトレンチ名を付した(第4図)。以下，トレンチ毎にその概要を報告する。

(1) **Aトレンチ**　現地表下約50cmで南北方向の素掘り溝(幅約20cm)を9本以上確認した。これらの溝は約3.8mの間隔で掘られており，出土土器・検出の層位より中世のものと判断する。

(2) **Bトレンチ**(第5図)　ほぼ南北に穿たれた3本の溝および土坑等を確認・検出した。SD08は緩やかに傾斜するためその肩は判然としないが，幅15m以上・深さ1.3m(路面状の平坦地からの深さ)を測る。規模・形状から，流路と考えられる。出土土器はほとんどないが，溝底付近から中世の土器片が出土している。SD06は，幅1.3m・深さ0.3mを測る。出土土器は須恵器・土師器の小片があり，奈良時代のものである。SD04は幅2.9～3.7m・深さ0.3～0.4mで，溝底より布目瓦片，須恵器鉢(平安時代前期)が出土した。路



第4図　調査トレンチ配置図

面遺構(SF07)は，SD08付近とSD04によって区画された平坦面である。検出したSD08は，中世の掘削・改修になるもので，正確な路面幅はわからないが，検出した幅は13.3m程度を測る。この中央部とやや西寄りで無数の轍跡と考えられる遺構を検出した。SD06は，その埋土の上面で轍跡を検出したことから，路面遺構より古いものといえる。路面上からは奈良時代の須恵器小片が出土している。側溝(SD04)内の出土土器との年代とは異なるが，側溝内の清掃・改修・拡幅等により，古い遺物が一掃されたものと考える。

SD04の東側は，後世に削平されており，当時の遺構は検出されていない。土坑・素掘り溝等は中近世の時代が与えられる。

(3)　**Cトレンチ**　路面遺構とそれに伴う轍跡・側溝，自然流路，南北素掘り溝等を検出した。路面遺構(SF17)は東側がSD02・SD03で画された平坦面であったが，西側は中近世の削平のため確認できなかった。路面幅は，8.4m以上を測る。土層の観察によると，盛土を行って路面を平坦に作っている。方向は，北より約30度西へ振れている。平坦面中央のSD12・SD14は，1.6mの間隔で平行するもので，検出長9.8m・幅40～50cmである。形状から轍跡と判断される。これらの遺構は，出土した遺物から奈良時代に遡るものと考えられる。

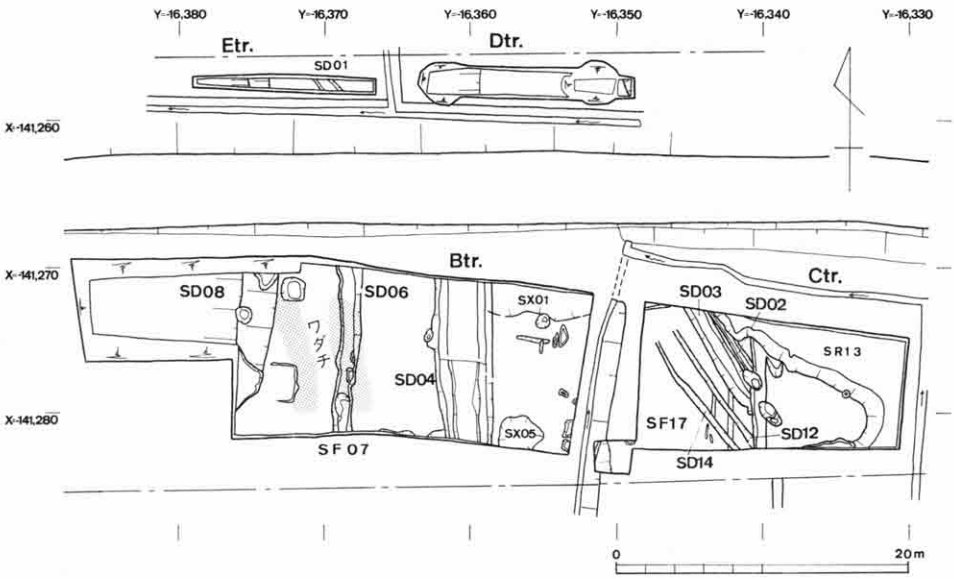
東半は，中近世の開墾により削平されていて，検出した遺構は流路・素掘り溝等である。

(4) **Dトレンチ** SF17・BトレンチSD04の続きが検出されるものと期待された。トレンチの西で溝状の落ち込みを検出したが，この溝底の高さは33.8m(標高：以下同じ)でSD04の33.9mと近似する。しかし，この溝状の落ち込みは近世の土器片を出すこと，埋土が砂質であり，SD04の粘土質とは異なることから，同一のものではないと考える。SF17の検出高はCトレンチの南側で35.4m，北側で35.2mと南から北に傾斜する。Dトレンチ中央部の地山面は34.4mと約0.8mの高低差があり，Cトレンチ南北幅の間でのSF17の傾斜分より下がっている。Dトレンチのある地区は後世の削平をかなり受けていると考えるのが妥当である。

(5) **Eトレンチ** このトレンチも後世の開墾により，路面遺構(SF07)は削平されていた。Eトレンチの中央部での地山高は33.8mで，SF07の路面高は34.4mを測る。トレンチの西側で緩やかに下る傾斜地を確認しており，BトレンチSD08の続きと考える。SD01内からは瓦器片が出土している。

4. まとめ

今回の調査では，奈良時代に遡る路面遺構が二条確認できた。SF07は，歴史地理学の立場で考えられている推定恭仁京右京中軸線の「作り道」(中ツ道)に極めて隣接して検出された。狭い調査地の中での計算ではあるが，SD04はやや屈曲しているが，真北～約4°



第5図 B・C・D・Eトレンチ主要遺構配置図

東に振れる方位をもつ。また，現時点ではSF04との関連はわからないが，SD06は北より約4°東に振れる。

ほぼ同方位をもつ遺構は木津町上津遺跡で見つかっている。第二次調査で検出した遺構群は平城京の外港「泉津」に設営した官の施設と位置づけられている。この調査で検出されたSD01は東西総延長166mにわたって確認され，六条坊門路に近い位置を占める道路状地割の南側溝と推定している。この東西溝は北より3°40′東に振れている。

足利氏の復原案によると，右京域は約3°東に振れるものとして復原されているが，今回の調査での路面遺構や上津遺跡で検出した側溝の軸線の方位はこれに近似する。今後，各地点での発掘調査によって，類似の遺構の検出をまって論を進める必要があろう。

また，Cトレンチで検出した路面遺構は，北より西へ約30°の振れをもって設けられている。この道を南へ延長すると「井関川谷道」にあたる。路面上で出土する土器によると，SF07とSF17は共に奈良時代のものであり，同時に利用されていたものと思われる。これらの関係を今後検討していく必要があろう。

調査面積が少ないこともあり，SF07・SF17をそれぞれ「作り道」（中ツ道）・「井関川谷道」に断定することはできない。しかし，従来不明であった恭仁京域で，その関連遺構と判断できうる遺構を検出したことは，今後の京域内での調査の必要性を証明したものと考える。

（いわまつ・たもつ＝当センター調査第2課調査第3係調査員）

<参考文献>
足利健亮『日本古代地理研究』大明堂　1985
谷岡武雄『平野の開発』古今書院　1964
岸　俊男編『日本の古代9　都城の生態』中央公論社　1987
坪井清足編『古代を考える　宮都発掘』吉川弘文館　1987
上田正昭編『日本古代文化の探求　都城』社会思想社　1976
『木津町埋蔵文化財調査報告書』第3集　木津町教育委員会　1980

昭和62年度発掘調査略報

6. アバ田古墳群

所在地　熊野郡久美浜町新庄アバ田

調査期間　昭和62年7月9日～11月11日

調査面積　約300m²

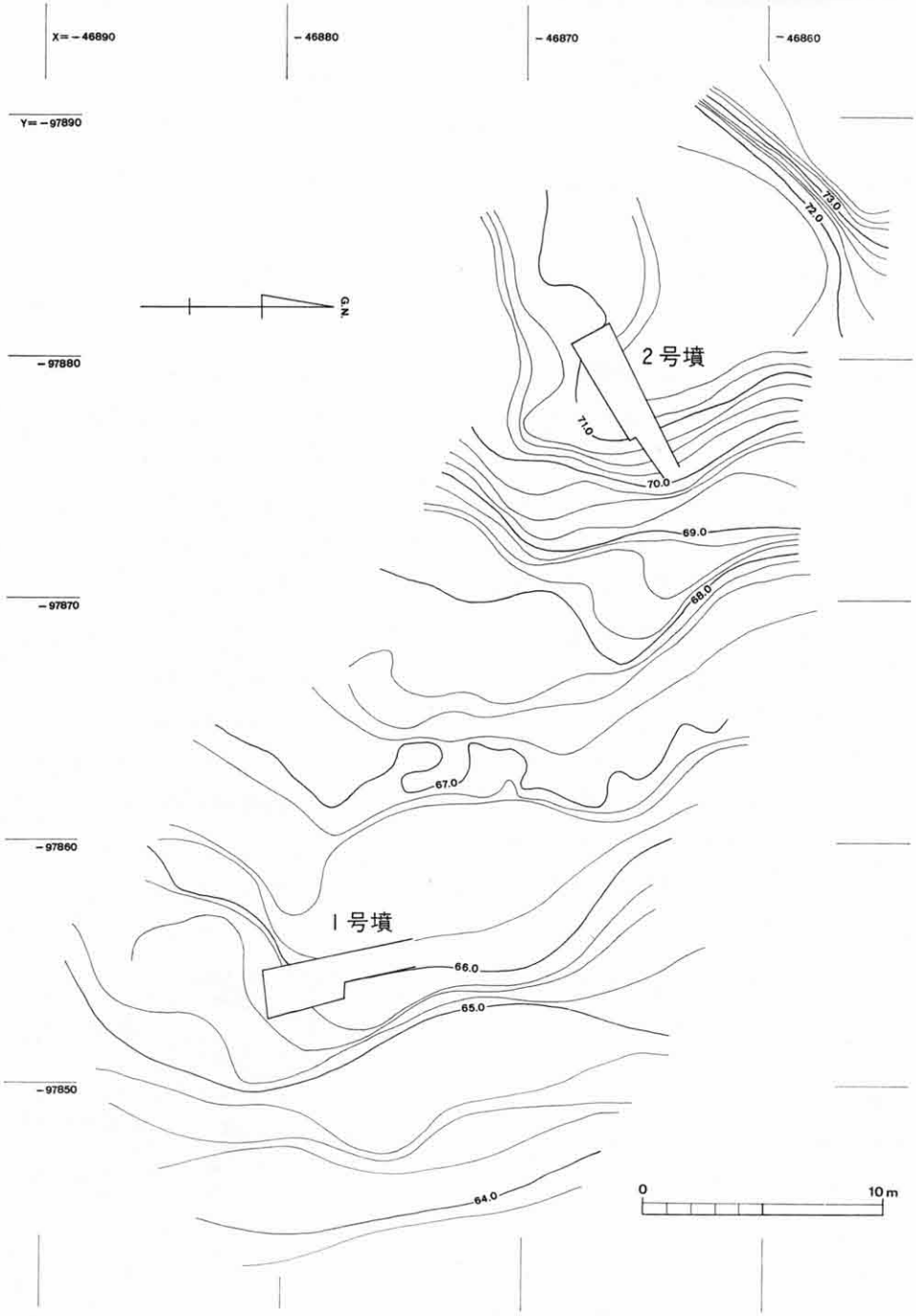
はじめに　アバ田古墳群の調査は，丹後国営農地開拓事業新庄団地の造成に伴う事前調査である。アバ田古墳群のある新庄の谷は，湯舟坂2号墳・平野古墳のある伯耆谷の北にあり，古墳群はその小支谷の中に張り出した尾根の先端に位置する。この新庄の谷筋では，昭和56～58年に久美浜町教育委員会が調査した権現山遺跡のほかは知られていなかった。しかし，国営農地予定地内の分布調査の結果，アバ田古墳群のほか，京都府教育委員会が今年度調査した崩谷古墳群など多くの遺跡の存在が明らかになった。

調査概要　アバ田古墳群は，横穴式石室を埋葬施設とする2基の古墳からなる。1号墳は，周囲が水田の開墾等で地形が改変されていたため，明確に墳形・規模等を知ることはできなかった。しかし土層の観察などから，直径12m程度の円墳と考えられる。埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖を持つ片袖式横穴式石室である。全長63m・玄室長3.1m・幅2m・羨道長3.2m・幅1.4mを測る。石室内の遺物の出土状態は良好で，須恵器・土師器等約50点が出土している。築造時期は，6世紀後半と考えられる。

2号墳においても，羨道前面と墳丘の一部が削平されていたが，丘陵側で周溝を検出し，直径約12mの円墳であることがわかった。埋葬施設は，奥壁から羨道に向かって右側に袖を持つ片袖式横穴式石室である。全長6.9m・玄室長4.4m・幅1.9m・羨道長2.5m・幅1.2mを測る。石室内からは，須恵器・土師器・勾玉・馬具・鉄刀・鉄鏃など約90点が出土している。6世紀後半の築造である。

まとめ　アバ田古墳群は，6世紀後半に築造された2基の横穴式石室を持つ古墳であることがわかった。近接した地域にある崩谷古墳群には，ほぼ同時期の横穴式石室墳があり，新庄地区の歴史を考える上で貴重な資料と言える。（荒川　史）

第1図　調査地位置図(1/50,000)
1. アバ田古墳群　2. 崩谷古墳群



第2図　アバ田古墳群測量図

7. 遠 所 古 墳 群（1号墳）

所 在 地　竹野郡弥栄町木橋小字遠所

調査期間　昭和62年8月18日～10月23日

調査面積　約230㎡

はじめに　この調査は，農林水産省近畿農政局が計画，推進している「丹後国営農地開発事業」の鴨谷団地造成工事に伴い実施したものである。

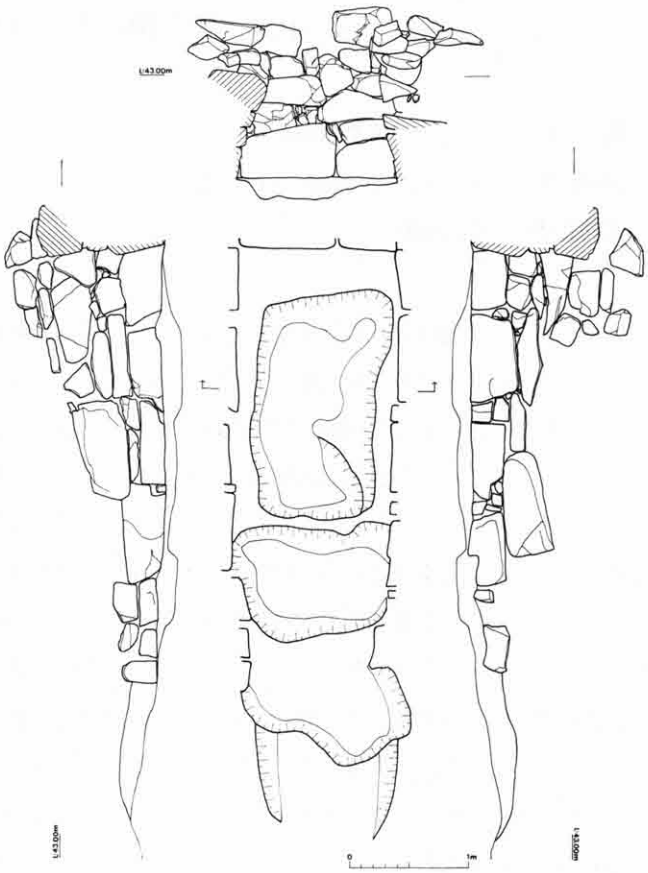
遠所古墳群は，弥栄町の西端，網野町との町村界付近の丘陵上に位置する。この丘陵上には，分布調査等により21基の古墳が確認されている。これらの古墳の大半は，木棺直葬墳と思われるが，1・2号墳のみ石材の散乱が認められ，横穴式石室を内部主体とすると考えられていた。このうち，今年度調査の対象となったのは1号墳で，2・3号墳および南側の丘陵に立地する5基の古墳は，伐採，地形測量のみ実施した。1・2号墳は，昭和28年頃に石室の調査が行われたとされるが，詳細は不明である。

調査概要　墳丘は非常によく整った直径14mの円墳で，東側からの高さ4mを測る。石室は，玄室奥壁で5段，側壁で1～5段の石材が残存していたが，羨道と考えられる部分には石材は認められなかった。また，玄室と羨道部の境には約20cmの段差があり，本来この部分にも石材が置かれていたようで，抜き取られたような痕跡が認められた。羨道部分は，石材を置いていたと思われる側壁部分のみ平坦で，中央部分は凹んでいる。この凹みは，玄室との境と思われる段差のある部分からやや南上がりの傾斜をもつ。玄室全長3.7m・幅0.9～1.35m，玄室中央部分がもっとも広く，残存高1.4mを測る。これに対し羨道部は，玄室との境から中央部分の凹みの無くなる南端まで1mと極端に短い。形状から竪穴系横口式石室が考えられるが，横口部分が過去の調査時に一部荒れているため，不明瞭な所もある。石材は，付近一帯より産出する花崗岩である。

第1図　調 査 地 位 置 図（1/50,000）

遺物は，床面より上方でほぼ完形の提瓶1が出土したのみで，床面からは，細片化した須恵器，鉄鏃，刀子，馬具類が若干出土した。床面自体，過去の調査により，かなり凹凸があり，面として残る部分は少なかった。

一方，墳丘西側には，2号墳と区画する溝が設けられており，内部埋土より多量の須恵器が出土した。甕類については2号墳より流れ込んだものであるが，南側の溝底面には，瓿・杯身・杯蓋・壺・高杯が一括して出土した。いずれも破砕されており，各所に分散していた。



第2図　遠所1号墳石室実測図

墳丘東側盛土中からは，土師器壺に須恵器杯蓋がかぶさった状態で出土している。石室が完成してから置かれたものと思われ，また墳丘頂部中央付近では，墳丘完成直前に置かれたと思われる高杯2個体も出土した。いずれも祭祀に係るものと思われる。

まとめ　遠所1号墳は，出土した遺物から6世紀後半に築造された竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳であったと考えられる。竪穴系横口式石室を内部主体とする古墳は，京都府北部では天田郡三和町流尾古墳，福知山市池ノ奥4号墳，宮津市梯倉山1号墳，与謝郡加悦町入谷西A-1号墳の4例が知られるが，いずれも6世紀前・中頃の築造で，その分布も分散している。遠所1号墳は，全国的にも横穴式石室盛行期にそれを受容せず，特異な石室を造っていることから，遠所古墳群を形成した集団がどのような性格であったか，類例のある地域との交流関係の中でその結びつきを考えていく必要があろう。

（増田孝彦）

8. 橋 爪 遺 跡 第 4 次

所 在 地　熊野郡久美浜町橋爪矢須田

調査期間　昭和62年7月29日～昭和62年9月12日

調査面積　約304m²

はじめに　この調査は，昭和62年度京都府立久美浜高等学校校舎改築工事に先立ち行った。橋爪遺跡は，大正12年以来，弥生土器が採集され，昭和42年以来，過去3度(昭和42・56・57年)の調査により，弥生時代中期から古墳時代中期にわたる川上谷川水系の拠点集落の1つとして注目を集めてきた。今回の調査は，これらの経過を踏まえ，校舎改築予定部分について発掘区を設定した。

昭和42年調査地に隣接する渡り廊下部分を第1トレンチ，管理棟部分を第2トレンチとしたが，両トレンチでも，激しい湧水のため，調査は困難を極めた。

調査概要　第1トレンチは，前述のように，第1次調査地に隣接するため，多量の遺物の出土が見込まれたが，旧建物の基礎による攪乱が著しく顕著な遺構等は検出できなかった。地表下70cm付近で若干の土器片(弥生時代中期～古墳時代中期)が出土したにとどまる。これらの遺物を含む包含層は，厚さ20cm程度であったが，一時期に限定される文化層ではない。

第2トレンチでは，旧校舎解体後，すでに地山が露出し，旧校舎建築時に削平されていたことが明らかとなった。

まとめ　今回の調査地は，面積的にも狭小であったが，いずれのトレンチでも，旧校舎建築時における攪乱が著しく，明確な遺構は，全く検出されず，若干の土器片を検出したにとどまった。しかし，今回調査地においても，従来調査と同様，弥生時代中期から古墳時代中期の遺物が主体を占めたことから，周辺に当該時期の集落の存在が予想される。　(細川康晴)

調 査 地 位 置 図 (1/50,000)

9. 上中遺跡第5次

所在地　北桑田郡京北町下中鳥谷小迫口12・13番地

調査期間　昭和62年8月3日～10月5日

調査面積　約900㎡

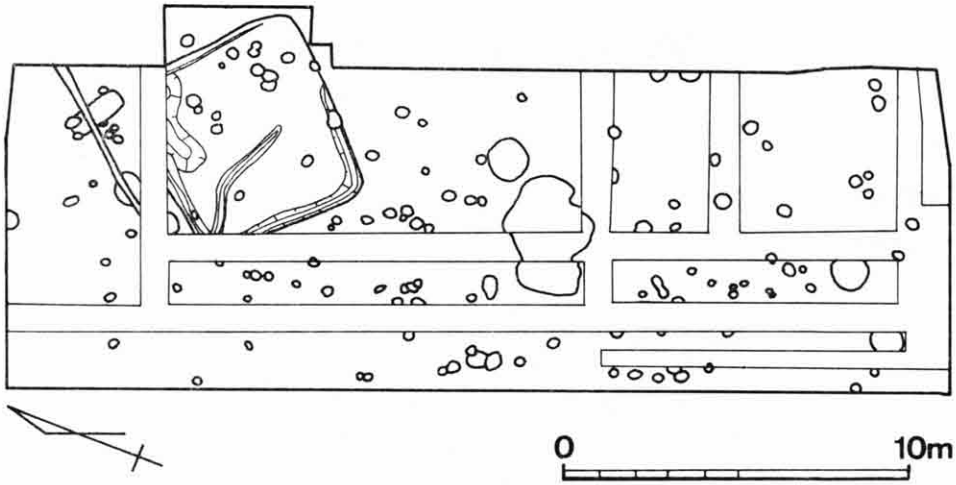
はじめに　この調査は，京都府立北桑田高等学校の管理棟及び廊下部分の改築工事に先立ち行ったものである。

上中遺跡は，京都府北桑田郡京北町下弓削から下中にかけての複合遺跡で，府立北桑田高等学校を中心に広がる弥生時代から鎌倉時代にかけての遺跡である。昭和58年度から高等学校校舎の増改築工事に伴い，昨年度まで発掘調査を実施してきた。その結果，高等学校西側の丘陵裾部で，弥生時代末期から古墳時代前期にかけての川跡がみつかり，高台では古墳時代前期の柱穴状遺構と土坑を検出した。また，この高台より一段低い高等学校北東部から古墳時代前期の土坑38基を検出した。これらの土坑の性格は明確ではないが，墓の可能性がある。

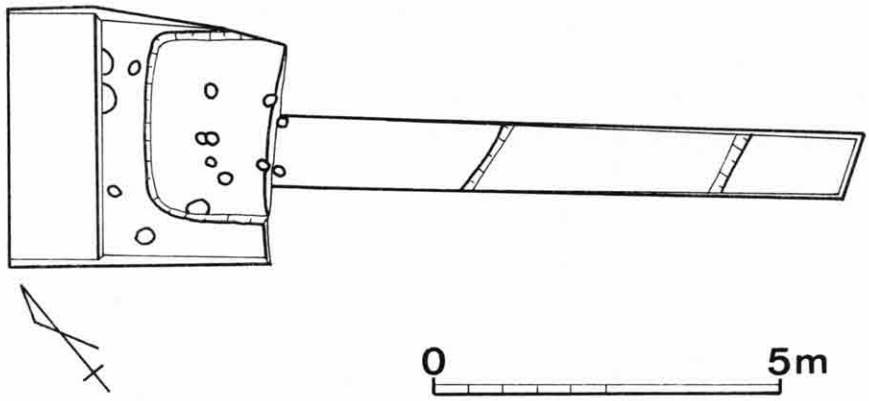
今回の調査地は，丘陵裾部に広がる高台にあたり，集落跡の検出が期待された。

調査概要　管理棟建設予定地にA・Bトレンチを，廊下建設予定地にCトレンチを設定し，バラスや表土の掘削を行った。Aトレンチでは直下が岩盤であり，遺構は存在しなかった。これは，高等学校創立時に削平されたためである。Bトレンチでは，一面が黒色土に変わった。以前の調査で検出した遺構は，この黒色土下層に存在することから，徐々に掘り下げた。その結果，竪穴式住居跡1基・土坑5基・柱穴多数・溝2条を検出した。時期は，竪穴式住居跡・土坑4基・柱穴の大半が古墳時代前期のもので，その他の遺構に関しては出土遺物がないため時期不明である。Cトレンチでは，校舎側のみ黒色土となった。また，校舎と体育館の間で岩盤を掘り込んだ溝状遺構を検出した。校舎側の黒色土を掘削したところ，隅丸方形の土坑1基とこ

第1図　調査地位置図(1/50,000)



第2図　Bトレンチ平面図



第3図　Cトレンチ平面図

の土坑に伴うと思われる柱穴を検出した。土坑中央部でわずかに炭の堆積が見られ，床面からまとまって遺物が出土したことから，あるいは火葬墓ではないかと思われた。時期は，溝状遺構が古墳時代前期，土坑と柱穴が奈良時代中頃である。

まとめ　昭和58年度から4か年度にわたる調査結果と合わせて，今回の住居跡の検出は，京北町における古墳時代前期の集落遺跡の様相をより一層明確なものにした。京北町の歴史を知る上で貴重な資料を提供したといえる。

また，今回の調査で奈良時代中頃の遺構を検出したことで，異なった上中遺跡の一面を知ることができた。特に，火葬墓の可能性のある土坑の検出は，貴重な資料を得ることができたと言えよう。　（岡崎研一）

10. 園　部　城　跡

所 在 地　船井郡園部町小桜97

調査期間　昭和62年10月２日～11月19日

調査面積　約150㎡

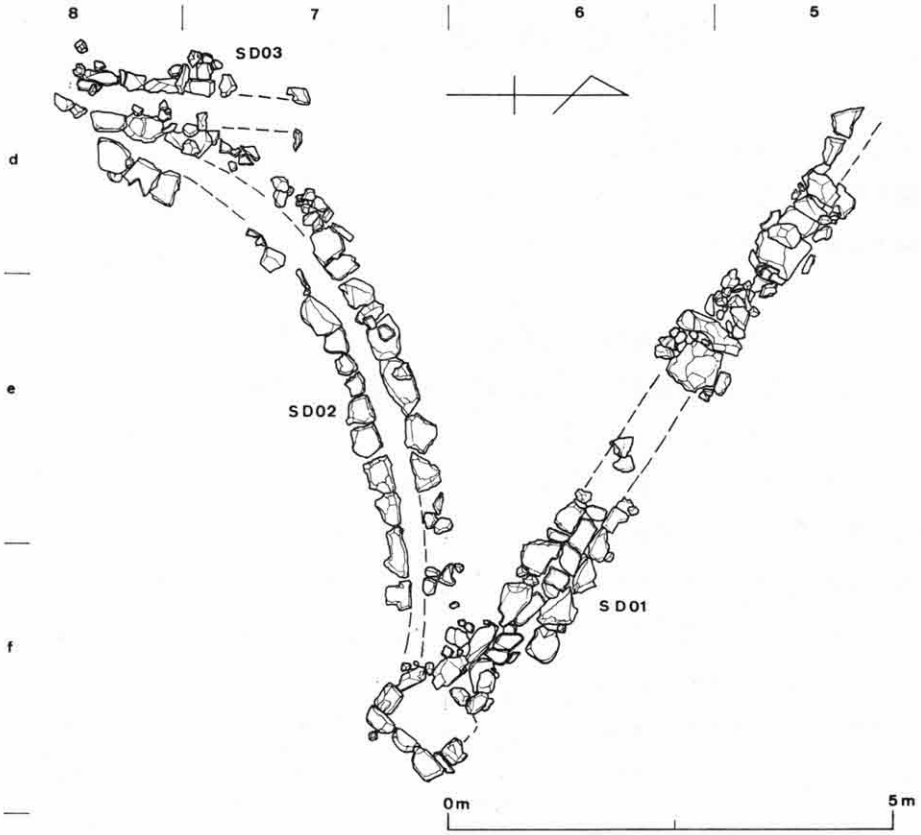
はじめに　今回の発掘調査は，園部高校格技場建設に先立ち実施した。園部城跡は，園部盆地の南西部にある小麦山丘陵を範囲とする。園部城は，江戸時代初期の元和5(1619)年，出石より転封された小出吉親によって築城され，幕末に至るまで小出氏の居城とされた。明治維新前後には，天皇の行在所を想定した増改築がなされている。現存する古絵図の中でも，地籍図として描かれ，資料的価値の高い園部城郭図を検討してみると，調査地は，本丸の中でも北辺中央部にほぼ確定でき，そこには土蔵が建てられていたことがわかった。そのため，以上のことをふまえて発掘調査を行うことにした。

調査概要　発掘調査は，新たに建設される建物相当部分にＬ字形トレンチを入れることから始めた。トレンチ中央部で，石組み溝(SD01，SD02，SD03)を検出したので，方向・大きさ等を確認するためトレンチを北側に拡張した。

検出した遺構は，石組み溝のほかに，土坑・井戸等がある。ここでは，焦点を石組み溝に定めてその概要を略記する。

SD01は，北西方向へ，すなわち本丸から外へ向かってのびる溝であり，枡状施設を起点とする。この溝のみ底部に石を敷いている。途中攪乱により切断されているが，そこから先は蓋石をもつ。蓋石をもつ部分は底部に石を敷いていない。溝に蓋をするにあたっては，まず一辺30～50cm大の石を用いて蓋をし，次にその周囲に拳大の石と平瓦の小片，完形に近い軒丸瓦等を積み重ねて蓋部を形成している。蓋石部横の土層観察及び断ち割りによって，上部と底部に漆喰の痕跡を確認した。なお，枡状部の南東側には，何

第１図　調査地位置図(1/50,000)
1. 調査地　2. 垣内古墳



第2図　石 組 み 溝 平 面 図

ら遺構は確認されなかった。

SD02は湾曲してのびる溝である。湾曲させた目的等は，SD02の周囲が調査地の中でも特に後世の削平が著しいため不明である。この溝の掘形は，溝に沿って屈曲せず，溝の両端を結ぶ直線に近い形態をとる。また，もう一つの特徴として，溝に沿った南側で，裏込めに使用したと思われる集石が検出された。

SD03はSD02と切り合い，北に向かってのびる溝である。攪乱を受けているため，3m程遺存しているにすぎなかった。また，SD03の端から南約1mのところに井戸跡を検出した。

まとめ　石組み溝とともに，井戸跡を検出したため，この石組み溝は井戸と関係する排水施設であろうと思われるが，溝の性格等については，さらにこれから充分検討する必要があろう。絵図に従えば，当初土蔵跡の検出が期待されたが，それらしい遺構は確認されなかった。今回検出した遺構は，絵図が製作された後，構築されたものかもしれない。

（鵜島三寿）

11. 丹 波 亀 山 城 跡

所 在 地　亀岡市古世町北古世

調査期間　昭和62年8月3日～9月28日

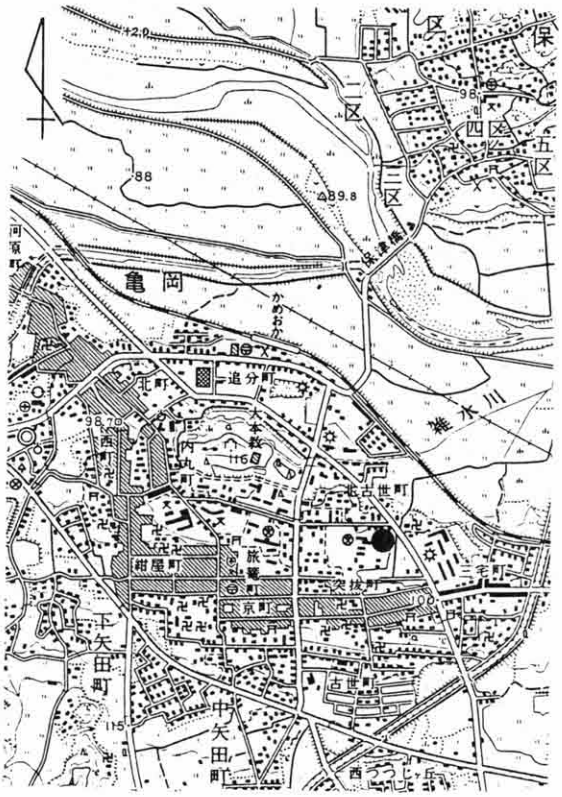
調査面積　約400㎡

はじめに　今回の発掘調査は，府立亀岡高校の校舎改築工事に先立って実施したものである。亀山城は，天正年間(1578～1579年)に明智光秀によって築城され，以後幾度かの城内整備を経て，明治初年頃までは存続していた。その範囲は，現在の亀岡市追分町・荒塚町・古世町・三宅町の東西約1.4km・南北約1kmにわたっていたと考えられる。今回の調査地は，その東よりの部分に位置し，旧武家屋敷街(三の丸)に相当している。

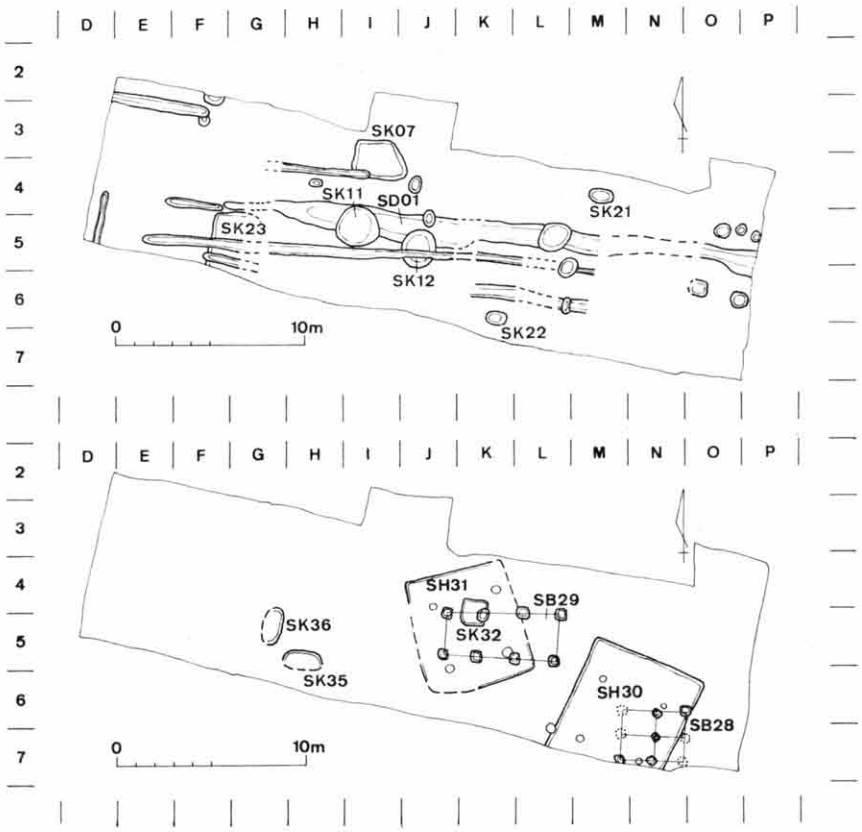
調査概要　調査は，対象地に以前校舎が建っていたことから，まず試掘調査を行い，遺構の遺存状況を確認することからはじめた。その結果，現地表下約60cmに江戸～明治時代の遺構面が遺存していること，さらにその下層に古墳時代後期の遺構面が存在していることを確認した。そこで，調査区を対象地全域に拡張し，上記二面の遺構面の調査を行うこととなった。

上層の江戸～明治時代の遺構面では，溝・土坑を検出した。いずれも当初予想された武家屋敷跡に直接関連のあるものではないが，調査区中央を東西にのびる溝(SD01)は何等かの土地区画を示していたと考えられ，土坑(SK07・21・22)などからは当時の日常雑器が多数出土した。

下層の遺構面では，古墳時代後期の竪穴式住居跡2基のほか，奈良時代の掘立柱建物跡2棟を検出



第1図　調査地位置図(1/25,000)



第2図　主要遺構平面図（上，上層遺構，下，下層遺構）

した。いずれの遺構も遺存状況は非常に悪く，かろうじてその痕跡を認める程度であった。竪穴式住居跡は，いずれも一辺6m前後を測る方形のもので，埋土中出土の遺物から6世紀後半～末葉のものと考えられた。また，掘立柱建物跡は，3間×1間(SB29)・2間×2間(SB28)の規模を有し，主軸はほぼ東西方向を向く。柱穴掘形内出土遺物などから，8世紀中葉頃のものと理解された。

小結　今回の調査では，当初予想された武家屋敷跡に直接関連を有する遺構を確認することはできなかった。しかし，その下層で古墳時代後期・奈良時代の遺構を検出しえたことは，それを上回る大きな成果であった。付近には，すでに削平されてしまった古墳の存在を示すような「荒塚」という地名があるばかりか，当該地に隣接する三宅町は郡衙推定地の一つとして注目されているところでもある。今回の成果を，これらとどのように結びつけるかという点については，多くの問題もあろうが，周辺部に当時の諸遺構が存在することが確認されたわけであり，今後の調査に大きな期待が持たれるところとなった。

（森下　衛）

12. 興　戸　遺　跡

所 在 地　綴喜郡田辺町大字興戸小字犬伏5-3

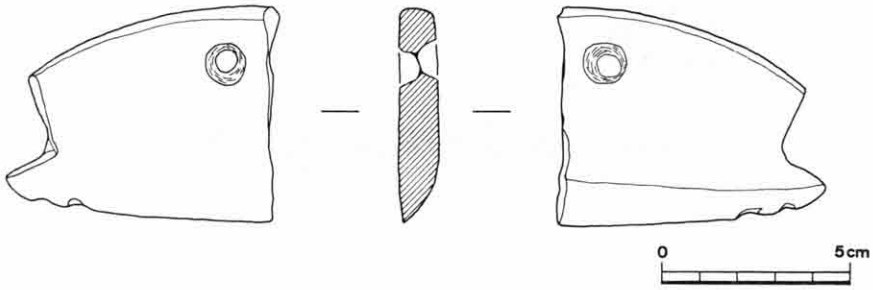
調査期間　昭和62年8月10日～10月13日

調査面積　約600㎡

はじめに　今回の調査は，山城田辺郵便局庁舎新築工事に先立ち実施したものである。興戸遺跡は，町域の西半を占める丘陵(生駒山地)が木津川沖積平野に移行する傾斜変換線を中心に拡がる遺跡で，東西600m・南北500mの範囲を占める。遺跡の南東に興戸の集落が立地するが，この集落は，崩落しやすい砂礫層(大住礫層)からなる丘陵を開析して流下する防賀川が谷口に形成した扇状地の末端(扇端)に成立したものである。今回の調査地は，興戸集落から約500m北西に位置し，段状を呈するこの扇端部の下位に近接している。古墳時代後期の集落および奈良から平安期にかけての官衙様建物群が検出された昭和54年度調査地は，当地の南西約70mの扇端部上位で，約4mの比高差がある。

調査概要　調査は，敷地西半の本館建設予定地を中心にトレンチを設定し，また，敷地東寄りに層位確認のための小トレンチを設けて実施した。結果，古墳時代前期の土器を包蔵する貯蔵穴様の土坑2基，同期と考えられるピット状土坑数基を検出したほか，石庖丁1点が小規模な流路状溝から出土した。敷地内の基本層序は，上位よりⅠ.盛土，Ⅱ.耕作土・床土，Ⅲ.褐色系砂質土(酸化)，Ⅳ.青灰色系砂(粘土)，Ⅴ.暗茶灰色腐植土(以下Ⅳ層とⅤ層の互層が数単位続く)である。古墳時代の遺構は，Ⅲ層上面で検出された。Ⅲ層以下は，旧地形に沿って西から東へ緩やかに傾斜しているが，耕地造成の際，土地を水平化する目的で山側を人為的に削平しており，薄いⅢ層は敷地西寄りでは全く残存しない。貯蔵穴様土坑は，約30m離れて検出されたが，両者は，規模・形態・機能(あるいは廃絶)時期に共通の要素が認められる。すなわち，いずれも直径1～1.5mの円形または長円形プランを呈し，比較的平坦な底部から垂直に近く立ち上がり，外縁付近で大きく外上方に拡がる2段構造の断面形を示す(検出面からの深

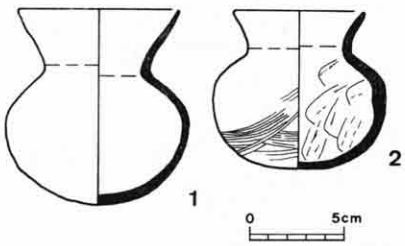
第1図　調査地位置図(1/25,000)



第2図　石 庖 丁 実 測 図

さ0.7～1.0m)。坑内には明確に分層可能な土砂が数層にわたって推積しており，その状況から自然埋没と人為的な改修の痕跡を想定し得る。各堆積土から土器類がややまとまって出土した。いずれも布留式の範疇に収まるもので，甕・壺・高杯・小形精製土器などの器種がある。とりわけ小形丸底壺の完形品がそれぞれ1個体分坑底付近に据え置かれるかのように出土した点は，両者に共通する重要な現象である。ピット状土坑は，前者の周辺に集中する傾向があり，埋土および出土遺物から同期とみて大過ない。調査範囲の関係もあって建物としてまとめ難いが，中には柱痕跡をとどめた直径50cmの円形掘形が2.2m間隔で並列している。出土遺物は，土器類と石庖丁で，土器の大半は，貯蔵穴様土坑から出土したものである。現在整理を進めているが概ね布留式でも新しい様相を示している。石庖丁は，片刃で外湾刃外湾背の型式に属し，厚手で造りも丁寧である。表面に鉄分やマンガンの沈着がみられ，石材は，花崗岩質アプライトを使用する。

まとめ　今回の調査では，古墳時代前期の土坑が検出された。当該期の遺構の検出は過去に土器類は採集されていたものの，興戸遺跡においては初見であり，この遺跡が弥生時代(石庖丁・土器の出土による)から大きく断絶することなく連綿と機能していたことが判明した。今回は，基礎建物建設予定範囲に調査の主眼を置いたが，あいにくこの部分敷地内でも後世の削平が大きく及んでいたため，古墳時代の遺構面は決して良好な遺存状態ではなかった。一方，敷地東半部は，サブトレンチの状況から判断して，遺構面はかなり良好に保たれているようで，今回の土坑が屋外貯蔵穴の可能性が高いことも考え合わせると，近隣に居住区が存在することが十分予想される。そういう意味で今回は，古墳時代の集落の片鱗を垣間見たことになるのかも知れない。　(伊賀高弘)



第3図 出土遺物実測図

1：SK8701出土
2：SK8702出土

資　料　紹　介

亀岡市時塚遺跡採集の石製品類

田　代　　弘

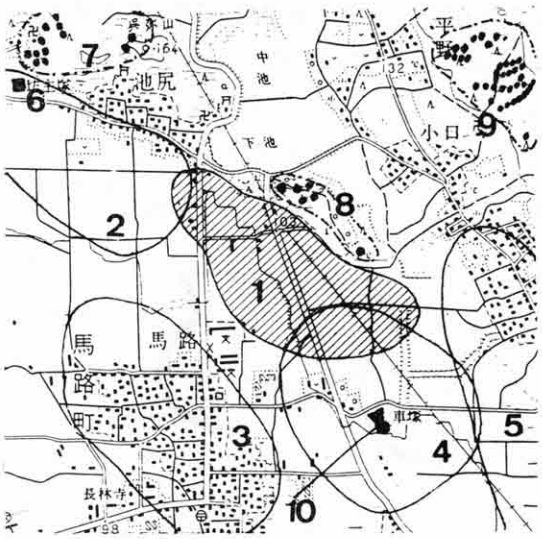
1. はじめに

時塚遺跡は，亀岡市馬路時塚から千歳にかけて広がる複合集落遺跡である。(注1) 大堰川左岸地域を代表する弥生時代の遺跡として，右岸の余部遺跡(注2)とともに早くから注目されてきた遺跡でもある。近年，分布調査が行われ，遺跡の範囲についてはほぼ推定できるまでになった。(注3) しかし，この遺跡は，表面採取資料が中心であることや，その資料について記載した文献が充実しているわけではなく，その具体的内容については明らかでない点が多い。

先日，筆者は，亀岡市域の弥生時代集落遺跡の様相を通観する作業の過程で，亀岡市文化資料館に保管されている当該遺跡出土資料に接する機会を得た。その際，弥生時代に関する資料に限って，撮影・図化を行うことができた。わずかな資料ではあるが，今後この遺跡を検討する上での基礎的資料であると思われるので，ここに紹介しておきたいと思う。

2. 遺跡と遺物

時塚遺跡は，京都府遺跡台帳によると東西750m・南北600mの広がりをもつ弥生時代を中心とする集落遺跡として登録されている。土師器や須恵器が分布する池尻遺跡，車塚遺跡に接し，背後には古墳時代後期の稲葉山古墳群などがある。時塚遺跡からは，弥生土器，石鏃，太型蛤刃石斧，石庖丁，石錐などの弥生時代遺物のほかに須恵器や土師器なども採取されており，(注4) 周辺遺跡と密接な関連がうかがわれる。特に，位置関係からみて時塚遺跡は，古墳時代，稲

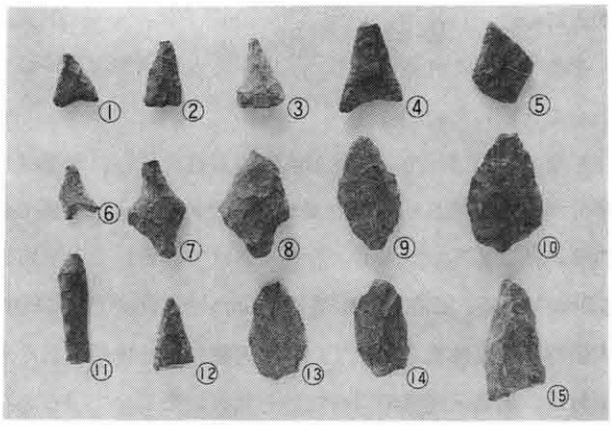


第1図　時塚遺跡位置図（拠，注1文献）

1. 時塚遺跡　2. 池尻遺跡　3. 馬路遺跡　4. 車塚遺跡
5. 出雲遺跡　6. 坊主塚古墳　7. 池尻古墳群
8. 稲葉山古墳群　9. 平野古墳群　10. 千歳車塚古墳

葉山古墳群の築造主体となった集落をその範囲に含み込んでいた可能性が高い。

さて，亀岡市文化資料館に保管されている時塚遺跡出土遺物についてであるが，まず，その内訳を記しておく。遺物は，土器類は無く，すべて石器類であった。



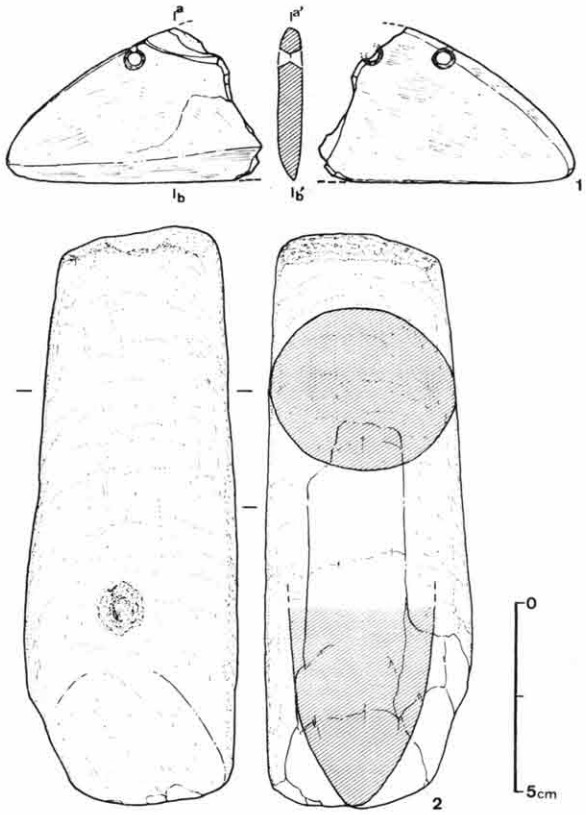
第2図　打製石器類

石器類には，打製石器及びその剥片と磨製石器，磨製石器製作に伴うと思われるホルンフェルス製未製品とその剥片があった。

打製石器　石鏃11点（凸基無茎式3点，凸基有茎式2点，凹基式2点，形式不明の破片が1点，未製品1点），棒状錐1点，調整ある剥片2点，鏃状の不定形な石製品1点，剥片1点。その他に尖頭器(注5)1点。計17点。

磨製石器　石庖丁1点，太形蛤刃石斧1点，石庖丁1点の計2点。

その他，ホルンフェルス製未製品1点，同剥片1点。計2点。



第3図　石庖丁(1)と磨製石斧(2)

以上，合計21点である。

このうち，弥生時代に属すると考えられるものは，石鏃，石錐，石庖丁，太形蛤刃石斧である（第2・3図）。石鏃は，時期を限定するのは困難であるが，すべてサヌキトイド製であり(注6)，積極的に縄文時代とする根拠がないので，弥生時代の参考資料として掲げておく

ことにした。

それでは，これらのうち，石庖丁と太形蛤刃石斧についてやや詳しく観察結果を記しておくことにしたい。

石庖丁(第３図１)　半月形直線刃形態を呈し，刃部は一方の面から研ぎ出している。約半分が残存しており，残存長は横長で約6.7cm，縦長で4.1cmを測り，最大厚は0.6cmである。孔は２孔で，両面より貫孔されている。孔の平均径は外径で約0.6cm，内径で0.4～0.5cmである。２孔間の距離は1.4cm。器表は丁寧に研磨調整を施しているが，Ａ面側に大剝離面の痕跡をとどめている。刃縁には，使用痕とみられる微弱な剝離痕が認められる。素材は，黒色・硬質の頁岩ないし粘板岩を用いている。石材には斑晶を観察することができるので，ややホルンフェルス化していると思われる。

太形蛤刃石斧(第３図２)　Ｂ面側にやや欠損が認められる程度で，ほぼ完存している。全長約15cm・最大幅約5.6cm，厚さは約4.2cmを測る。砂岩製である。器体は，棒柱状を呈し，一端に刃部を形成する。刃部は，Ｂ面側が欠損して無く，Ａ面側にだけ残っている。これによると，刃部は左片側に片寄って作られており，通常，蛤刃と言われるような対称性を欠いている。刃部折損後の再加工，あるいは素材の形状に規定された結果と考えられる。器表面は，丁寧に研磨調整が施されているが，頭丁部は調整が粗雑であり，整形段階のあばた状の敲打痕が顕著に残っている。また，Ａ面側の器体のほぼ中央には，凹状を呈するあばた痕が認められる。これは，研磨調整後に施されていることから，石斧としての機能が終了した後に，別の目的で施されたものとみることができるだろう。(注7)

3.　おわりに

時塚遺跡周辺は，現在，水田として土地利用されており，昔ながらの田園風景を今に残している。遺跡の具体的内容は上に記したように遺物が散発的に確認される程度であり，不明な点が多いが，言い換えれば，それだけ地中には遺構や遺物が良好な状態で保存されている可能性が高いと言うことである。大堰川右岸の遺跡を例に挙げると，弥生時代前期～中期初頭の環濠集落遺跡として一躍有名になった稗田野町太田遺跡，弥生時代中期の大規模な集落であることがわかった千代川遺跡，弥生時代後期の南金岐・北金岐遺跡なども，表面採取の段階では資料が極めて乏しく，同様の状況にあった。ところが，発掘調査の結果，これらの遺跡は非常に良好な状況で地中に保存されていたことが判明し，関係者一同，改めて表面採取資料の検討の必要性を痛感させられたのであった。

大堰川左岸地域は右岸地域に比べ弥生時代の遺跡は乏しい。時塚遺跡出土資料はこのような中で貴重な存在となっている。小稿が，今後，この遺跡について調査あるいは研究を

進めていくうえでの一助ともなれば幸いである。

（たしろ・ひろし＝当センター調査第１課企画係調査員）

なお，小稿の作成にあたっては，亀岡市文化資料館黒川・中沢両氏にお世話になった。記し，謝意を表する。

注１　『京都府遺跡地図』第３分冊〔第２版〕　京都府教育委員会　1986

注２　安井良三「亀岡市余部郡是工場内出土遺物略報」(『昭和40年度亀岡市文化財保護委員会調査報告書』)　1965
安井良三「亀岡市余部郡是工場内出土遺物」(『昭和41年度亀岡市文化財保護委員会調査報告書』)　1967

注３　注１と同じ

注４　注１と同じ

注５　柳葉形の尖頭器である。チャート製（黄土色）で，丁寧な作りのものである。この資料については，後日，観察結果とあわせ帰属時期等について報告する予定である。

注６　筆者が検討の機会を持った太田遺跡(弥生時代前期末～中期初頭）出土石鏃を例にとると，１点を除いたすべて(30点)がサヌキトイド製であった(『京都府遺跡調査報告書』第６冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1986)。当該地域においても，他地域同様，弥生時代の石鏃素材は搬入石材であるサヌキトイドが主流を占めていたようである。

注７　太田遺跡では，太形蛤刃石斧とその転用品があわせて35点出土している。転用品の多くは敲石として用いられ，器体にはあばた状の凹みを顕著にとどめている。この凹みは敲石の握り部分を作出する意図を持つものが多いと思われるが，ものによっては，剥片石器製作台としての機能を考えることも必要であると考えている。

お詫び　前号(25号)で紹介しました玉作り関係遺物の出土について，「長岡京跡左京第115次調査地」と記しましたが，「長岡京跡左京第151次」の誤まりでした。謹しんで，ここに訂正とお詫びを申し上げます。

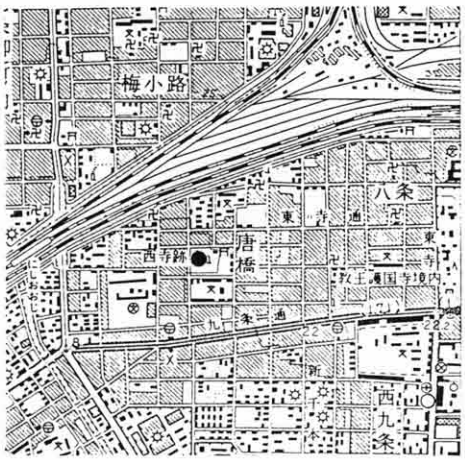
府下遺跡紹介

38. 史跡西寺跡

西寺跡は，京都市南区唐橋西寺町にあって，現在は，「こんだやま」と称する土壇を中心に公園となっている。

西寺は，延暦13(794)年の平安遷都後に造営が開始されたらしい。『伊呂波字類抄』には，「延暦六年丁卯造之，」とあるが，田中重久が論断したように，この記事は全く信用することができない。確実なところでは，『類聚国史』巻百七に，「(延暦十六年)夏四月己未，遣二(中略)従五位上守民部大輔兼行造西寺次官信濃守笠朝臣江人於右京職一(下略)」とあるのが早い例である。この記事から，延暦16年4月にはすでに造西寺次官が任命されていたことがわかるので，『帝王編年記』に「延暦十五年丙子，以二大納言藤原伊勢人一爲二造寺長官一建二立東西両寺一，以爲二東西両京鎮護一，」とある年紀は信用できるかも知れない。いずれにせよ，平安遷都と同時かごく近い時期に造営されはじめたことは確実である。

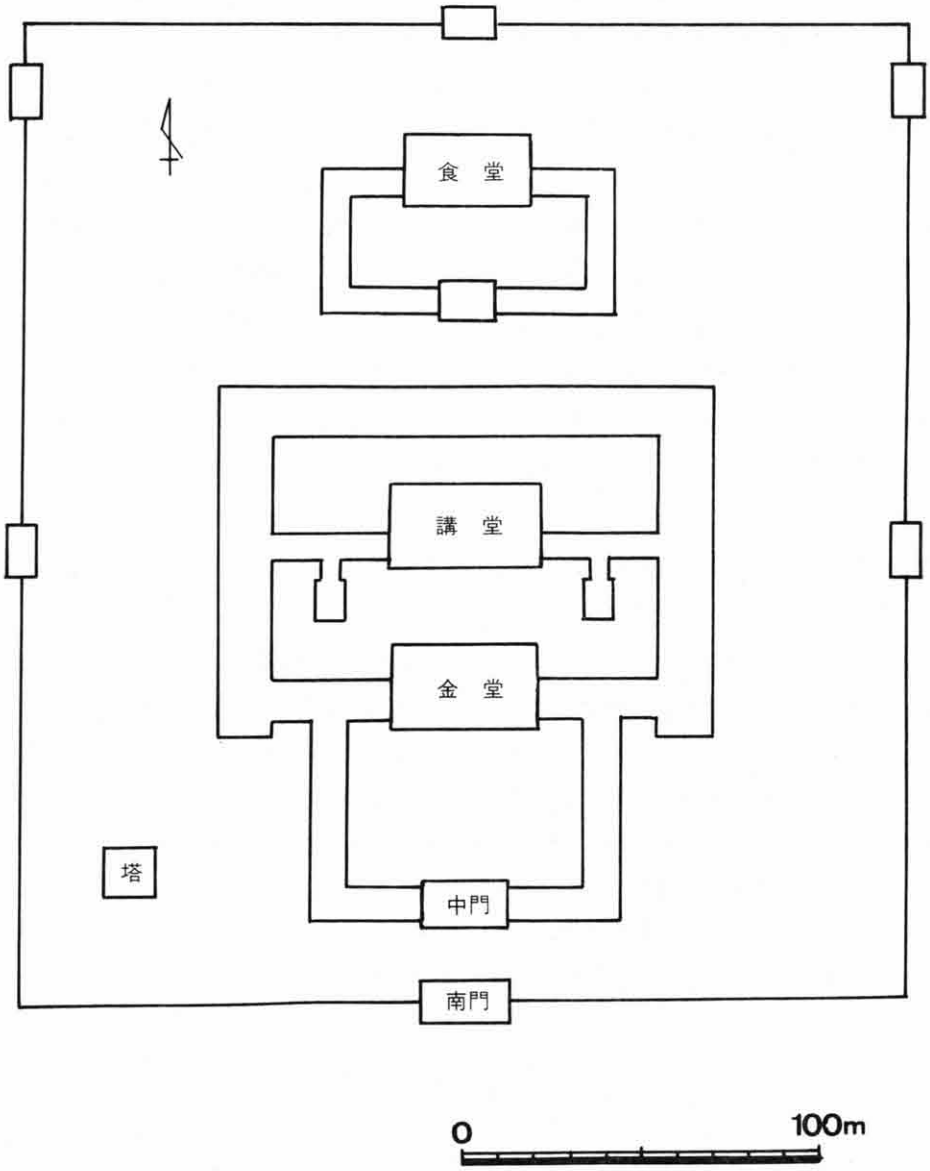
西寺の造営にはかなりの年月を要したようである。『日本後紀』によれば，延暦23年に日下部得足が造西寺次官になったことが見え，その後の大同3(808)年11月には藤原朝臣鷹養が造西寺長官になり，弘仁元(810)年9月には田中朝臣清人，弘仁2(811)年正月には三嶋真人年継が，弘仁5(814)年7月には藤原朝臣永貞が，同年8月には安倍朝臣浄足が，同年12月には安倍朝臣眞勝が，弘仁6(815)年正月には秋篠朝臣全嗣がそれぞれ造西寺長官に就任している。また，弘仁3(812)年11月には布勢内親王の墾田七百七十二町が施入され，翌4年正月には東西二寺で坐夏が行われるようになり，その布施・供養は諸大寺に準ずるものと定められた。天長3(826)年には桓武天皇のために西寺で7日間法華経が説かれている。以上のような西寺に関する記載から見て，このころには，主要な堂塔，なかでも金堂はほぼ完成していたものと思われる。ただ，講堂の完成は，もう少し遅れたようで，『日本紀略』天長9(832)年七月己未条に「西寺講堂供養，御願新造佛・荘厳・法物，一十五種，便即施入，」とあ



第1図　遺跡所在地(1/25,000)

って，このときに西寺講堂を供養しているので，主要な堂宇の完成もほぼその頃と推定することができる。

ただ，塔の完成については，他の堂宇よりもやや遅れたようである。『三代実録』元慶6(882)年6月26日条に「山城國三千束，大和國三千束，伊賀國穀二百五十斛，充造西寺料，並用二通三寶布施料一，」とあって，元慶年間にも造営が行われていたことが窺える。尊経閣本「醍醐寺縁起」の聖宝の年譜に，延喜6(906)年に「西寺別当」となって「宝塔」を造っ



第2図　西寺伽藍推定図（『埋蔵文化財発掘調査概報(1964)』より再トレースした。）

たとあって，現在ではそちらの年紀が信用されており，寺域内の堂宇の中では塔がもっとも遅く完成したと見られている。

その他，北院・南院が見え，そのうち南院は，西寺の南方にあった滋野貞主の慈恩寺が没官されて，承和11(844)年に当てられたもので，寺域の南方に位置したようである。

西寺と東寺の関係は，元来は両者が一体のものとして造営されていた。しかし，西寺別当や三綱は，東寺のものよりも上位にあったり，村上天皇の国忌などが西寺で行われたりするなど，寺としての格は，西寺の方が高かったことは，従来から指摘されているとおりである。これは，西寺が国家の庇護のもとにあったことの裏返しである。それだけに，国家の勢力が衰えると，西寺も荒廃せざるをえなかったようである。東寺が空海以後，密教の中心地として栄えたのに対して，正暦元(990)年の火災によって，塔以外は全焼した。その後，再建の努力はなされたようであるが，保延2(1136)年に南院が焼亡するに至った。西寺の塔も，天福元(1233)年には焼け落ちたことが『明月記』に見えている。これ以後のことは，記録がほとんどなく，わずかに，『二水記』大永7(1527)年10月24日条に，西寺に戦陣のしかれたことが知られる程度である。

ところで，近世以降は，松尾社領として還幸祭の時に「こんだやま」に御輿がすえられたりする(現在でも行われている)など，全くその位置さえも明確でなかった西寺であるが，大正年間に入って「こんだやま」を中心に調査が行われ，1921年には史跡指定されるようになった。調査にあたった梅原末治は，「こんだやま」を金堂に比定したが，現在では，田中重久が考えたように，朱雀大路をはさんで東寺講堂と対称の位置にくることから，西寺の講堂に比定されるようになっている。

このような史跡西寺跡ではあるが，1959年以来断続的に発掘調査が行われており，第2図に挙げたような伽藍配置が推定されるようになった。出土遺物の大部分は，瓦であり，なかには，緑釉のものや「西寺」と刻印されたものもある。緑釉瓦は，京都市左京区岩倉の幡枝瓦窯で，刻印瓦は，大阪府枚方市の坂瓦窯で焼成されたことが明らかとなっている。また，その他，平安時代以降の土師器・須恵器や瓦器・黒色土器・緑釉陶器なども出土しており，西寺の隆盛な当時のようすを窺わせる。

ところで，現在も西寺と称する寺院があるが，これはもと西方寺といったもので，西寺の名前を継承したにすぎず，古代の西寺とは直接関係するものではない。　(土橋　誠)

<参考文献>
梅原末治「西寺址」(『京都府史蹟勝地調査會報告』第二冊　京都府)　1920
杉山信三「西寺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1964)』京都府教育委員会)　1964
たなかしげひさ「にし寺興亡の研究(1)～(5)」(『史迹と美術』363～366・368)　1966
『史跡西寺跡』鳥羽離宮跡調査研究所

長岡京跡調査だより

この9月から11月の3か月間に行われた長岡京跡の調査は，別表のとおり，長岡宮跡7件・長岡京跡右京域15件，同左京域7件の計29件ありました。これらの調査では，長岡京の道路側溝や長岡京期の建物跡，弥生時代や古墳時代の住居跡等が検出されたほか，木簡や鏡が出土する等の成果があがっています。また，右京第276次調査として，長法寺七ツ塚古墳群の3・4号墳が調査され，主体部を確認し，多数の遺物が検出されるなどの多大の成果もあげられています。

それでは以下に，9月24日・10月28日・11月25日の長岡京連絡協議会で報告された調査のうち，主要なものについて簡単に紹介いたします。

宮内第196次（1）

向日市教育委員会

調査地は，長岡宮の北辺官衙域の推定地に当たり，朝堂院中軸線と一条大路計画線が交差する地点の北西すぐのところに位置している。調査地の北西約80mの場所では，蔵と考えられている礎石建物跡等が見つかっている。

この調査では，時期の異なる長岡京期の南北溝2条が検出されたほか，長岡京期の土坑や掘立柱建物跡，長岡京期以前の柵列跡1条等が見つかっている。長岡京期の南北溝2条は，ほぼ同位置にあり，古い溝を埋めて周辺を整地し，新たな溝が掘削されている。下層の溝は，最大幅約5m・深さ約0.7mを測り，朝堂院中軸線から18.6m前後西に位置している。

遺物は，多量の須恵器・土師器のほか，軒丸瓦・軒平瓦・刻印瓦・丸瓦・平瓦・墨書土器・転用硯等が出土している。特に墨書土器には，「主計」・「主税」と記されており，周辺の調査成果とあわせ，注目されるところである。

宮内第198次（2）

向日市教育委員会

この調査地は，長岡宮の推定地の北東隅近くに当たり，長岡京期の溝が1条検出されている。

宮内第199次（3）

向日市教育委員会

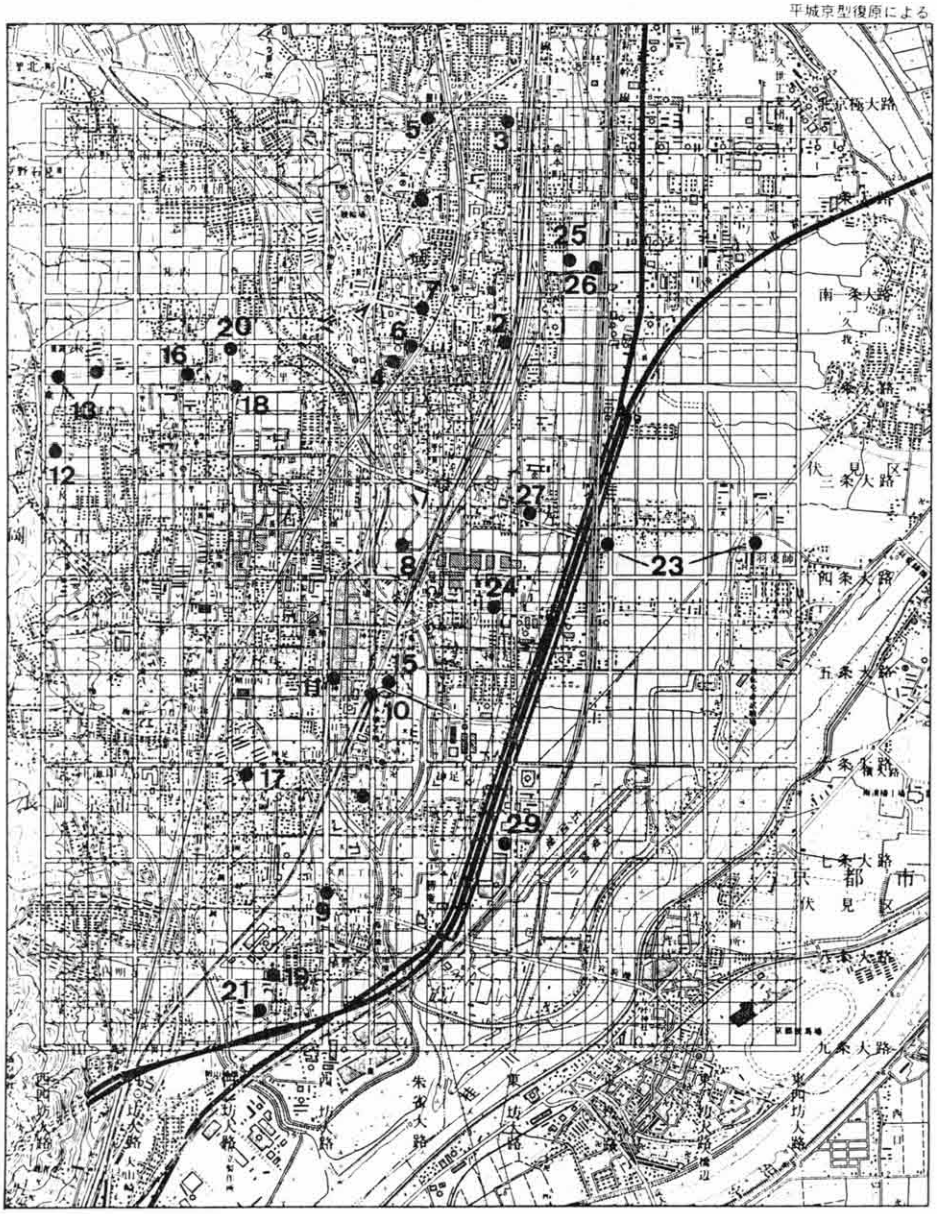
この調査地は，朝堂院西方官衙域の推定地に当たる。南隣には

調査地一覧表（昭和62年11月末現在）

	次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第196次	7AN12G	向日市寺戸町東野辺	向日市教委	62. 9. 1～10. 7
2	宮内第197次	7AN5C	向日市鶏冠井町沢の西15,16	向日市教委	62. 9.28～10. 7
3	宮内第198次	7AN1E	向日市森本町森本8	向日市教委	62.10.12～10.28
4	宮内第199次	7AN15P	向日市上植野町御塔道	向日市教委	62.10.17～10.23
5	宮内第200次	7AN6J	向日市寺戸町初田	向日市教委	62.10.14～
6	宮内第201次	7AN15Q	向日市寺戸町南開	向日市教委	62.11. 4～11.26
7	宮内第202次	7AN14O	向日市鶏冠井町祓所37-1	向日市教委	62.11. 9～11.12
8	右京第271次	7ANFDC	向日市上植野町段ノ町11-1	向日市教委	62. 8. 1～ 9.10
9	右京第272次	7ANQNK-3	長岡京市久貝二丁目310	(財)長岡京市埋	62. 8. 1～ 9. 4
10	右京第274次	7AN MDB-2 MTT-3	長岡京市神足一丁目東神足一丁目	(財)長岡京市埋	62. 8.25～ 9.25
11	右京第275次	7ANKSM-5	長岡京市開田二丁目10-31	(財)長岡京市埋	62. 9. 4～ 9.30
12	右京第276次	7ANJKK-3	長岡京市長法寺北畠20	長岡京市教委	62. 9.14～
13	右京第277次	7ANHKB-3	長岡京市粟生川久保	(財)京都府埋	62. 9. 9～
14	右京第278次	7ANLTR-2	長岡京市馬場一丁目2	(財)長岡京市埋	62. 9.24～10.21
15	右京第279次	7AN MWY-3 MTT-4	長岡京市東神足一丁目	(財)長岡京市埋	62. 9.25～
16	右京第280次	7ANIAE-6	長岡京市今里四丁目221	(財)長岡京市埋	62.10. 5～11.15
17	右京第281次	7ANNKN-3	長岡京市友岡一丁目1	(財)京都府埋	62.10. 9～11. 6
18	右京第282次	7ANIAC	長岡京市今里畔町24-8	(財)長岡京市埋	62.10.12～11.21
19	右京第284次	7ANRUI-2	長岡京市調子三丁目1-1	(財)長岡京市埋	62.11.11～
20	右京第285次	7ANIFC	長岡京市今里更ノ町	(財)京都府埋	62.11.12～
21	右京第286次	7ANSMD-4	大山崎町円明寺松田	大山崎町教委	62.11.11～11.18
22	右京第287次	7ANQND-2	長岡京市勝竜寺28-2	(財)長岡京市埋	62.11.20～
23	左京第174次	7AN XWP XOR	京都市伏見区羽束師志水町	(財)京都市埋	62. 7.31～
24	左京第176次	7ANLZS	長岡京市馬場図書	(財)長岡京市埋	62. 7.20～10. 7
25	左京第178次	7ANEJS-8	向日市鶏冠井町十相11-5他	向日市教委	62. 7. 1～ 9.30
26	左京第180次	7ANFHD-5	向日市上植野町菱田	向日市教委	62. 9.14～ 9.16
27	左京第181次	7ANEJS-9	向日市鶏冠井町十相地内	向日市教委	62.10. 5～10.17
28	左京第182次	7ANFKW-4	向日市上植野町桑原1-3	向日市教委	62.10.12～10.13
29	左京第183次	7ANQHB	長岡京市勝竜寺東落辺14-2	長岡京市教委	62.11.14～

長岡京条坊復原図

平城京型復原による



1000　2000m

数字は本文（　）内と対応

鴟尾片や多量の瓦類が出土した長岡京期の東西溝を検出した調査地がある。今回の調査では，長岡京期の整地層を確認し，平瓦や丸瓦が検出されている。

宮内第200次（5）

向日市教育委員会

この調査地は，長岡宮の北辺官衙の推定地に当たり，北京極大路推定地のすぐ南に位置している。

今回の調査では，長岡京期の南北溝や東西溝等が検出されている。検出された南北溝のうち1条は，調査地を南北に貫き，約40m分確認されている。幅約1.3m・深さ約0.4mを測り，朝堂院中軸線から東へ約18.1m離れた位置にある。宮内第196次調査で検出された南北溝が，朝堂院中軸から西へ18.6mの所に位置していることを考えると，その位置関係が注目される。東西溝は2条検出され，いずれも前記の南北溝に西から合流している。この2条の東西溝が合流した地点の間約6.35mにわたって，南北溝の両岸には側板があてられ護岸されている。また，側板に接して，溝内に角杭列が打ち込まれており，橋脚と推定されている。この遺構の存在する地点は，北京極大路と一条第1小路計画心とのほぼ中央に当たる。

遺物は，長岡京期の土師器・須恵器のほか，軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦・人形・下駄・木簡等が出土している。木簡は，前記の南北溝から出土したもので，「青郷中男作物海藻六斤」と記された荷札木簡や，「陰陽寮解　申□」と記された文書様木簡等がある。なお，青郷は，若狭国遠敷郡内にある。

宮内第201次（6）

向日市教育委員会

調査地は，長岡宮の朝堂院南方官衙域の推定地に当たり，長岡京期の礎石建物跡等が検出された。

礎石建物跡は，東西4間・南北2間以上の規模で，東西両側に廂を持つ南北棟の建物と推定されている。柱間の寸法は，梁行・桁行とも約3mを測る。また，建物の東側柱筋から約1.5m東で南北溝が検出されている。

右京第271次（8）

向日市教育委員会

この調査地は，長岡京の右京四条一坊三町の推定地に当たり，

長岡京期の掘立柱建物跡3棟・柵列跡1条等が検出された。また，弥生時代前期の土坑や，同後期の竪穴式住居跡・土坑，古墳時代前期の溝・土坑・掘立柱建物跡，中世の溝等も検出されている。

遺物は，須恵器・土師器・弥生土器・瓦器・軒平瓦・丸瓦・平瓦・勾玉・管玉・太型蛤刃石斧等が出土している。勾玉・管玉は，古墳時代前期の溝から，布留式の土師器とともに出土したもので，勾玉には頭部に2条の線が刻まれている。

右京第272次(9)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は，恵解山古墳の南に位置し，長岡京の西一坊大路等の推定地に当たる。近世の大溝や柵列跡，中世の溝，平安時代の掘立柱建物跡・土坑等が検出されている。掘立柱建物跡は，桁行5間・梁行2間の規模の東西棟である。また，以前の調査で検出された建物跡の延長も確認されている。

右京第274次(10)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は，長岡京の右京六条一坊八・九町の推定地に当たり，また周辺の調査で，多くの弥生時代の遺構が検出されている。

この調査では，長岡京期の掘立柱建物跡や，弥生時代中期の竪穴式住居跡・土坑・溝等が検出されている。掘立柱建物跡は，南北3間以上の規模の建物と，桁行4間以上・梁間2間の規模を持つ南北棟の建物の，計2棟が検出されている。竪穴式住居跡は，いずれも円形の平面形を呈し，計10基確認されている。

遺物は，土師器・須恵器・弥生土器・打製石鏃・磨製石鏃・石錐・石庖丁・磨製石剣等が出土している。

右京第275次(11)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，推定長岡京右京六条一坊十六町に当たる。この調査では，西一坊大路の東側溝や長岡京期の柱穴等が検出されている。

右京第276次(12)　長岡京市教育委員会

長法寺七ツ塚古墳群の3・4号墳についての調査である。この古墳群は，標高46～51mの舌状にのびる台地上に立地し，7基の古墳が約20mの間隔をおいて東西一列に並んでいる。過去の調査で，3号墳と5号墳の周溝と思われる溝が検出されている。

今回の調査で，3号墳は一辺約15m・高さ約2.5mを測る方墳

で，木棺直葬の主体部を4基有することが確認された。また，4号墳も，全長20m以上，後円部径約16m・高さ約3mを測る，低くて短い前方部を持つ前方後円墳であることが明らかとなり，木棺直葬の主体部が2基検出された。いずれも，自然地形を削り出して，その上に盛土を行い築かれている。

3号墳の主体部のうち，墳丘のほぼ中央で検出された主体部の棺内からは，複数の人骨が検出され，銀環・切子玉・管玉・丸玉等が出土している。また墓坑内には，多量の須恵器が副葬されている。その他の主体部からも，須恵器や，金環・切子玉・棗玉・平玉・ガラス小玉・鉄鏃・刀子等が出土している。

3号墳では，墳丘上に須恵器が供献されており，4号墳でも前方部の墳丘上から須恵器がまとまって出土している。

古墳の築造時期は，出土遺物から六世紀中頃と推定されている。

右京第277次(13)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

この調査は，府道長法寺向日線の道路拡幅工事に伴うもので，長岡京の右京二条四坊五・十三町の推定地に当る。

この調査では現在のところ，弥生時代後期の竪穴式住居跡や，平安時代以降の柱穴列，中世の溝等を検出した。竪穴式住居跡は，一辺が約6mを測る方形の平面形を呈している。

右京第278次(14)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，西一坊第2小路等の推定地に当り，旧西国街道沿いに位置している。

西一坊第2小路東側溝の可能性のある長岡京期の南北溝や，中・近世の溝，土坑，柱穴等が検出されている。遺物は，中・近世の陶磁器類や，寛永通寶・広豊通寶，鉄器類等が出土している。

右京第279次(15)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

江戸時代の柵列跡や土坑・溝，長岡京期の土坑，弥生時代の竪穴式住居跡等が検出されている。

右京第280次(16)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査地は，西三坊坊間小路等の推定地に当たり，周辺では弥生時代や古墳時代の遺構も数多く検出されている。北に隣接して右京第153次調査地がある。

長岡京期の土坑や，弥生時代と古墳時代の竪穴式住居跡，奈良時代の掘立柱建物跡等が検出されている。竪穴式住居跡は，弥生時代後期のものが4基，古墳時代後期のものが2基確認されている。古墳時代の住居跡は，平面形が方形を呈し，1基は西壁中央部にカマドを附している。奈良時代の掘立柱建物跡は，右京第153次調査で同一建物の柱穴が検出されており，2間×2間の規模の総柱建物となる。方位は北に対しやや東に振る。

右京第282次(18)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

この調査では，弥生時代後期から古墳時代前期にかけての，L字状に曲がる自然流路が検出された。この流路の埋土の下層からは，弥生時代の櫂状木製品や棒状木製品，平鍬の未製品等の木製品が多く出土した。櫂状木製品は，先端部に突起が付いており，未製品とみられている。また，流路の埋土の上層からは，古式土師器が多量に検出されている。

この他，この調査では，長岡京期の土師器・須恵器・瓦や，平安時代の緑釉陶器・瓦類も出土している。

右京第285次(20)　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は西二坊大路等の推定地に当たり，中世の溝や，西二坊大路東側溝の可能性のある南北溝等が検出されつつある。

右京第286次(21)　大山崎町教育委員会

長岡京の右京九条二坊十二町の推定地に当たるが，古墳時代後期の竪穴式住居跡1基や，住居跡と同時代と考えられる柱穴列，時期不明の旧河道等が検出された。

左京第174次(23)　(財)京都市埋蔵文化財研究所

東三坊大路東側溝や東四坊坊間小路東西両側溝，長岡京期の掘立柱建物跡・井戸等が検出されている。東四坊坊間小路の東西両側溝は，溝心で約9mの距離を測り，東側溝の東側と西側溝の西側で，柵列跡がそれぞれ溝心から約1.5m離れて検出された。

左京第176次(24)　(財)長岡京市埋蔵文化財センター

調査地は，長岡京の左京五条一坊十・十五町及び東一坊第2小路の推定地に当り，東一坊第2小路の東西両側溝や，長岡京期の掘立柱建物跡・溝等が検出された。東一坊第2小路は，宮の中軸

から割り付けた計画心近くに東側溝があり，朱雀大路寄りに造られていることが明らかとなった。東西両側溝間の距離は，9.5m前後を測る。出土遺物には，墨書土器等もある。

また，この調査では，下層で弥生時代末期から古墳時代初期にかけての時代の方形周溝墓が3基検出された。このうち2基からは，主体部の痕跡が見つかり，調査地中央で検出された一辺約10mの規模の，最も大きい方形周溝墓の主体部からは，直径7cmほどの小形仿製鏡が出土している。鏡は，ほぼ半分が欠けているが，欠けた端部は磨かれている。鏡背面には，櫛歯紋や珠紋等の文様が施されている。

この他，方形周溝墓と同時代の柵列跡や溝等も検出されている。また，さらに下層からは，縄文時代晩期の深鉢がほぼ完形で出土するなど，縄文時代の遺物包含層が見つかっている。

左京第178次(25)　向日市教育委員会

調査地は，長岡京の左京南一条二坊十一町の推定地に当たり，長岡京期の掘立柱建物跡1棟・柵列跡2条・曲物井戸1基・土坑1基等が検出された。掘立柱建物跡は，桁行3間・梁間2間の規模の東西棟で，柱間の寸法は，桁行約2.1m・梁間約2.4mを測る。建物の基礎を安定させるため，礎板を井桁状に重ね，その下に石を配している。

この他，弥生時代の土坑や自然流路等も検出されている。自然流路のうち1条は，沼状堆積をした，非常に幅の広いものである。

遺物は，土師器・須恵器・軒瓦・平瓦・丸瓦・木製品・平篭・弥生土器・磨製石斧・石小刀・縄文土器等が出土している。

左京第181次(27)　向日市教育委員会

長岡京期の柱穴や弥生時代の自然流路等が検出された。遺物としては，須恵器・土師器・軒瓦・丸瓦・平瓦・弥生土器・石鏃等が出土している。

（山口　博）

センターの動向（62.9～62.11）

1. できごと

9. 2　小貝遺跡(綾部市)発掘調査開始

9. 5　栗ケ丘古墳群(綾部市)発掘調査現地説明会実施

9. 7　全国埋蔵文化財法人連絡協議会「日本列島発掘展」企画実行委員会第1回近畿ブロック会議(大阪市)出席(杉原調査第2課長・田代調査員)

9. 9　長岡京跡右京第277次(長岡京市)発掘調査開始

9. 12　橋爪遺跡(久美浜町)発掘調査終了(62.7.29～)

9. 17・18　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(大阪市)出席(山口企画係長・竹原調査員・今村総務課嘱託)

9. 19　高山古墳群12号墳(丹後町)発掘調査終了(62.6.18～)

9. 21　シゲツ窯跡(舞鶴市)発掘調査開始

9. 24　長岡京連絡協議会開催

9. 25　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック事務担当者会議(京都市)出席(安田総務係長，富田・杉江・今村総務課嘱託)

亀山城跡(亀岡市)発掘調査関係者説明会実施

9. 29　平安京跡(京都市)発掘調査関係者説明会実施及び発掘調査終了(62.7.22～)

亀山城跡(亀岡市)発掘調査終了(62.8.3～)

10. 1　特別講演会開催―別掲―

10. 2　園部城跡(園部町)発掘調査開始

10. 3・4　近畿埋蔵文化財担当者会議(大阪市)発表(肥後調査員)

10. 5　上中遺跡(京北町)発掘調査関係者説明会実施及び発掘調査終了(62.8.3～)

10. 6　興戸遺跡(田辺町)発掘調査説明会実施

新ケ尾東古墳群(弥栄町)発掘調査開始

10. 9　長岡京跡右京第281次(長岡京市)発掘調査開始

10. 12　栗ケ丘古墳群(綾部市)発掘調査終了(62.7.13～)

10. 13　泉源寺遺跡(舞鶴市)発掘調査開始

興戸遺跡(田辺町)発掘調査終了(62.8.18～)

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者特別研修(奈良市)参加(黒坪調査員)(～62.10.15)

10. 11　瓦谷遺跡(木津町)発掘調査開始

10. 15　恭仁京跡(木津町)発掘調査関係者説明会実施

10. 19　青野遺跡(綾部市)発掘調査開始

10. 23　遠所古墳群(弥栄町)発掘調査終了(62.8.18～)

10. 28　アバタ古墳群(久美浜町)発掘調査現地説明会実施

長岡京連絡協議会開催

11.　3　木津の文化財と緑を守る会恭仁京跡(木津町)見学

11.　4　以久田野古墳状隆起(綾部市)発掘調査開始

11.　6　長岡京跡右京第281次(長岡京市)発掘調査終了(62.10.9～)

11.　8　第43回研修会開催―別掲―

11.　9　円山城館跡(綾部市)発掘調査開始

八ケ坪遺跡(木津町)発掘調査開始

恭仁京跡(木津町)発掘調査終了(62.7.15～)

11. 10　新庄遺跡(久美浜町)発掘調査開始

11. 11　大極殿祭(向日市)出席(中谷次長・田中総務課長)

アバ田古墳群(久美浜町)発掘調査終了(62.7.10～)

11. 11・12　全国法人連絡協議会役員会(東京都大島町)出席(荒木事務局長・安達主事)

11. 12　園部城跡(園部町)発掘調査関係者説明会実施

長岡京跡右京第285次(長岡京市)発掘調査開始

11. 14　上人ケ平遺跡(木津町)発掘調査現地説明会実施

11. 18　小貝遺跡(綾部市)発掘調査関係者説明会実施

園部城跡(園部町)発掘調査終了(62.10.2～)

11. 20　全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピューター等導入研究委員会(京都市)出席(山口企画係長・土橋調査員)

両丹文化財保護連絡協議会(舞鶴市)出席(杉原調査第2課長)

11. 21　シゲツ窯跡(舞鶴市)発掘調査現地説明会実施

11. 25　新ケ尾東古墳群，普甲・稲荷古墳群(弥栄町)発掘調査現地説明会実施

長岡京跡右京第277次(長岡京市)発掘調査関係者説明会実施

長岡京連絡協議会開催

11. 26　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック役員会開催(於：京都パストラル)―当センター担当―

写真測量研修会(大阪市)参加(山口企画係長・水谷第2係長・田中調査員)

2. 普及啓発事業

9.　6　第6回小さな展覧会―昭和61年度発掘調査の成果から―・京都府内巡回展示「鏡と古墳」―景初四年鏡と芝ケ原古墳―終了(62.8.22～)

10.　1　特別講演会開催―於：京都こども文化会館「広峯古墳と景初四年銘鏡」―福山敏男「景初四年銘をめぐって」，崎山正人「広峯古墳の発掘調査」，都出比呂志「前期古墳の諸様相」，菅谷文則「景初四年銘鏡をめぐる諸問題」，近藤喬一「三角縁神獣鏡と紀年銘鏡」，

11.　8　第43回研修会開催―篠山盆地の遺跡を訪ねて―

松井忠春―篠山城跡・石クド古墳・雲部車塚古墳

伊野近富―立杭窯跡・丹波古陶館

府下報告書等刊行状況一覧（62.1～12）

発掘調査報告書関係

『埋蔵文化財発掘調査概報(1987)』京都府教育委員会　1987.3

『京都府方言収集緊急調査報告書』同上　1987.3

『重要文化財金剛院塔婆(三重塔)修理工事報告書』同上　1987

『中臣遺跡発掘調査概報　昭和61年度』京都市文化観光局　1987.3

『北野廃寺発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『中久世遺跡発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『鳥羽離宮跡発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『平安京跡発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『法勝寺跡発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『醍醐1号墳発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『一乗寺向畑町遺跡発掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『京都市内遺跡試掘調査概報　昭和61年度』同上　1987.3

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第14集　向日市教育委員会　1987.3

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第20集　同上　1987.3

『向日市埋蔵文化財調査報告書』第21集　同上　1987.3

『長岡京市文化財調査報告書』第18集　長岡京市教育委員会　1987.3

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第6集　大山崎町教育委員会　1987.3

『宇治市文化財調査報告』第1冊　宇治市教育委員会　1987.3

『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第17集　城陽市教育委員会　1987.3

『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第7集　田辺町教育委員会　1987.3

『井手町文化財調査報告』第2集　井手町教育委員会　1987.3

『京都府山城町埋蔵文化財調査報告書』第4集　山城町教育委員会　1987.3

『綾部市文化財調査報告』第14集　綾部市教育委員会　1987.3

『福知山市文化財調査報告書』第12集　福知山市教育委員会　1987.3

『宮津市文化財調査報告』第12集　宮津市教育委員会　1987.3

『宮津市文化財調査報告』第13集　同上　1987.3

『京都府伊根町文化財調査報告』第1集　伊根町教育委員会　1987.3

『京都府網野町文化財調査報告』第5集　網野町教育委員会　1987.3

『大宮町文化財調査報告』第4集　大宮町教育委員会　1987.3

『京都府丹後町文化財調査報告書』第３集　丹後町教育委員会　1987. 3

『史跡方広寺石塁修復工事報告』京都国立博物館　1987. 3

『学校法人両洋学園内平安京跡発掘調査報告書』学校法人両洋学園　1987

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

「上人ケ平遺跡・瓦谷遺跡」（京埋セ現地説明会資料　No. 87-01）　1987. 2. 21

「平安京跡」（同　No. 87-02）　1987. 3. 7

「青野遺跡」（同　No. 87-03）　1987. 3. 12

「野崎古墳群」（同　No. 87-04）　1987. 5. 6

「高山古墳群・高山遺跡」（同　No. 87-05）　1987. 5. 20

「平安京跡(2)」（同　No. 87-06）　1987. 5. 23

「谷内遺跡」（同　No. 87-07）　1987. 7. 9

「平山城館跡・平山東城館跡」(同　No. 87-08)　1987. 7. 25

「高山12号墳」（同　No. 87-09）　1987. 8. 23

「栗ケ丘横穴群」（同　No. 87-10）　1987. 9. 5

「アバ田古墳群」（同　No. 87-11）　1987. 10. 28

「上人ケ平遺跡」（同　No. 87-12）　1987. 11. 14

「シゲツ窯跡」（同　No. 87-13）　1987. 11. 21

「普甲古墳群・稲荷古墳群」（同　No. 87-14）　1987. 11. 25

「新ケ尾東古墳群」(同　No. 87-15)　1987. 11. 25

「小西町田遺跡」（同　No. 87-16）　1987. 12. 14

中間報告

「西小田古墳群」（京埋セ中間報告資料　No. 87-01）　1987. 1. 14

「久保田遺跡」(同　No. 87-02)　1987. 2. 2

「長岡京跡右京第251次」（同　No. 87-03）　1987. 2. 9

「木津川河床遺跡」（同　No. 87-04）　1987. 2. 10

「栗ケ丘古墳群(2)」（同　No. 87-05）　1987. 3. 12

「志高遺跡(2)」（同　No. 87-06）　1987. 3. 13

「長岡京跡右京第255次」（同　No. 87-07）　1987. 3. 17

「長岡京跡右京第266次」（同　No. 87-08）　1987. 7. 20

「丹波亀山城跡」(同　No. 87-09)　1987. 9. 25

「平安京跡」(同　No. 87-10)　1987. 9. 29

「上中遺跡」(同　No. 87-11)　1987. 10. 5

「興戸遺跡」(同　No. 87-12)　1987. 10. 6

「恭仁京跡・八後遺跡」(同　No. 87-13)　1987. 10. 15

「園部城跡」(同　No. 87-14)　1987. 11. 12

「小貝遺跡」(同　No. 87-15)　1987. 11. 18

「長岡京跡右京第277次」(同　No. 87-16)　1987. 11. 25

「泉源寺遺跡」(同　No. 87-17)　1987. 12. 10

「八ケ坪遺跡」(同　No. 87-18)　1987. 12. 11

府下現地説明会資料

「平安宮内裏内郭跡」(財)京都市埋蔵文化財研究所　1987. 9. 20

「北白川追分町遺跡―京都大学BD33区―」京都大学構内遺跡調査会　1987. 10. 5

「長岡京跡左京第169次(7ANEJS-7地区)」向日市教育委員会　1987. 4. 18

「長岡宮跡第196次(7AN12G地区)」同上　1987

「宮村遺跡」宮津市教育委員会　1987. 4. 11

「小田古墳」同上　1987. 9. 5

「寺岡遺跡」野田川町教育委員会　1987. 8. 22

「須代遺跡」加悦町教育委員会　1987. 8. 29

「鳴谷東1号墳第2次」立命館大学文学部　1987. 8. 29

その他の雑誌・報告・論文等

『京都府埋蔵文化財情報』第23号　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987. 3

『京都府埋蔵文化財情報』第24号　同上　1987. 6

『京都府埋蔵文化財情報』第25号　同上　1987. 9

『京都府埋蔵文化財情報』第26号　同上　1987. 12

『京都府遺跡調査概報』第22冊　同上　1987. 3

『京都府遺跡調査概報』第23冊　同上　1987. 3

『京都府遺跡調査概報』第24冊　同上　1987. 3

『京都府遺跡調査概報』第25冊　同上　1987. 3

『京都府遺跡調査概報』第26冊　同上　1987. 12

『京都府遺跡調査報告書』第７冊　同上　1987. 3

『京都府遺跡調査報告書』第８冊　同上　1987. 3

『京都府埋蔵文化財論集』第１集　同上　1987. 1

『考古展　第６回小さな展覧会』同上　1987. 8

『京都の文化財』第５集　京都府教育委員会　1987. 3

『文化財保護』No. 8　同上　1987. 8

『京都市の文化財』京都市文化観光局　1987. 3

『京都市文化財ブックス』第２集　同上　1987. 3

『京都市文化財だより』第７～８号　同上　1987. 6～10

『宇治田原町史』資料篇第３集　宇治田原町教育委員会　1987. 6

『宇治田原町史』資料篇第４集　同上　1987. 9

『山城町史』本文編　山城町　1987. 3

『市制施行50周年記念誌　福知山市50年のあゆみ』福知山市役所　1987. 4

『宮津市立前尾記念文庫５周年記念　前尾繁三郎先生遺品展』宮津市教育委員会　1987. 1

『舞鶴市史編さんだより』No. 173～178　舞鶴市史編さん室　1987. 1～7

『近代丹後の黎明　特別陳列図録20』京都府立丹後郷土資料館　1987. 4

『伊根浦の歴史と民俗　特別陳列図録21』同上　1987. 7

『山城郷土資料館だより』第６号　京都府立山城郷土資料館　1987. 3

『企画展資料６　八幡正法寺の絵画と書跡』同上　1987. 4

『発掘成果速報―昭和61年度の調査成果から―』同上　1987. 9

『京都府資料目録追録』No. 3　京都府立総合資料館　1987. 3

『京都府立総合資料館収蔵行政文書簿冊総目録』２　同上　1987. 3

『資料館紀要』第15号　同上　1987. 3

『総合資料館だより』No. 70～72　同上　1987. 1～7

『昭和60年度　京都国立博物館年報』京都国立博物館　1987. 3

『特別展　京都市域の群集墳』京都市考古資料館　1987. 3

『考古資料館年報　昭和60・61年度』同上　1987. 3

『京都市歴史資料館紀要』第４号　京都市歴史資料館　1987. 7

『泉屋博古館紀要』第４巻　(財)泉屋博古館　1987. 8

『研究紀要』第２号　向日市文化資料館　1987. 3

『第３回特別展示図録』同上　1987. 10

『特別展　宇治の仏像―美と心，現在に―』宇治市歴史資料館　1987. 10

『第3回特別展　大堰川の歴史―母なる川のうつりかわり―』亀岡市文化資料館　1987.11

『福天地方の自然』第8集　福知山市文化資料館　1987.3

『図書目録』宮津市立前尾記念文庫　1987.3

『京都大学構内遺跡調査研究年報　昭和59年度』京都大学埋蔵文化財研究センター　1987.2

『京都大学文学部博物館』京都大学文学部　1987.11

『同志社大学考古学シリーズⅢ　考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズ刊行会　1987.6

『文化財情報』No.56～59　(財)京都府文化財保護協会　1987.2～11

『会報』第62～63号　(財)京都古文化保存協会　1987.1～10

『古代文化』第336～346号　(財)古代學協會　1987.1～11

『土車』第41～43号　同上　1987.4～7

『京都考古』第46号　京都考古刊行会　1987.9

『志くれてい』第20～22号　(財)冷泉家時雨亭文庫　1987.3～9

『波布留曽能』第4号　精華町の自然と歴史を学ぶ会　1987.3

『口丹波史料(三)』口丹波史談会　1987.1

『史談ふくち山』第418～423号　福知山史談会　1987.1～6

『鏡と古墳―景初四年鏡と芝ケ原古墳』京都府立山城郷土資料館・京都府立丹後郷土資料館・京都府教育委員会・(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　1987.7

受贈図書一覧（62.8.11～11.30）

釧路市埋蔵文化財調査センター	釧路市桜ケ岡1・2 遺跡調査報告書，釧路市桜ケ岡3遺跡発掘調査報告書
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団	関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財発掘調査報告書 第5・11・12・14・16集，小角田前遺跡，年報6，本郷尺地遺跡
(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団	年報7，埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第61～67集
(財)東京都埋蔵文化財センター	東京都埋蔵文化財センター研究論集 V，資料目録1，東京都埋蔵文化財センター調査報告書 第8集，年報7
富山県埋蔵文化財センター	富山県埋蔵文化財センター10年の歩み，特別企画展 ひすい－地中からのメッセージ－
石川県立埋蔵文化財センター	年報第7号，金沢市笠舞A遺跡(Ⅲ)，宿向山遺跡，宿東山遺跡，中海遺跡，篠原遺跡，吉竹遺跡，普正寺遺跡，敷地鉄橋遺跡，米光萬福寺遺跡，永町ガマノマガリ遺跡
(財)長野県埋蔵文化財センター	年報3 1986
(財)滋賀県文化財保護協会	県営かんがい排水事業関連遺跡発掘調査報告書 Ⅳ-1，支那湖底遺跡発掘調査概要，支那湖底遺跡発掘調査概要報告書，新守山川改修工事関連遺跡発掘調査概要 Ⅳ，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 Ⅶ-3，同 XⅣ-4，県営干拓地等農地整備事業関係発掘調査報告書 Ⅲ
(財)大阪文化財センター	第5回 近畿地方埋蔵文化財研究会資料
(財)大阪府埋蔵文化財協会	(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第6～9輯，第2回 泉州の遺跡
(財)大阪市文化財協会	難波宮址の研究 第8，特別史跡大坂城，同 Ⅱ
(財)東大阪市文化財協会	西の口遺跡第1次発掘調査概要，若江遺跡第25次発掘調査報告
(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告 10～11
奈良国立文化財研究所	飛鳥・藤原宮発掘調査概報 17，藤原京左京二条一坊・同二条二坊発掘調査報告，藤原京右京七条一坊西南坪発掘調査報告，昭和61年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報，平城京左京四条二坊一坪
(財)元興寺文化財研究所	昭和58年度国庫補助による出土遺物の実態調査報告書 昭和59年度国庫補助による出土遺物の実態調査報告書 昭和60年度国庫補助による出土遺物の実態調査報告書 昭和61年度国庫補助による出土遺物の実態調査報告書
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書 第25集

(財)北九州市教育文化事業団	研究紀要一創刊号一，埋蔵文化財調査室年報 昭和60年度，北九州市埋蔵文化財調査報告書 第54～65集
平取町教育委員会	平取町二風谷遺跡
陸前高田市教育委員会	陸前高田市埋蔵文化財報告書 第11集
水沢市教育委員会	岩手県水沢市佐倉河 胆沢城跡，水沢市文化財報告書 第16集
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財保護行政年報
群馬県教育委員会	丸山・北原
志木市教育委員会	志木市遺跡調査会調査報告 第3集
	新邸遺跡第2地点・西原大塚遺跡第4地点発掘調査報告書
東京都教育庁	学芸研究紀要 第4集，東京都埋蔵文化財調査報告 第14集，八丈町倉輪遺跡
小松市教育委員会	市内遺跡詳細分布調査報告書 Ⅰ，戸津六字ケ丘古窯跡群発掘調査報告書，第一小学校々地内漆町遺跡発掘調査報告書
武生市教育委員会	武生市埋蔵文化財調査報告 Ⅲ～Ⅵ
多治見市教育委員会	北丘25号窯・26号窯発掘調査報告書，大原古窯跡群発掘調査報告書
蒲郡市教育委員会	愛知県蒲郡市月田遺跡発掘調査報告書
長久手町教育委員会	大草城跡地形測量等調査報告書
度会町教育委員会	度会町文化財調査報告 3
滋賀県教育委員会	湖岸堤天神川水門工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書 2，宝持坊遺跡発掘調査報告書，草津川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概要 2，ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書 Ⅵ-1，同 Ⅻ-4
草津市教育委員会	草津市文化財調査報告書 10・12
彦根市教育委員会	彦根市埋蔵文化財調査報告 第12～13集
八日市市教育委員会	八日市市文化財調査報告 (8)
五個荘町教育委員会	五個荘町文化財調査報告 10～12
湖北町教育委員会	八日市遺跡発掘調査報告書
中主町教育委員会	中主町文化財調査報告書 第8・9・12集
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書 第7集
山東町教育委員会	山東町埋蔵文化財調査報告書 Ⅱ
泉佐野市教育委員会	昭和61年度 泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 Ⅶ，檀波羅密寺
泉南市教育委員会	泉南市文化財調査報告書 第3・4・10集，海会寺
寝屋川市教育委員会	高宮八丁遺跡
藤井寺市教育委員会	藤井寺市文化財保護事業年報 昭和54・55・56年度，石川流域遺跡群発掘調査報告 Ⅱ，藤井寺の遺跡ガイドブック №3～4
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告 第18・20集

美原町教育委員会	美原町史 第2巻
神戸市教育委員会	森北町遺跡発掘調査報告書，オキダ古墳群発掘調査報告書，昭和59年度 神戸市埋蔵文化財年報
加古川市教育委員会	加古川市文化財調査報告 8～9，古代の志方(古墳時代)
三田市教育委員会	天神遺跡
八鹿町教育委員会	箕谷古墳群
新宮町教育委員会	新宮町文化財調査報告 7～8
田原本町教育委員会	田原本町埋蔵文化財調査概要 5・7～9
香芝町教育委員会	昭和61年度 桜ケ丘第1地点遺跡第5次発掘調査概報
島根県教育庁文化課	国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書，朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡発掘調査報告書 Ⅱ～Ⅲ，北松江幹線新設工事・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書
大社町教育委員会	出雲・原山遺跡発掘調査概報
香川県教育委員会	瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財調査概報(Ⅷ)，四国横断自動車道建設にともなう埋蔵文化財発掘調査実績報告 昭和61年度，語りかける埋蔵文化財 下川津遺跡
行橋市教育委員会	前田山遺跡
久留米市教育委員会	第11回 くるめの考古資料展，久留米市文化財調査報告書 第49～52集
佐賀県教育委員会	佐賀県文化財調査報告書 第86～87集，九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査概報 第9集
日田市教育委員会	日田地区遺跡群発掘調査概報 Ⅱ
宮崎県教育庁	宮崎県文化財調査報告 第30集，昭和61年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概報，宮崎大学跡地発掘調査報告書 Ⅰ，宮崎学園都市埋蔵文化財発掘調査概報（Ⅵ）
東郷町教育委員会	東郷町文化財調査報告書 第1集
北上市立博物館	北上川流域の自然と文化シリーズ(9)，北上市立博物館研究報告 第6号
秋田県立博物館	秋田県立博物館館報 昭和61年度
栃木県立博物館	開館5周年記念図録，栃木県立博物館調査研究報告書 茂木町小貫地区文化財所在調査
群馬県立歴史博物館	中国陝西省文物展
国立国会図書館	日本全国書誌週刊版 №1612
板橋区立郷土資料館	板橋区立郷土資料館紀要 第6号，中山道と板橋宿，いたばしの文

	化財，文化財シリーズ 第17・51～53集，東京都板橋区成増との山遺跡予備調査報告書
大田区立郷土博物館	特別展一大田の文化財一信仰と絵画
世田谷区立郷土資料館	世田谷区立郷土資料館常設展示解説，世田谷区立郷土資料館概要，テーマ展示解説一大場家と代官屋敷一，同一あかりのコレクション一
東京都中野区立中野文化センター郷土史料室	北江古田遺跡発掘調査報告書(87-31～32)，中野区片山遺跡発掘調査報告書
出光美術館	出光美術館館報 第57～58号
(財)五島美術館	五島美術館展覧会図録 №108
富山市考古資料館	富山市考古資料館紀要 第6号，栗山コレクション目録
石川県立歴史博物館	北国を駆けた戦国の武将たち
福井県立博物館	福井県立博物館紀要 第2号
山梨県立考古博物館	山梨県埋蔵文化財センター調査報告 第24・25・30集，古代官道と甲斐の文化一都と甲斐を結ぶ古代絹の道一
愛知県陶磁資料館	愛知県陶磁資料館研究紀要 6，特別展 近世の丹波焼
名古屋市博物館	名古屋市博物館年報 №10，名古屋市博物館研究紀要 第10巻，開館10周年記念特別展 城下町・名古屋 江戸時代の町と人，館蔵品目録 II
豊橋市美術博物館	豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書 第6～7集
大阪市立博物館	第108回特別展 動物の考古学
柏原市歴史資料館	高井田遺跡 II，玉手山遺跡 1983・1984年度
神戸市立博物館	研究紀要 第4号，年報 №4，館蔵品目録 考古・歴史の部 4，同地図の部 4，同美術の部 4
豊岡市立郷土資料館	豊岡市立郷土資料館報告書 16～17，北浦古墳群・立石墳墓群(第1～3分冊)
洲本市立淡路文化史料館	図説・邪馬台国の時代と淡路島
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	壬申の乱 飛鳥資料館図録 第18
橿原市千塚資料館	企画展 弥生人のくらし一生活の中の道具一
島根県立八雲立つ風土記の丘	開館15周年記念特別展「八雲立つ出雲国」奈良時代の都と出雲びとの世界
倉敷考古館	倉敷考古館 解説と周辺の歴史 87
九州歴史資料館	九州歴史資料館年報(昭和61年度)
佐賀県立九州陶磁文化館	九州陶磁文化館年報昭和61年度 №6
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	宇佐歴史民俗資料館年報 昭和61年度
東京大学文学部	東京大学文学部考古学研究室研究紀要 第5～6号

早稲田大学考古学会	古代 第84号
日本大学史学会	史叢 第39号
大手前女子学園有岡城跡調査委員会	三井パークマンション建設に伴う発掘調査報告書 有岡城跡・伊丹郷町Ⅰ
島根大学附属図書館	山陰地域研究(伝統文化) 第3号
岡山大学埋蔵文化財調査室	岡山大学構内遺跡調査研究年報4 1986年度
山口大学人文学部考古学研究室	呉町廃寺発掘調査報告書
山口大学埋蔵文化財資料館	山口大学構内遺跡調査研究年報 Ⅴ
熊本大学文学部考古学研究室	ハンタ遺跡
山武考古学研究所	山武考古学研究所年報 №4 昭和59・60年度，聖人塚遺跡，千葉県香取郡栗源町谷津坂遺跡発掘調査報告書，群馬県前橋市前山遺跡発掘調査報告書，中島遺跡
名著出版	歴史手帖 第167～170号
鶴川第二地区遺跡調査会	真光寺・広袴遺跡群Ⅰ
(財)山梨文化財研究所	大泉村埋蔵文化財調査報告 第5集 姥神遺跡
(財)古代學協會	古代文化 第343～346号
(財)黒川古文化研究所	第8・13・18・21・26～31回展観目録
朝鮮学会	朝鮮学報 第124輯
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum kyushu 第24巻
京都府教育委員会	京都府の方言，京都の文化財(第5集)，重要文化財伊佐家住宅内蔵・東蔵・乾蔵・二階蔵・木小屋・高塀・他附属建物修理工事報告書，重要文化財 金剛院塔婆(三重塔)修理工事報告書
向日市教育委員会	向日市埋蔵文化財調査報告書 第20集
宮津市教育委員会	宮津市立前尾記念文庫五周年記念 前尾繁三郎先生遺品展
福知山市教育委員会	駅南地区発掘調査概要，寺ノ段古墳群・広峯古墳群
田辺町教育委員会	大住南塚古墳発掘調査概報 Ⅱ
宇治田原町教育委員会	宇治田原町史資料篇 第四集
伊根町教育委員会	カルビ古墳発掘調査概要
丹後町教育委員会	竹野遺跡
京都府立山城郷土資料館	企画展資料『発掘成果速報―昭和61年度の調査成果から―』
京都国立博物館	史跡方広寺石塁修復工事報告
京都市考古資料館	京都市考古資料館年報≪昭和60・61年度≫
泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第4巻
向日市文化資料館	第3回特別展示図録「郷・村・町～京近郊 人のくらしをたどって

	～」，向日市文化資料館研究紀要 第2号
宇治市歴史資料館	特別展 宇治の仏像ー美と心，現在にー
亀岡市文化資料館	第3回特別展 大堰川の歴史ー母なる川のうつりかわりー
宮津市立前尾記念文庫	図書目録
京都大学文学部	京都大学文学部博物館
福知山市役所	市制施行50周年記念誌 福知山市50年のあゆみ
口丹波史談会	口丹波史料(三) 千年山集七
学校法人　両洋学園	学校法人両洋学園内平安京跡発掘調査報告書
泉　森　　皎	速報展「大和を掘る」ー1986年度発掘調査速報ー
荻　野　繁　春	福井考古学会会誌第5号 斉藤　優先生喜寿記念号
中　西　　亨	開館5周年記念特別展 若狭の秘仏

—編集後記—

今年も年の瀬を迎えて，何かと気ぜわしくなりましたが，情報26号ができましたのでお届けします。

本号では，25号に続いて，小泉信吾氏が「盤上遊戯史から見た方格規矩紋について」と題する玉稿をお寄せ下さいました。方格規矩紋を遊戯史の立場から解釈するという，大変ユニークな内容になっています。また，木津川河床遺跡で検出された噴砂についても，本情報の中ではあまり見られない内容であり，貴重な成果を掲載することができました。内容的には，本号も充実したものになりました。よろしく御味読下さい。　　（編集担当＝土橋　誠）

京都府埋蔵文化財情報 第26号

昭和62年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
℡（075)933-3877（代）

印刷　中西印刷株式会社
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡（075)441-3155（代）